松江市文化財調査報告書　第99集

田和山遺跡群発掘調査報告1

田和山遺跡

平成17(2005)年3月

松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団

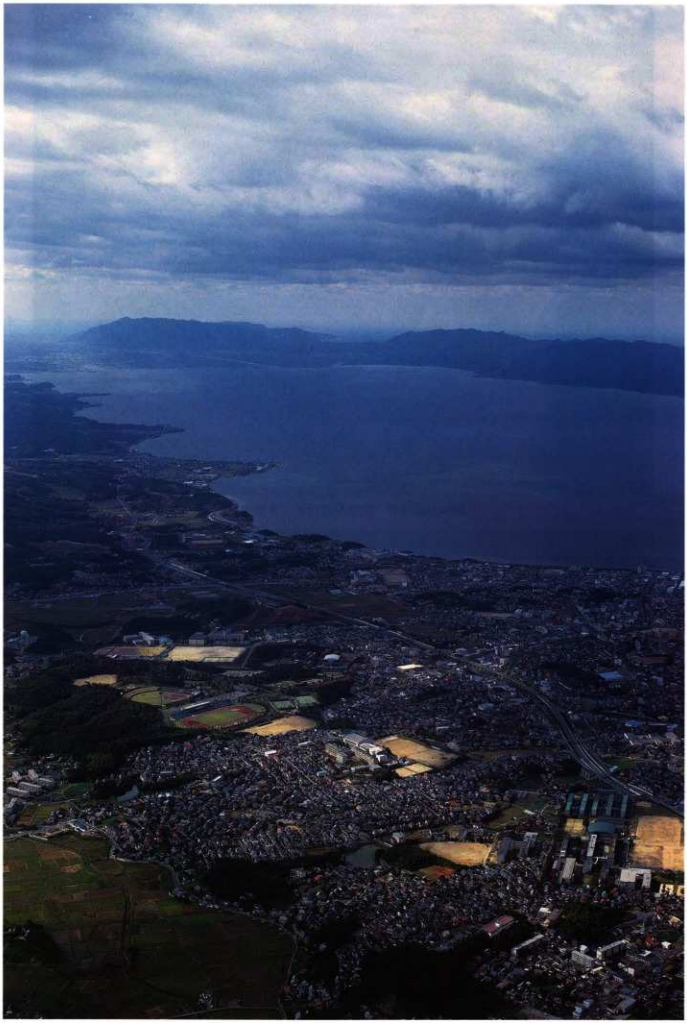
松江市文化財調査報告書　第99集

田和山遺跡群発掘調査報告1

田和山遺跡

平成17(2005)年3月

松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団



田和山遺跡群　空中写真遠景（東より）※写真中央左の茶色地が田和山遺跡群

田和山遺跡群　空中写真近景（北東より）

田和山遺跡群　空中写真（真上より）

田和山遺跡　近景（南西より）

山頂部　空中写真（真上より）

第１・２・３環壕（０・Ａ・Ｂ区）（南西より）※島根県埋蔵文化財センター提供　牛嶋茂氏撮影

第１環壕（４区）　つぶて石出土状況（北東より）

SB－02から山頂を望む（西より）

焼失住居SI－09　炭化木材検出状況（北西より）

巻頭図版6

第３環壕（０区）（北東より）※牛嶋茂氏撮影

例　言

1．本書は、松江市土地開発公社の依頼を受けて、松江市教育委員会と財団法人松江市教育文化振興事業団が平成９年～16年にかけて実施した田和山遺跡群発掘調査の報告書である。

2．本報告書は、田和山遺跡群の国史跡となった弥生環濠遺跡周辺を「田和山遺跡」編、国史跡外の南部周辺を「A・B遺跡」編とし、２分冊にして報告した。

3．本発掘調査地は、島根県松江市乃木福富町642～644、乃白町31～41・1290～1294、浜乃木町2802～2804・1159～1161に所在する。

4．調査組織は次のとおりである。

依頼者　松江市土地開発公社

主体者　松江市教育委員会

〔平成９年度〕（発掘調査）

事務局　松江市教育委員会

原　敏（教育長）、谷　正次（生涯学習課長）、岡崎雄二郎（文化財室長）、中尾秀信（文化財係長）、金山正樹（主事）

実施者　財団法人松江市教育文化振興事業団

大塚雄史（理事長）、板垣信治（事務局長）、瀬古諒子（調査係長）

調査員　瀬古諒子（調査係長）、後藤哲男（主任）、落合昭久（調査員）、宮本亜希子、廣濱貴子、廣江光洋、青山悦朗、藤崎和子（以上調査補助員）

〔平成10年度〕（発掘調査）

事務局　松江市教育委員会

原　敏（教育長）、谷　正次（生涯学習課長）、岡崎雄二郎（文化財室長）、吉岡弘行（文化財係主幹）、金山正樹（主事）

実施者　財団法人松江市教育文化振興事業団

宮岡寿雄（理事長）、北村悦男（専務理事）、柳浦孝行（事務局長）、瀬古諒子（調査係長）

調査員　瀬古諒子（調査係長）、後藤哲男（主任）、古藤博昭、落合昭久（以上調査員）、廣濱貴子、廣江光洋（以上調査補助員）

〔平成11年度〕（発掘調査）

事務局　松江市教育委員会

原　敏（教育長）、谷　正次（生涯学習課長）、岡崎雄二郎（文化財室長）、吉岡弘行（文化財係主幹）、金山正樹（主事）

実施者　財団法人松江市教育文化振興事業団

宮岡寿雄（理事長）、北村悦男（専務理事）、福井勝美（常務理事）（6月1日から）、柳浦孝行（事務局長）、瀬古諒子（調査係長）

調査員　瀬古諒子（調査係長）、後藤哲男（主任）、落合昭久、藤原　哲（以上調査員）、廣濱貴子、廣江光洋、青山悦朗、松下　剛（以上調査補助員）

〔平成12年度〕（発掘調査）

事務局　松江市教育委員会

原　敏（教育長）（9月30日まで）、伊藤　忠志（教育長）（10月1日から）、川原良一（生涯学習課長）、岡崎雄二郎（文化財室長）、吉岡弘行（文化財係主幹）、古藤博昭（主任主事）

実施者　財団法人松江市教育文化振興事業団

宮岡寿雄（理事長）（5月6日まで）、安藤瑞也（理事長職務代理者副理事長）（5月6日から9月6日まで）、松浦正敬（理事長）（9月7日から）、米田喜雄（専務理事）、福井勝美（常務理事）、柳浦孝行（事務局長）、瀬古諒子（調査係長）

調査員　落合昭久（調査員）、廣濱貴子、廣江光洋（調査補助員）

〔平成13年度〕（発掘調査）

事務局　松江市教育委員会

山本弘正（教育長）、岡崎雄二郎（文化財課長）、飯塚康行（文化財係長）、古藤博昭（主任）

実施者　財団法人松江市教育文化振興事業団

松浦正敬（理事長）、米田喜雄（専務理事）、福井勝美（常務理事）、吉岡正夫（事務局長）、瀬古諒子（調査係長）

調査員　落合昭久（調査員）、青山悦朗（調査補助員）

〔平成14年度〕（発掘調査）

事務局　松江市教育委員会

山本弘正（教育長）、岡崎雄二郎（文化財課長）、飯塚康行（文化財係長）

実施者　財団法人松江市教育文化振興事業団

松浦正敬（理事長）、田中寿美夫（専務理事）、吉岡正夫（事務局長）、瀬古諒子（調査係長）

調査員　落合昭久（調査員）、金坂有史（調査補助員）

〔平成15年度〕（報告書作成）

事務局　松江市教育委員会

山本弘正（教育長）、岡崎雄二郎（文化財課長）、飯塚康行（文化財係長）

実施者　財団法人松江市教育文化振興事業団

松浦正敬（理事長）、田中寿美夫（専務理事）、長野正夫（事務局長）、瀬古諒子（調査係長）

調査員　落合昭久（調査員）、花田陽子（調査補助員）

〔平成16年度〕（報告書作成）

事務局　松江市教育委員会
山本弘正（教育長）、岡崎雄二郎（文化財課長）、飯塚康行（文化財係長）
実施者　財団法人松江市教育文化振興事業団
松浦正敬（理事長）、田中寿美夫（専務理事）、長野正夫（事務局長）、瀬古諒子（調査係長）
調査員　落合昭久（調査員）、野津里佳（調査補助員）

5．調査の実施及び報告書の作成にあたっては、以下の方々より多大なご指導、ご教示、ご協力を頂いた。記して感謝の意を表したい。
浅川滋男、伊藤徳広、稲垣寿彦、池淵俊一、牛嶋　茂、大塚初重、石野博信、岩水省三、角田徳幸、金関　恕、木野本和之、小林謙一、坂本豊治、佐原　真、澤田順弘、下條信行、白井克也、全　浩天、竹広文明、種定淳介、田中義昭、田畑　茶、椿　真治、寺前直人、時枝克安、長尾かおり、中村唯史、仁木　聡、西谷　正、丹羽野裕、福宮田佳男、蓮岡法暲、服部芳人、濱田竜彦、春成秀爾、東森市良、平川　南、広瀬和雄、深田　浩、間壁葭子、松尾充晶、松木武彦、松本岩雄、水野正好、宮本長二郎、森岡秀人、山内靖喜、山田康弘、山本一朗、湯村功、吉田　広、米田克彦、渡辺貞幸、渡辺正巳、藁科哲男

6．本書挿図中の方位は第Ⅱ座標系X軸、レベルは海抜高である。

7．本書で使用した遺構記号は、以下のとおりである。
SI…竪穴住居跡、SB…掘立柱建物跡、SK…土壙、SD…溝、P…柱穴

8．本書の土器区分は、弥生土器を松本編年、[1] 須恵器を出雲編年に[2] 従って区分した。

9．本文、挿図、図版の遺物番号は、それぞれ対応する。

10．本書に記載した遺物の実測、浄書、遺構の浄書は主として以下の者が行った。
遺物（実測）　花田陽子、和田郁子、福田万里、青山悦朗、野津里佳、陶山　隆、谷　洋一郎、樋口英行、中山愉希江、和田守加奈、飛田恵美子、稲垣弘美、飯野正子、松尾淳美、北島和子、岡崎雄二郎、瀬古諒子、江川幸子、落合
（浄書）　飯野正子、松尾澄美、花田陽子、稲垣弘美、北島和子、時安順子
遺構（浄書）　飯野正子、松尾澄美、北島和子
なお、旧石器は丹羽野裕氏（島根県埋蔵文化財調査センター）に鑑定・実測して頂いた。

11．本書に記載した現場写真は、瀬古、後藤哲男、古藤博昭、落合が撮影し、遺物写真は、落合が撮影した。また、空中写真は業者に委託し、巻頭写真の一部は牛嶋　茂氏（独立行政法人奈良文化財研究所）に撮影をして頂いた。

12. 本書の執筆は、第1章を岡崎雄二郎、第2章を藤原　哲、落合が共同で執筆し、その他は落合が行った。なお、第5章は岡崎及び、パリノサーヴェイ株式会社、古環境研究所、加速器分析研究所、小林謙一・春成秀爾・坂本　稔・尾嵜大真・新免歳靖・松崎浩之（国立歴史民俗博物館）（東京大学原子力研究総合センター・タンデム加速器研究部門）、時枝克安（元島根大学総合理工学部教授）、山内靖喜（元島根大学総合理工学部教授）、藁科哲男（京都大学原子炉実験所）、竹広文明（広島大学大学院文学研究科助教授）に委託及びお願いして執筆頂いた。

13. 本書の編集は、落合が行った。

14. 出土遺物、実測図面、写真等は松江市教育委員会で保管している。

註　1）松本岩雄「出雲・隠岐地域」『弥生上器の様式と編年山陰・山陰編』木耳社
2）大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌第11集』島根考古学会　1994

目　　次

第１章　調査に至る経緯 ……（岡崎）1

第２章　位置と環境 ……（藤原・落合）3
第１節　位置と地理的環境 …… 3
第２節　歴史的環境 …… 5

第３章　調査の概要 ……（落合）9
第１節　田和山遺跡群の調査区について …… 9
第２節　田和山遺跡群の調査経過と概要 …… 11

第４章　発掘調査の結果 ……（落合）15
第１節　弥生時代の遺構 …… 15
１．山頂部 …… 15
２．環濠部 …… 34
３．環濠外側遺構（住居部） …… 125
田和山遺跡出土の黒曜石製石核、剥片の接合資料について
……（広島大学大学院文学研究科　竹広文明）166
第２節　古墳時代以降の遺構 …… 226
１．山頂部 …… 226
２．環濠外側遺構（住居部） …… 233

第５章　自然科学分析と検討 …… 265
田和山遺跡の自然科学分析　（パリノサーヴェイ）
松江市、田和山遺跡群における自然化学分析　（古環境研究所）
松江市田和山遺跡出土試料の^{14}C年代測定
（国立歴史民俗博物館）（東京大学原子力研究総合センター・タンデム加速器研究部門）
年代測定結果報告書　（加速器分析研究所）
田和山遺跡の焼土の残留磁気の測定結果　（島根大学総合理工学部　時枝克安）
田和山遺跡環濠中の石塊について　（島根大学総合理工学部　山内靖喜）
田和山遺跡、友田遺跡、長砂11号遺跡出土のサヌカイト製遺物および黒曜石製遺物
の原材産地分析　（京都大学原子炉実験所　藁科哲男）
環濠内出土　石板状石製品について　（松江市教育委員会　岡崎雄二郎）

第６章　総括 ……（落合）314

挿　図　目　次

第１図　田和山遺跡群　位置図……3
第２図　松江平野周辺の地形略図……4
第３図　田和山遺跡群の位置と周辺の遺跡……6
第４図　田和山遺跡群　全体図（調査区配置図）……10
第５図　田和山遺跡　全体図（遺跡分布図）……13～14
第６図　山頂部　全体図……15
第７図　山頂頂部　全体図……16
第８図　山頂部　土層断面図……17
第９図　５本柱遺構　平面図・断面図……19
第10図　９本柱遺構・柱穴列　平面図・断面図…21
第11図　三日月状加工段　平面図・上層断面図…22
第12図　山頂部　北側段状加工面（２号墳）……23
第13図　山頂部～２号墳～第１環壕　土層断面図……24
第14図　山頂部　遺物出土状況……26
第15図　山頂部　出土土器（１）……27
第16図　山頂部　出土土器（２）……29
第17図　山頂部～環壕間の斜面　出土土器……29
第18図　山頂部　出土土製品（土玉）……29
第19図　山頂部　出土石器……30
第20図　１－a環壕　全体図……35
第21図　１区　１－a環壕　掘り始め跡　平面図……37
第22図　１区　１－a環壕　掘り始め跡　土層断面図……38
第23図　３区　１－a環壕　掘り始め跡　平面図……39
第24図　３区　１－a環壕　掘り始め跡　土層断面図……40
第25図　B区　１－a環壕　掘り始め跡　平面図・断面図……41
第26図　C区　１－a環壕　掘り始め跡　平面図・土層断面図……43
第27図　１－a・１－b・１－c環壕　１区～３区　平面図……44
第28図　１－a・１－b・１－c環壕　１区～３区　土層断面図……45
第29図　１－a環壕　A区　土層断面図……46
第30図　１－a環壕　出土土器（１）……47
第31図　１－a環壕　出土土器（２）……48
第32図　１－a環壕　出土土器（３）……49
第33図　C区　１－a環壕　掘り始め跡付近出土石板状石製品……51
第34図　１－a環壕　出土石器（石剣・石鏃）（１）……51
第35図　１－a環壕　出土石器（石鏃）（２）……52
第36図　１－a環壕　出土石器（３）……53
第37図　１－b環壕　出土土器……54
第38図　１－b環壕　出土石器（石鏃）（１）……55
第39図　１－b環壕　出土石器（２）……55
第40図　第１環壕（１－c環壕）・第２環壕・第３環壕　全体図……57～58
第41図　第１・２・３環壕　土層断面図……59～60
第42図　山頂部～環壕　断面図……61
第43図　１－c環壕　３区　平面図……62
第44図　１－c環壕　３区　土層断面図……63
第45図　１－c環壕　０区　平面図・断面図……65
第46図　１－c環壕　０区　土層断面図……66
第47図　１－c環壕　B区～C区　平面図……67
第48図　１－c環壕　B区～C区　土層断面図……68
第49図　１－c環壕　８区　平面図・断面図……69
第50図　第１環壕（１－c環壕）出土土器（１）…71
第51図　第１環壕（１－c環壕）出土土器（２）…72
第52図　第１環壕（１－c環壕）出土土器（３）…73
第53図　第１環壕（１－c環壕）出土土器（４）…74
第54図　第１環壕（１－c環壕）出土土器（５）…75
第55図　第１環壕（１－c環壕）出土土器（６）…77
第56図　第１環壕（１－c環壕）出土土器（７）…78
第57図　第１環壕（１－c環壕）出土土器（８）…79
第58図　第１環壕（１－c環壕）出土土器（９）…80
第59図　第１環壕（１－c環壕）出土土器（10）…81
第60図　第１環壕（１－c環壕）出土土製品（土玉）……82
第61図　第１環壕（１－c環壕）出土石製品……84
第62図　第１環壕（１－c環壕）出土石器（石剣・環状石斧）（１）……84
第63図　第１環壕（１－c環壕）出土石器（石鏃）（２）……85
第64図　第１環壕（１－c環壕）出土石器（石鏃）（３）……86
第65図　第１環壕（１－c環壕）出土石器（石鏃）（４）……87
第66図　第１環壕（１－c環壕）出土石器（石鏃）（５）……88

第67図　第１環壕（１－c環壕）出土石器
（石鏃）（６）……89
第68図　第１環壕（１－c環壕）出土石器（７）…90
第69図　第１環壕（１－c環壕）出土石器（８）…91
第70図　第１環壕（１－c環壕）出土石器（９）…92
第71図　第１環壕（１－c環壕）出土石器・
鉄器（10）……93
第72図　第１環壕（１－c環壕）出土川原石
（つぶて石）（１）……94
第73図　第１環壕（１－c環壕）出土川原石
（つぶて石）（２）……95
第74図　第１環壕（１－c環壕）出土旧石器……96
第75図　第２環壕　B区　平面図……97
第76図　第２環壕　B区　断面図……98
第77図　第２環壕　４区　平面図・断面図……99
第78図　第３環壕　４区～５区（環壕途切れ部）
平面図……101
第79図　第３環壕　４区～５区（環壕途切れ部）
土層断面図……102
第80図　第３環壕　４区（環壕途切れ部）平面図・
土層断面図……103
第81図　第３環壕　５区（環壕途切れ部）平面図・
土層断面図……103
第82図　第２環壕　出土土器（１）……105
第83図　第２環壕　出土土器（２）……106
第84図　第２環壕　出土土器（３）……107
第85図　第２環壕　出土土製品（土玉）……107
第86図　第２環壕　出土石器……108
第87図　第２環壕　出土旧石器……109
第88図　第３環壕　出土土器（１）……110
第89図　第３環壕　出土土器（２）……111
第90図　第３環壕　出土土器（３）……112
第91図　第３環壕　出土土製品（土玉）……112
第92図　第３環壕　出土石器……113
第93図　第３環壕　出土旧石器……114
第94図　環壕地滑り部　出土土器・石器……115
第95図　環壕間・環壕周辺　出土土器……116
第96図　環壕間・環壕周辺　出土石器（石鏃）…117
第97図　第１・２環壕間　出土鉄製器（鉄斧）…117
第98図　環壕外側遺構　全体図（弥生時代）……125
第99図　南西側環壕外側遺構　分布図（弥生時代）
……126
第100図　平坦加工面遺構　平面図・土層断面図
……127
第101図　平坦加工面遺構　土層断面図……128
第102図　平坦加工面遺構　出土土器・石器……129
第103図　平坦加工面遺構の東側斜面
出土石器（石鏃）……130
第104図　SB－01　平面図・土層断面図……131
第105図　SB－01　出土土器・石器……132
第106図　SB－01の東側斜面　出土土器……132
第107図　SB－02　平面図・断面図……133
第108図　SB－02　土層断面図……134
第109図　SB－02　出土土器・石器……135
第110図　SB－02　出土石器（石鏃）……136
第111図　SB－03　平面図・断面図……137
第112図　SB－03　土層断面図（１）……138
第113図　SB－03　土層断面図（２）……138
第114図　SB－03　出土土器・石器（石鏃）……139
第115図　SB－01・02・03　周辺出土土器……139
第116図　SB－04　平面図・土層断面図……140
第117図　SI－01　平面図・土層断面図…142～143
第118図　SI－01　変遷図……145
第119図　SI－01　出土土器・石器（石鏃・石斧）
……146
第120図　SB－05　平面図・土層断面図……147
第121図　SB－05　出土土器……148
第122図　SB－05　出土石器（石鏃）……148
第123図　南西側環壕外側遺構周辺
出土土器・石器……149
第124図　西側自然流水路　平面図……150
第125図　西側自然流水路　出土土器……152
第126図　西側自然流水路　出土土器・土製品
（分銅形土製品）……153
第127図　西側自然流水路　出土石器・鉄器……154
第128図　西側自然流水路　出土石器（石鏃）…155
第129図　西側自然流水路　出土旧石器……156
第130図　南丘陵西側　多目的広場跡　出土土器
……156
第131図　南丘陵西側　斜面下周辺　出土土器…156
第132図　北側環壕外側遺構　分布図（弥生時代）
……157
第133図　SI－02・03　周辺図・土層断面図……158
第134図　SI－02　平面図・断面図……159
第135図　SI－03　平面図・土層断面図……161
第136図　SI－03・SI－03周辺　出土土器……163
第137図　SI－03・SI－03周辺　出土石器（石鏃）
……164
第138図　SI－03・SI－03周辺　出土石器……165
第139図　SI－03　出土石器（黒曜石石核接合資料
実測図・写真）……167
第140図　SI－04・05　周辺図……168
第141図　SI－04　平面図・土層断面図……169
第142図　SI－05　平面図・土層断面図……170

第143図 SI－04・05 出土土器・石器……172
第144図 SB－06 平面図・土層断面図 ……173
第145図 SB－06 出土土器 ……174
第146図 SB－06 出土石器（石剣・石鏃）……175
第147図 SB－07 平面図・土層断面図 ……176
第148図 SB－07 出土土器 ……177
第149図 SB－07 出土石器 ……177
第150図 SB－08 平面図・土層断面図 ……178
第151図 SB－08 出土土器・石器（石鏃） …179
第152図 小ピット群1 平面図・断面図……180
第153図 小ピット群1 出土土器・土製品（土玉）・石器（石鏃）……180
第154図 SI－06、SB－24・09・10 分布図 …181
第155図 H区トレンチ 土層断面図 ……182
第156図 SI－06 平面図・断面図……183
第157図 SI－06 出土土器・土製品（土玉）・石器 ……184
第158図 SB－09 平面図・断面図 ……186
第159図 SB－09 出土石器（石鏃）……186
第160図 SB－09 出土土器 ……187
第161図 SB－10 平面図・断面図 ……188
第162図 SB－10 出土土器・石器（石剣・石鏃）……189
第163図 SI－06、SB－09・10周辺 出土土器 ……190
第164図 SI－06、SB－09・10周辺 出土石器 ……191
第165図 北側環壕外側遺構 分布図（弥生時代）2 ……192
第166図 I区トレンチ 土層断面図 ……193
第167図 SB－11 平面図・土層断面図 ……194
第168図 SB－11 出土土器 ……195
第169図 SB－11 出土石器（石斧）……196
第170図 SB－12 平面図・土層断面図 ……197
第171図 SB－12 出土土器 ……198
第172図 SB－13、SK－01 平面図・土層断面図 ……199
第173図 SB－13 断面図 ……200
第174図 SB－13 出土土器 ……201
第175図 SB－13 出土石器 ……201
第176図 SK－01 平面図・土層断面図 ……201
第177図 SB－14 平面図・断面図 ……203
第178図 SB－14 土層断面図 ……204
第179図 SB－14 出土土器・土製品（土玉）・石器 ……204
第180図 SB－14 出土旧石器 ……205
第181図 SB－15 平面図・土層断面図 ……206
第182図 SB－15 出土土器 ……207
第183図 SB－15 出土石器 ……207
第184図 SI－07・SB－16 平面図 ……208
第185図 SI－07 平面図・土層断面図……209
第186図 SI－07 出土土器・石器……210
第187図 SB－16 平面図・土層断面図 ……211
第188図 SB－16 出土土器・石器 ……212
第189図 小ピット群2 平面図・土層断面図…214
第190図 SI－08 平面図・断面図……215
第191図 SI－08 出土土器・石器……215
第192図 SI－09－1 平面図・断面図……216
第193図 SI－09－2 平面図・土層断面図 ……217～218
第194図 SI－09 焼土・炭化物出土状況……220
第195図 SI－09 出土土器……221
第196図 SI－09 出土石器……222
第197図 環壕外北側斜面周辺 出土石器……223
第198図 出土地不明 石器……224
第199図 出土地不明 石器（石鏃）……225
第200図 古墳時代以降の遺構 全体図……226
第201図 2号墳 調査前 地形図……227
第202図 2号墳 調査後 地形図……228
第203図 2号墳 墳丘 土層断面図……229
第204図 2号墳 主体部 平面図・土層断面図 ……230
第205図 2号墳 小墓壙 平面図・土層断面図 ……231
第206図 2号墳 出土土器……232
第207図 南西側環壕外側遺構 分布図（古墳時代以降）……233
第208図 SB－17 平面図・断面図 ……234
第209図 SB－17 出土土器 ……235
第210図 SB－29・30 平面図・断面図 ……236
第211図 SB－29・30 土層断面図 ……237
第212図 SB－29・30 出土土器 ……237
第213図 SI－10 平面図・土層断面図……238
第214図 SI－10 出土土器……239
第215図 SI－10 埋土層上層 出土土器・土製品 ……239
第216図 加工段1 平面図・土層断面図……240
第217図 加工段1 出土石器（石鏃）……240
第218図 SB－18・19 平面図・断面図 ……241
第219図 SB－18・19 土器溜り1 土層断面図 ……242
第220図 SB－18・19 出土土器 ……243
第221図 SB－18・19 土器溜り1・2 出土土器 ……243

第222図　SB－20　平面図・断面図 ……244
第223図　SB－21・22　平面図・断面図 ……246
第224図　SB－21・22、SK01　土層断面図 ……247
第225図　SB－21　出土土器・石器（勾玉未製品）
……247
第226図　SB－22　出土土器 ……247
第227図　SB－23　平面図・土層断面図 ……248
第228図　北～東側環濠外側遺構　分布図
（古墳時代以降） ……250
第229図　SI－11　平面図・土層断面図……251
第230図　SI－11　出土土器・石器……252
第231図　SI－11周辺　出土土器……252
第232図　SB－24　平面図・断面図 ……253
第233図　SB－24　出土土器・石器 ……254
第234図　SI－12　平面図・土層断面図……255
第235図　SI－12　出土土器……256
第236図　SI－12　出土石器……256
第237図　SI－13　平面図・断面図……257
第238図　SI－13　出土土器……258
第239図　SI－13　出土石器……258
第240図　石列　平面図・断面図……259
第241図　SB－25・26　平面図・断面図 ……260
第242図　SB－25・26　土層断面図 ……261
第243図　SB－25・26　出土土器・石器 ……261
第244図　SB－27　平面図・土層断面図 ……262
第245図　SB－27　出土土器 ……263
第246図　SB－28　平面図・断面図 ……264

写　真　目　次

巻頭図版1　田和山遺跡群　空中写真遠景
巻頭図版2　田和山遺跡群　空中写真近景・空中写真真上
巻頭図版3　田和山遺跡　近景・山頂部　空中写真
巻頭図版4　第1・2・3環壕・第1環壕　つぶて石出土状況
巻頭図版5　SB－02から山頂部を望む・SI－09炭化木材検出状況
巻頭図版6　第3環壕

図版1　田和山遺跡群　全景
図版2　田和山遺跡群　全景、田和山遺跡　東側
図版3　田和山遺跡群　遠景
図版4　田和山遺跡　山頂部～環壕部、田和山遺跡北側
図版5　保護の為ブルーシートに覆われた田和山遺跡
図版6　国史跡公園整備中の田和山遺跡
図版7　山頂部　調査前、山頂部より東方を望む、北東方向を望む
図版8　山頂部　全景・南半部
図版9　山頂部　三月月状加工段　上層堆積・出土遺物
図版10　山頂部　5本柱遺構
図版11　山頂部　9本柱遺構・柱穴列・機跡
図版12　山頂部　9本柱遺構・柱穴列
図版13　山頂部　機跡
図版14　山頂部　9本柱遺構、山頂部～2号墳、機跡内出土　つぶて石
図版15　環壕部　0・1・6区　調査前
図版16　3～4区　第1（1－c）・第2・第3環壕、0～B区環壕部～北側住居部
図版17　A～B区　環壕部～北側山頂部、1～3区環壕部～山頂部
図版18　山頂部～南西環壕部、1～3区　環壕部
図版19　1区　1－a環壕　完掘後
図版20　1区　1－a環壕　つぶて石・遺物出土・土層堆積状況
図版21　1区　1－a環壕　つぶて石・遺物出土状況、3区　1－a環壕、掘り始め跡　遺物出土・土層堆積状況
図版22　3区　1－a環壕　掘り始め跡　端部　土層堆積、7区　1－a環壕　土層堆積・つぶて石出土状況、C区　1－a環壕　掘り始め跡
図版23　C区　1－a環壕　掘り始め跡　土層堆積状況、B区　1－a環壕　掘り始め跡と第1環壕、B区　1－a環壕　土層堆積状況
図版24　0区　1－a環壕　掘り始め跡・0区　1－a環壕　土層堆積状況
図版25　1区　1－b環壕・C～8区　1－c・1－c'環壕　完掘後
図版26　1・2区　1－c環壕　つぶて石出土状況、1～2区間　1－c環壕　土層堆積状況
図版27　4区　1－c環壕　つぶて石出土状況、5～6区間　1－c環壕　土層堆積状況
図版28　8区　1－c環壕　完掘後、つぶて石・遺物出土状況
図版29　C区　1－c環壕　土層堆積・遺物出土状況、1－a・1－b・1－c・1－c'環壕　土層堆積状況
図版30　C区　1－c環壕　つぶて石出土・土層堆積状況
図版31　B区　1－c環壕　つぶて石・銅剣形石剣出土状況
図版32　B区　1－c環壕　銅剣形石剣出土・土層堆積状況、0～1区間　1－c環壕　土層堆積状況
図版33　1～2区間・3～4区間　第2環壕　土層堆積状況、4区　第2環壕　完掘後
図版34　5～6区間　第2環壕　土層堆積・つぶて石出土状況、6区　第2・3環壕　つぶて石出土状況、5区　第2環壕　谷間層部の盛土層
図版35　C区　第2環壕　土層堆積・つぶて石出土状況、完掘後
図版36　B区　第2環壕　地滑り箇所、土層堆積状況
図版37　0区　第2環壕　土層堆積・つぶて石出土状況、1・3区　第2・第3環壕
図版38　1・3区　第3環壕　完掘後、1区　第3環壕　土層堆積状況
図版39　3～4区間　第3環壕　土層堆積状況、4区　第3環壕　途切れ部　端部　土層堆積状況
図版40　5区　第3環壕　途切れ部　端部　土層堆

積・完掘状況、5～6区間　第3環壕　土層堆積状況
図版41　C区　第3環壕　完掘後、土層堆積状況
図版42　B区　第3環壕　土層堆積状況、4～5区　第3環壕　途切れ部・地滑り土層断面
図版43　6～7区　第2・3環壕地滑り部　滑り落ちた第2・3環壕の土層断面、第2環壕付近、滑り落ちた第3環壕付近
図版44　半坦加工面遺構　調査前・調査後
図版45　SB－01～04付近　全景、SB－01　完掘後、SB－01から山頂を望む
図版46　SB－01　上層堆積状況、柱穴内　石材・土器出土状況
図版47　SB－02　完掘後、遺物・台形土器出土状況
図版48　SB－02　土層堆積状況、SB－03・04　完掘後
図版49　SI－01　完掘後、中央ピット内　土器出土状況
図版50　SI－02・03　完掘後、SI－03・周辺北側トレンチ　土器出土状況
図版51　北側環壕外側遺構（西方部）～山頂部全景、SI－02・03完掘後
図版52　SI－04・05　完掘後、SI－05　完掘後・遺物出土状況
図版53　SB－06・07　完掘後
図版54　SB－08・SI－06　完掘後、SI－06　土器出土状況
図版55　SI－06・SB－24・09　完掘後、SB－24・09・10　完掘後
図版56　SB－10、SB－10上層　磨製石剣　出土状況
図版57　SB－11・12・SI－13　完掘後、SB－11・12　完掘後
図版58　SB－13・SK－01（落とし穴）完掘後
図版59　SB－14　完掘後、SB－14～山頂部
図版60　SB－15・土坑（SK01）　完掘後
図版61　SI－07・SB－16　土層堆積状況、小ピット群2　完掘後
図版62　SI－08・09　完掘後、SI－09　遺物・炭化物検出状況
図版63　SI－09上層　炭、焼土面検出状況、南北土層断面と出土遺物、
焼土、炭化物、土器、床面の関係
図版64　2号墳　調査前・調査後、2号墳　主体部
図版65　2号墳　主体部・主体部プラン検出状況・遺物出土状況
図版66　2号墳　主体部内　土層堆積状況、南側小墓壙、小口石除後
図版67　SB－17・29・30　完掘後
図版68　SI－10・加工段1・SB－18・19　完掘後
図版69　SB－20・21・22　完掘後、SB－21・22　焼土坑（SK01）
図版70　SB－23・SI－11　完掘後
図版71　SI－12・13　完掘後
図版72　SI－13　土器出土状況、石列検出状況
図版73　SB－25・26・27・28　完掘後
図版74　田和山遺跡出土　武器形石器・弥生土器
図版75　1～29；山頂部、30～31；山頂部～環壕間斜面
図版76　32～35・38・39・42・43；山頂部～環壕間斜面、37・40・41・44～46；山頂部
図版77　47～69；1－a環壕
図版78　70～94；1－a環壕
図版79　96～128；1－a環壕
図版80　95；1－b環壕堆積土、129～149；1－b環壕
図版81　150～174；1－c環壕
図版82　167～197；1－c環壕
図版83　175～204；1－c環壕
図版84　205～216；1－c環壕
図版85　217～246；1－c環壕
図版86　242～287；1－c環壕
図版87　274～298；1－c環壕
図版88　290～334；1－c環壕
図版89　335～348；1－c環壕
図版90　349～398；1－c環壕
図版91　399～447；1－c環壕
図版92　448～467；1－c環壕
図版93　468～486・つぶて石；1－c環壕
図版94　487～512；第2環壕
図版95　513～559；第2環壕
図版96　560～592；第3環壕
図版97　593～627；第3環壕
図版98　628～634；環壕地滑り部、635～661；環壕側・環壕周辺
図版99　662～675；平坦加工面遺構、676～679・黒曜石剥片；平坦加工面遺構の東側斜面
図版100　680～682；SB－01、683・684；SB－01東側斜面、685～703；SB－02
図版101　704～706；SB－03、707～716；SB－01・02・03周辺、717～725；SI－01、726～728；SB－05
図版102　729～737；南西側環壕外側遺構周辺、

738～755；西側自然流水路

図版103　758～773；西側自然流水路

図版104　774～796；西側自然流水路

図版105　797；西側自然流水路、798～802；南丘陵斜面下、803・804；南丘陵西側多目的広場、805～812；SI－03・03周辺

図版106　821～845；SI－03（842～845は黒曜石石核接合資料）

図版107　846～852；SI－05、853～864；SB－06

図版108　865～871；SB－07、872～877；SB－08、878～880；小ピット群1、881～892；SI－06

図版109　894～914；SB－09、918～923；SB－10

図版110　924～937；SI－06・SB－09・10周辺、938～947；SB－11

図版111　948～955；SB－12、957～972；SB－13、973～986；SB－14

図版112　987～999；SB－15、1000～1013・1020～1023；SI－07、1014～1019；SB－16

図版113　1024～1026；SI－08、1027～1035・黒曜石原石；SI－09

図版114　SI－09炭化木材

図版115　1036～1039；I区トレンチ周辺、1040～1051；出土地不明、1052～1054；2号墳

図版116　1055・1056；SB－17、1057・1058；SB－29・30、1060～1062；SI－10、1063～1068・1071；SI－10埋土層上層

図版117　1069・1070；SI－10埋土層上層、1072；加工段1、1073～1077；SB－18・19、1078・1079；SB－18・19・土器溜り1・2

図版118　1080～1082；SB－18・19・土器溜り1・2、1083～1087；SB－21、1088～1092；SB－22、1093～1096；SI－11

図版119　1097～1101；SI－11周辺、1102～1108；SB－24、1109～1128；SI－12

図版120　1129～1135；SI－13、1136～1147；SB－25・26、1148～1157；SB－27

第１章　調査に至る経緯

松江市の南郊、市街地のはずれにある通称「田和山」と呼ばれる独立丘陵に遺跡の存在が知られるようになったのは、昭和50年前後頃である。当時、国道９号線のバイパスを松江市南部に通そうという計画があり、候補となった３つのルートの１つを踏査した。その折、南側の独立丘陵に前方後方墳１基、方墳２基が確認され、「田和山古墳群」と命名された。北側の山容は鬱蒼とした密林で確たる遺跡は確認できなかった。バイパスのルートは、田和山の丘陵にあまりかからないよう最も北側の山麓をかすめるように決定された。

降って平成元年、民間事業者が北側の丘陵を全て開削し、住宅団地を造成するという計画が持ち上がった。同年６月、市教委では早速埋蔵文化財の分布調査を実施した。その結果、古墳９基（小規模の前方後円墳１基、小規模方墳６基、小規模円墳２基）、弥生時代の墳丘墓推定地１基、神社跡地１ヶ所、土壙墓群と考えられる平坦地１ヶ所の合計12ヶ所で遺跡が存在するらしいことが分かった。遺跡の名称は「田和山古墳群」で変わらない。

そこで、まず価値を調べるため、前方後円墳１基（田和山１号墳）の部分調査を実施することになった。調査は平成２年７月から同年９月までかかり、山本清氏（当時島根大学法文学部教授：考古学）の指導を得た。

事業者に対しては、平成２年11月、調査結果の概要と共に、田和山地区の古墳等や田和山の残土で埋め立てる近隣の溜め池地区の調査経費及び報告書刊行費にかかる経費が138,000千円、事業期間が９年（内、現地調査期間は７年８ヶ月）かかると計算し通知したところ、そこまでのリスクを負ってまで実施はできないとの判断から事業計画は断念された。

ところが地元山林所有者とは既に土地買収の交渉が進行しており、松江市に対して開発が可能となるよう発掘調査早期実施の要望書が提出された。市ではこの問題を解決するため山林一帯５haを買収公有化し、登山園路やサインを設置し、「松江市自然学習の森」として平成５年５月に供用開始した。

平成７年～８年に至り、老朽・狭隘化した松江市立病院の移転新築と保健福祉総合センターの新築をこの田和山の北半分約３haを用地として造成する計画が持ち上がった。

そこで平成９年３月、再度計画範囲について分布調査を実施し、古墳推定地13ヶ所、住居跡推定地３ヶ所を調査対象地とした。

発掘調査は、松江市教育委員会が財団法人松江市教育文化振興事業団に委託し、約２haを対象に、平成９年４月～平成12年４月まで３ヶ年に亘り行った。

調査に着手してからわずか４ヶ月後の平成９年８月段階においては、環壕らしき遺構を検出し、同年12月９日に開催した専門家による第１回現地指導会において、その遺構が弥生時代の三重の環壕であることを確認した。明くる平成10年１月14日、環壕発見について記者発表を行った。

この直後から研究者や市民による保存運動が活発になり、全国から要望・陳情書が提出されたが、市教育委員会は市議会総務委員会で記録保存の方針を表明し、文化財保護審議会にも調査の中間報告をした。

同年８月25日及び10月13日の２回にわたり、住民監査請求が提出されたが却下、棄却された。その後、同年12月25日、保存運動団体から松江地方裁判所へ訴状（公金支出差止等請求事件）が提出された。平成11年６月１日には仮処分申立（ゾーン用地造成工事及び造成工事に関する契約締結の差止）がされた。

保存運動が激化した状況の中で、前市長死去による選挙で新たに市長となった松浦現市長は就任直後からこの問題に精力的に取り組み、平成12年７月10日、文化庁へ赴き意見を聞いた。

文化庁としては、この遺跡が国史跡に指定可能な内容を持っていることから、病院との共存策について検討されたいとの意見であった。そこで、いくつかの共存案を考え鋭意協議した結果、同年８月31日に、病院とほぼ接するも三重環濠の大半を含む遺跡全体の約３分の２を残すという案を作成し、ようやく指定可能な範囲を文化庁に示した。

そして、同年９月議会において、市長が議場で図面を示しながら部分保存について答弁した。

こうした新たな進展を見極めながら、裁判の方は平成13年３月９日に原告側が「取下げ書」を提出し、３月12日に市はそれに対する「同意書」を提出し、２年３ヶ月に及んだ文化財の保存をめぐる裁判闘争がやっと終結した。この間、岡山大学の松木武彦助教授が「鑑定人」として、発掘調査の成果に基づき現地での検証をされた。

市教育委員会では、病院建設側と保存範囲の微調整を行い、実測面積16,173.33㎡について、平成12年12月25日付で文部科学大臣宛、田和山遺跡史跡指定申請書を提出し、国の文化審議会に図られ、平成13年８月13日付、文部科学大臣名で史跡指定の通知があった。

これを受け、平成12、13年度において保存範囲全体をビニールシートで覆い保護すると共に、平成13年度に「整備と活用を考える市民ワークショップ」を３回開催し広範な市民の意見を参考とし、整備計画を策定した。この計画に基づき平成14年度から本格整備に着手している。最終的には、平成19年度に全体整備が完了する予定であるが、オープン後の維持・活用については、平成15年２月に田和山遺跡をこよなく愛する人たちで結成された「田和山サポートクラブ」という市民ボランティアグループとの協働形態で行っていきたいと考えている。

第２章　位置と環境

第１節　位置と地理的環境（第１・２図）

松江市は島根県北東部に位置する。北は島根半島の東部を占め、平田市、鹿島町、島根町、美保関町に接し一部は日本海に至る。東を中海、西を宍道湖の両湖に挟まれ、南は東出雲町、八雲村、大東町、玉湯町と接している。[1]

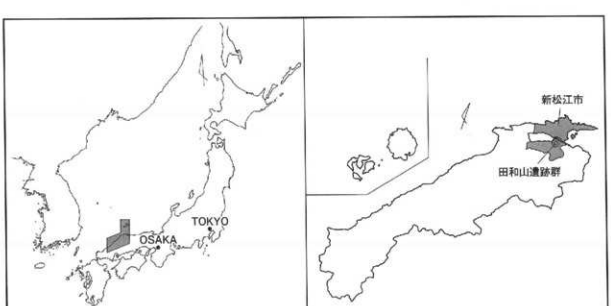
松江市の中心地である松江市街地は宍道湖の東岸の松江平野に立地している。この沖積地は縄文海進による古宍道湾が形成した砂州に、河川による沖積作用によって堆積した平野を基盤としている。そのため、比較的小さな河川が多く低湿である。

松江平野の北東には標高297mの嵩山、同261mの和久羅山からなる峻厳な山地が存在し中海まで続く。また、北方も白鹿山等からなる湖北山地が占めている。唯一、北西には平野部が続き、佐陀川が形成する沖積地に接続する。これに対し、市街地南郊には乃木段丘が拡がっている。乃木段丘は中国地方でも大型の段丘であり、大きく乃木から古志原地帯と大庭地帯に分けられる。段丘の西端は宍道湖に面し、東端は意宇平野に面して突然終わっている。

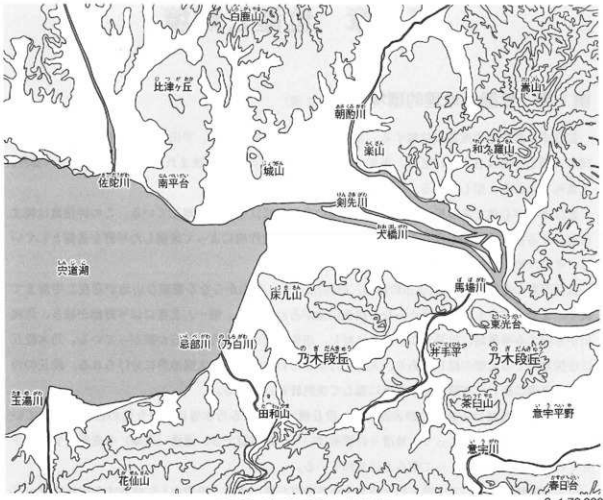
乃木段丘の基底は中新統の砂岩泥岩で、段丘構成層である乃木層は地滑り性の性質を有している。事実、発掘調査によっても地滑りの箇所はいくつか確認でき、遺構（環壕）を変形（ずれ）させていることも調査によって明らかにされている。

田和山遺跡群はこの乃木段丘の一角を占める独立丘陵、通称「田和山」に位置する弥生時代～古代にわたる複合遺跡である。遺跡最高所は標高45m、氾濫原との比高差は39mを測る。

遺跡からは南東に出雲国風土記にも記載のある茶臼山（神名樋野）、中国山脈最高峰、大山（火



第１図　田和山遺跡群　位置図



第２図　松江平野周辺の地形略図

神岳）また、北西には眼下に宍道湖、その向こうには島根半島を形成する北山が見渡せる。遺跡からの眺望は大変良く、また、遺跡外からは広い範囲からこの遺跡を望むことができる。

田和山の周囲は既に、北に山陰自動車道に連結する国道９号線バイパスや新商業地、東に松江商業高校、湖南中学校、県立女子短期大学を始めとした宅地化がかなり進行しているが、陸地測量部が測量した明治時代の地形図を参考にすると、これら以前は比較的なだらかな丘陵が拡がっていたことが分かる。

田和山の南及び南西においては次第に標高を高め、そのまま湖南山地へと接続している。また、田和山の西は湖南山地を源流とした忌部川（乃白川）が流れ、忌部川の更に西は湖南山地裾の小高い丘陵が拡がっている。なお、忌部川は低地を求めてその流路を幾度も変えながら宍道湖に流れていたことが分かっている。

湖南山地が舌状に延びた北端付近、田和山の南西約３kmには瑪瑙、碧玉の産地として有名な花仙山（標高199m）が聳えている。そのため、多くの玉作遺跡がこの一帯で知られている。

（１）鹿島町、島根町、美保関町、八束町、八雲村、玉湯町は平成17年３月31日をもって松江市と合併する予定である。

第2節　歴史的環境（第3図）

旧石器時代　松江平野周辺では、西川津遺跡、大門遺跡、下黒田遺跡、古曽志平廻田遺跡、古曽志清水遺跡、白鹿谷遺跡、市場遺跡、上立遺跡、角谷遺跡で旧石器時代の遺物（ナイフ形石器・台形様石器・尖頭器・掻器・剥片・石核等）が検出されている。これらの多くは、剥片石器（ナイフ型石器等）を指標とする後期旧石器時代（約3万年前）以降のものと思われる。

現在、田和山遺跡群周辺で旧石器時代の遺構は確認されていないが、廻田遺跡（33）で旧石器時代の玉髄製のナイフ形石器が出土していることなどから、今後当該期の遺跡が見つかる可能性も考えられる。

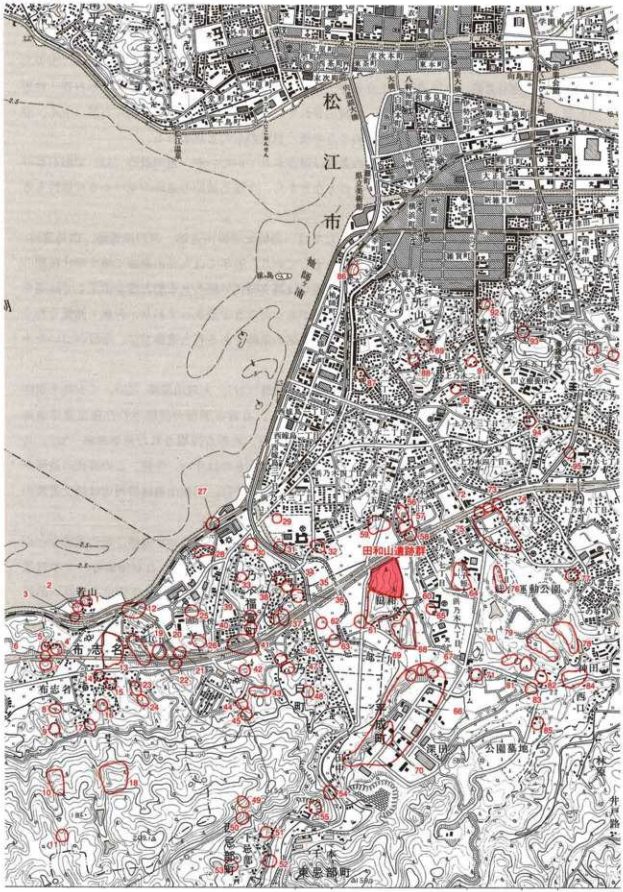
縄文時代　松江平野周辺の縄文時代の遺跡としては、島根大学構内遺跡、西川津遺跡、的場遺跡、石台遺跡、布田遺跡などで多くの縄文土器が出土している。近年では九日田遺跡で縄文時代後期のどんぐりの貯蔵穴が検出され、島根大学構内遺跡では縄文時代早期の丸木船と櫂が出土して話題を呼んだ。当地は縄文海進に伴って遺跡周辺に汀線があったことが分かっており、狩猟・漁労を行うには絶好の位置に立地している。また、縄文時代晩期の遺跡である石台遺跡では、籾殻のついた土器片が出土しており、縄文晩期の農耕も想定される。

田和山遺跡群周辺では、縄文土器が出土した福富Ⅰ遺跡（37）、大角山遺跡（25）、二ツ縄手遺跡（59）、松本古墳群（41）、袋尻遺跡群（66）を始めとし、有舌尖頭器が採取された福富湖岸遺跡（27）、石鏃の散布地である下沢遺跡（74）、奥山遺跡（64）、石斧が採取された屋形遺跡（34）、乃白遺跡（63）などが知られるが、いずれも明確な遺構を伴うものはない。今後、この時代の遺構が発見される可能性もあるが、これまでの調査成果を見る限りでは、田和山遺跡群周辺は縄文遺跡の希薄な一帯と言えるであろう。

弥生時代　松江平野周辺の前期弥生遺跡としては、西川津遺跡、タテチョウ遺跡、石台遺跡などが著名である。また、弥生時代後期～終末期にかけては、水田遺構を検出した布田遺跡、上小紋遺跡、その他に間内越遺跡、久美遺跡などの四隅突出墓、「的場式」の標識として学史上名高い的場遺跡など注目すべき遺跡の分布がみられる。このうち、西川津遺跡、タテチョウ遺跡などは、縄文晩期の突帯文土器と弥生前期の遠賀川土器が共伴しており、縄文時代から継続した集落と考えることができる。

これに対し、田和山遺跡群周辺では明確な縄文遺跡が認められない。また弥生時代の遺物もⅠ様式新段階からであり、上記の遺跡より一段階遅れて成立している。つまり田和山遺跡群周辺は、前期新段階に新しく開発された地帯であり、その生活基盤としては忌部川流域の沼澤源に求めることができる。忌部川流域では、欠田遺跡（29）、門田遺跡（31）、神立遺跡（30）、薬師前遺跡（61）、二ツ縄手遺跡（59）、雲垣遺跡（62）等が知られている（散布地を含む）。中でも欠田遺跡は、弥生前期新段階～古墳前期までの遺物が出土しており、田和山遺跡周辺の拠点的な集落であった可能性が高い。また、忌部川から上がった丘陵地においては、南友田遺跡（58）、友田遺跡（57）などで前期新段階の土器が出土している。南友田遺跡では、比較的多くの土器が見つかっていることから、ここに当該期の住居域があった可能性も考えられる。

弥生時代の中期に入ると、田和山遺跡群の東約200mで友田遺跡の墳墓群が営まれる。この遺跡



第３図　田和山遺跡群の位置と周辺の遺跡

1.窯谷遺跡、後福島窯跡
2.永原窯跡、利平窯跡、向沢窯跡、本松木窯跡、中松木窯跡、前澤窯跡、丸三窯跡
3.寺福島窯跡　4.鍛冶畑遺跡　5.鍛冶山窯跡
6.舟木畑半窯跡　7.布志名遺跡　8.宮田古墳群
9.後迫古墳　10.金屋遺跡　11.金屋谷跡跡
12.布志名大谷Ⅱ遺跡　13.茂芳田遺跡　14.永保山窯跡
15.立平窯跡　16.布志名城山跡　17.小川古墳群
18.井頭古墳群　19.布志名大谷Ⅲ遺跡　20.布志名大谷Ⅰ遺跡
21.布志名才の神遺跡　22.昇雲窯跡　23.判官山古墳群
24.伝富士名判官義綱古墓　25.大角山遺跡　26.大角山古墳群
27.福富湖岸遺跡　28.二名留古墳群　29.矢田遺跡
30.神立遺跡　31.門田遺跡　32.福富Ⅱ遺跡
33.廻田遺跡　34.屋形遺跡　35.遠華頂遺跡
36.松本遺跡　37.福富Ⅰ遺跡　38.乃白玉作跡
39.森木谷古墳　40.屋形古墳群　41.松本古墳群
42.松本古墳　43.弥陀原横穴群　44.松本横穴群
45.岩屋口古墳　46.松本修法壇跡　47.勝負廻横穴群、勝負廻古墳群
48.乃白権現遺跡　49.中垣古墳　50.下鍛冶古墳
51.平松遺跡　52.小城口遺跡　53.宮の上遺跡
54.塚田遺跡　55.清水尻遺跡　56.向原古墳群
57.友田遺跡　58.南友田遺跡　59.二ツ縄手遺跡
60.田和山古墳群　61.柴師前遺跡　62.雲頂遺跡
63.乃白遺跡　64.奥山遺跡　65.後友田古墳
66.袋尻遺跡群　67.大久保古墳群　68.背沢遺跡
69.野向古墳　70.菅沢谷横穴群　71.大久保谷遺跡
72.二子塚古墳　73.乃木二子塚古墳　74.下沢遺跡
75.長砂古墳群　76.奥山古墳群　77.矢の原遺跡
78.神田遺跡　79.浜ヶ谷遺跡群　80.勝負谷遺跡
81.清松遺跡　82.深田遺跡　83.勝負谷古墳群
84.B62古墳群　85.小倉尻谷横穴群　86.松江藩主堀尾忠晴墓所
87.伝佐々木高綱墓　88.荒神古墳　89.黒沙門山古墳群
90.宇賀Ⅱ遺跡　91.宇賀Ⅰ遺跡　92.西ノ原遺跡
93.穂山古墳群　94.経塚古墳　95.向荒神古墳
96.奥金見古墳群

ではⅢ～Ⅴ様式期にわたる26基の土壙墓群、墳丘墓、四隅突出形墳丘墓が検出されている。この四隅突出形墳丘墓は、近年見つかった出雲市の青木遺跡に次ぐ県内でも最古の部類に属す墳丘墓である。また、石鏃が34点まとまって出土し、戦士の墓とも言われる土壙墓も検出されている。これら土壙墓付近では、前期新段階の土器片が見つかっていることや、鹿島町の堀部第一遺跡の前期土壙墓と形態が類似することなどから前期新段階に遡る可能性も指摘されている。この友田遺跡は、田和山遺跡と最も密接な関係にあった遺跡の一つと言える。

その他中期の遺跡は、低地で前述の矢田遺跡、溝を検出した門田遺跡、木鍬など木製品を検出した雲垣遺跡、丘陵上で福富Ⅰ遺跡、袋尻遺跡群などがある。これらの大半は、中期土器が出土しているのみで住居等の明確な遺構は見つかっていないものである。

田和山遺跡群周辺の後期土器が出土する遺跡は、矢田遺跡、福富Ⅰ遺跡、友田遺跡、南友田遺跡、二ツ縄手遺跡、門田遺跡、袋尻遺跡群などがあげられる。福富Ⅰ遺跡、廻田遺跡においては、竪穴住居跡が検出されており、田和山遺跡群周辺の住居域の分布がみてとれる。

古墳時代　古墳時代に入ると松江平野周辺には遺跡が急増する。多くは古墳、横穴墓であり、山地、丘陵の端部を中心に至る所に古墳が築かれた様相を示している。このうち、古墳時代前期のも

のは極めて少ない。また、中期には一変して大型古墳が築かれるようになる。手前古墳（前方後円墳・70m）、上竹屋７号墳（前方後円墳・63m）、岩舟古墳（前方後円墳・50m）、岩屋古墳（方墳・45m）、金崎１号墳（前方後円墳・36m）などである。

松江市周辺は後期に入っても、大型の古墳が引き続き造営される。これは出雲の中でも簸川南部と並んで、極めて限られた地帯であり、大型古墳を築き得た首長層の存在を想定することができる。後期の大型古墳としては山代、大庭周辺に集中しており、山代二子塚（前方後円墳・90m）、山代方墳（方墳・45m）、東淵寺古墳（前方後円墳・40m）が著名である。

出雲地方の後期群集墳の様相としては、横穴墓の盛行が挙げられるが、松江平野周辺では、６世紀中葉に導入されている。

古墳以外としては、堤廻遺跡、別所遺跡、角森遺跡などで集落遺跡が存在する他、須恵器窯、埴輪窯などの生産遺跡も知られている。

田和山遺跡群周辺では、前期段階で袋尻遺跡群に土壙墓１基、土器棺墓２基が検出されている。その後、長砂古墳群（75）で５世紀中葉の古式須恵器（TK73～216併行）が出土しており、以下、乃木二子塚古墳（73）、二子塚古墳（72）、田和山１号墳（60 田和山古墳群内）、と連続的に古墳が築造されている。このうち、田和山１号墳は６世紀後葉（TK43併行）の前方後円墳（全長20m）であって、田和山丘陵の南東部の尾根を利用して築かれている。太刀、鉄鏃等を出土しており、後期の前方後円墳として極めて特異な例と言える。群集墳としては、袋尻遺跡群で横穴墓15基（70 菅沢谷横穴群を含む）が調査された。時期は６世紀後半（TK209併行～）で、出土遺物に時期的幅が認められることから、追葬により長期に渡って使用された状況が伺える。一方、田和山遺跡群周辺の古墳時代の集落遺跡としては、数多くの玉作集落が認められ一特色を示している。これは、田和山の南西３kmに位置する花仙山（玉作山）が玉の原料としての瑪瑙、碧玉を産する山であることを主要因とする。そのような玉作に関すると思われる遺跡として、大角山遺跡（25）、福富Ｔ遺跡などが田和山周辺に分布している。

歴史時代　645年の大化改新によって国郡制が施行されると、現在の島根県は出雲、石見、隠岐の３国体制が成立する。田和山遺跡群周辺は出雲国意宇郡に属していたが、出雲国風土記によれば郷が11、里が33存在した。このうち、忌部神戸郷が田和山の西を流れる忌部川沿いに治定されている。

国の中枢である国府は田和山の南東４kmに位置しており、発掘調査によって国庁が明らかにされている。この国府周辺には官衙的施設が密集しており、国分寺跡、山代正倉跡、四王寺跡などが知られている。

大化二年には大化薄葬令が出され、全国的に古墳の築造は収束に向かう。しかし、松江平野周辺では引き続き古墳が作られ（集束期古墳）、一部は８世紀まで存続している。

田和山遺跡群周辺の道標としては、松本古墳群（41）で古代道路の一部と思われる道構が検出されている。これは、この地域が交通の要として繁栄していた様子を伺わすものである。

参考文献

『増補改訂島根県遺跡地図Ⅰ（出雲・隠岐編）』2003.3　島根県教育委員会

第３章　発掘調査の概要

第１節　田和山遺跡群の調査区について

田和山遺跡群は、弥生時代前期末～奈良・平安時代の多様な遺構を検出した複合遺跡である。そのなかでも、本遺跡群の主要をなすものが通称「田和山遺跡」と言われる国史跡となった弥生環濠遺跡である。

本報告では、遺跡群内北半分にあたる国史跡となった弥生時代の環濠遺跡とその周辺の北側単独丘陵部分を「田和山遺跡」、南半分の南側単独丘陵とその周辺を「A・B遺跡」と称し、２分冊に別け報告することにする。（第４図）

また、田和山遺跡群の発掘調査は、平成９～14年までの６年間に渡るが、先の第１章にもあるような諸事情であったため、年次計画を策定し行われたものではない。実際、調査範囲及び調査方法がその年内でも変わっていく状況であったため、調査区名・遺構名称などの規格、統一が出来ていなかった。このことから調査区名・遺構名が分りづらいという混乱を招いていたことも事実である。

田和山遺跡　新旧遺跡・遺構名称表

旧遺跡・遺構名称	新遺跡・遺構名称	旧遺跡・遺構名称	新遺跡・遺構名称
山頂部		環壕外側遺構	
三日月状加工段	三日月状加工段	SB－04	SB－04
山頂SB－02（５本柱）	５本柱遺構	SB－05	SB－06
山頂SB－01（９本柱）	９本柱遺構	SB－06	SB－07
柵列	柱列	SB－07	SB－14
柵	柵	SB－08	SB－10
７号墳	２号墳	SB－09	SB－24
環壕外側遺構		SB－10	SB－11
C遺跡	名称消滅	SB－11	SB－11
C遺跡　弥生竪穴住居	SI－01	SB－12	SB－13
C遺跡　古墳竪穴住居	SI－10	SB－13	SB－15
SI－01	SI－05	SB－14	SB－26
SI－02	SI－04	SB－15	SB－25
SI－03－１	SI－03	SB－16	SB－27
SI－03－２	SI－02	SB－17	SB－23
SI－04	SB－08	SB－18	SB－21
SI－05	SI－11	SB－19	SB－22
SI－06	SB－09	SB－20	SB－17
SI－07	SI－06	SB－21	SB－28
SI－08	SI－12	加工段４	SB－05
SI－09	SI－13	加工段３	SB－18
SI－10	SB－12	加工段３	SB－19
SI－11	SI－07・SB－16	加工段３	SB－20
SI－12	SI－08	加工段２	加工段１
SI－13	SI－09	G区　小ピット群	小ピット群１
SI－14	SB－29	H区　小ピット群	小ピット群２
SI－14	SB－30	貼石状遺構	石列
SB－01	SB－01	落とし穴状遺構	SK－01
SB－02	SB－02	D遺跡	平坦加工面遺構
SB－03	SB－03	西側谷底（十器川）	西側自然流水路

このようなことから、本報告書作成にあたり、遺跡名称の若干の変更と遺構名称の大幅な変更を行った。今まで報告してきた名称とは相違することとなり、本遺跡について論稿等を出された方々、また編読された方々には少々混乱を招かせることをここにお詫びする。

国史跡田和山遺跡編の変更した遺跡・遺構名称の相対は左の表に示しておく。

※A・B遺跡及びその周辺の遺跡・遺構名称の相対表は、「A・B遺跡編」に示す。

第4図　田和山遺跡群　全体図（調査区配置図）

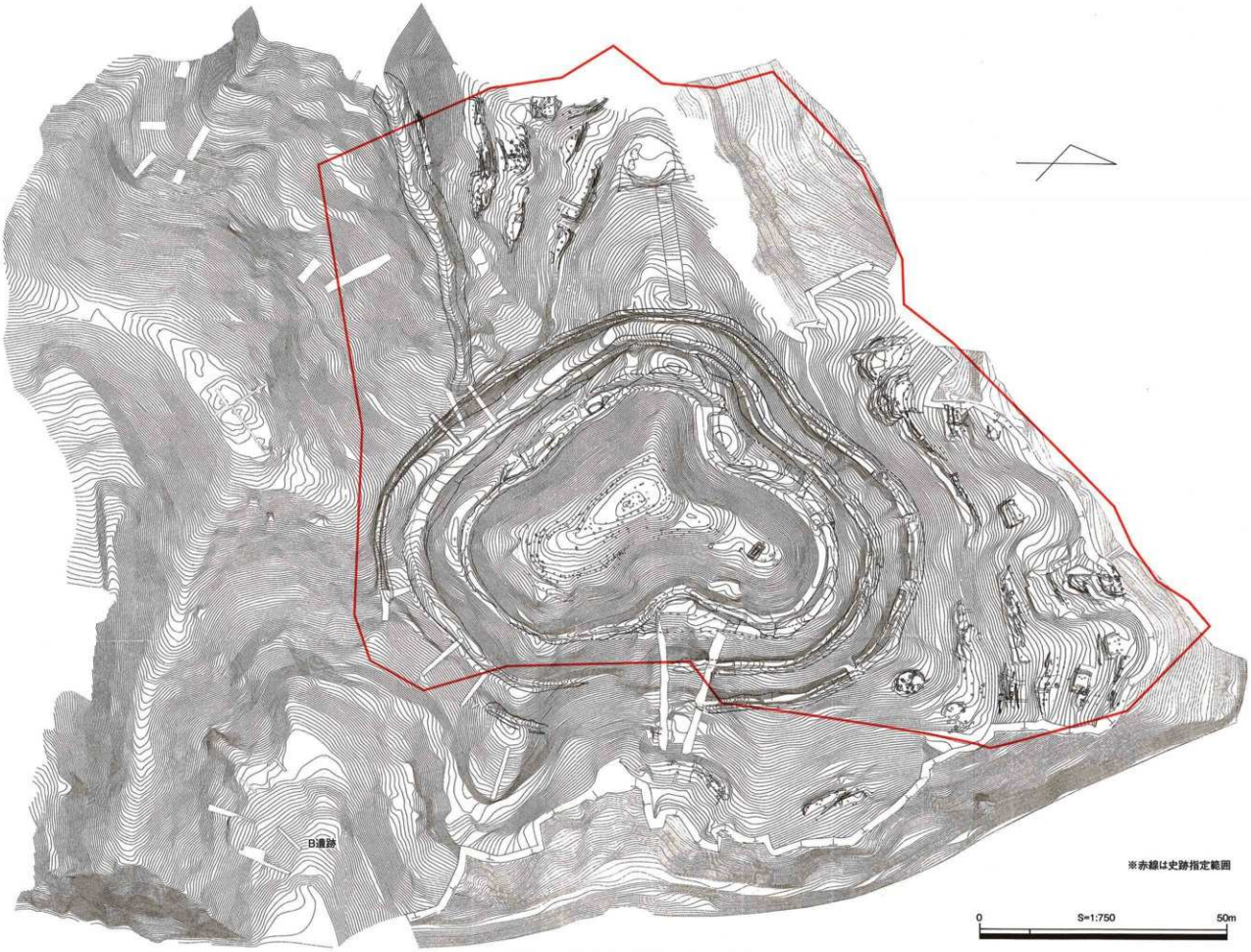
第２節　田和山遺跡群の調査経過と概要

田和山遺跡群の発掘調査は、平成９年４月１日から古墳推定地13ヶ所、住居跡推定地３ヶ所を対象として調査を始めたものである。同年８月においては、古墳の周溝と目されたところから大量の弥生土器と石が検出され、この部分が環壕であることが確認された。調査が進むにあたり、環壕は調査対象地外に延びていることが予想されたことから、環壕が存在する位置を把握するため、トレンチ９本を設定し調査を行った。トレンチ調査の結果、独立丘陵を一周すると予測される環壕３本の存在を確認し、丘陵側から第１環壕、第２環壕、第３環壕と呼称することにした。この後、環壕の詳細な調査を行うこととなり、第１環壕全域、第２環壕の西から東側、第３環壕の西側と環壕が周る丘陵頂部（山頂部と呼称）、南西側と南側丘陵の住居跡推定地の調査を行った。

調査の結果、環壕内から大量の弥生土器と石器、投石（つぶて石）と思われる川原石を検出し、第１環壕に掘り直された壕が存在することも確認された（１－a環壕、１－b環壕）。また、山頂部においては、ここを一周する柵と思われる柱穴とその内側に９本の柱跡にて構成される遺構（９本柱遺構）とこれに併行する６本の柱穴列、規則性が見出せないランダムな柱穴、柵と切れ合う５本の柱穴で構成される遺構（５本柱遺構）、三日月状の加工段を検出した。また、山頂部北側の突端では古墳の墓壙（２号墳）を検出している。南西側の住居跡推定地においては、弥生時代の竪穴住居跡と古墳時代の竪穴住居跡、加工段、掘立柱建物跡を検出し、南側丘陵（A・B遺跡）では古墳時代の加工段（掘立柱建物跡）、玉作工房跡等を検出した。平成10年８月31日に以上の調査は終了した。

この後、環壕が存在する範囲及び、その周辺の全面発掘調査の必要があるとのことから、数回の調査地追加の意向を受けながら、平成12年４月までほぼ連続して調査を行うこととなった。この期間の調査では、第２、第３環壕の全域の完掘を行い、第３環壕が南東側で掘り止められていることや、南西側、北側の住居推定地から多数の弥生時代、古墳時代、奈良～平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡と多量の弥生土器、石器等が確認された。弥生時代の竪穴住居跡の１つには焼失住居跡があり、竪穴住居の建築部材の炭化木材が良好な状態で検出されている。弥生時代の遺物においては、県内での出土は稀である台形土器や分銅形土製品、銅剣を模した銅剣形石剣、環状石斧、200点を超える石鏃、楽浪郡の硯とも言われる石板状石製品等、貴重な遺物が出土している。後に国史跡となる弥生環壕遺跡「田和山遺跡」の調査は、ここまでの３ヵ年で終了した。

その後、平成12年11月20日～平成14年７月31日までは田和山遺跡群内の南側丘陵、調査区名「A遺跡」の調査を主として行い、古墳時代、奈良～平安時代の掘立柱建物跡等を新たに検出し、これをもって田和山遺跡群の全ての調査を終了した。



第５図　田和山遺跡　全体図（遺跡分布図）

第４章　発掘調査の結果

田和山遺跡群は、第３章でも述べたとおり、弥生前期末～奈良・平安時代の多様な遺構を輩出した複合遺跡である。

ここでは、本遺跡群の主要を成す国史跡となった弥生環壕遺跡「田和山遺跡」とその周辺の発掘調査結果を述べるものである。（A・B遺跡とその周辺は「A・B遺跡」編に記述することにする）

また、本編で述べる田和山遺跡及びその周辺は、それぞれの遺構分布状況から山頂部・環壕部・環壕外側遺構（南西側・北側）に大別することができることから、以下、弥生時代・古墳時代以降の遺構とに分けたうえで、山頂部から順に個別遺構の調査結果を報告する。

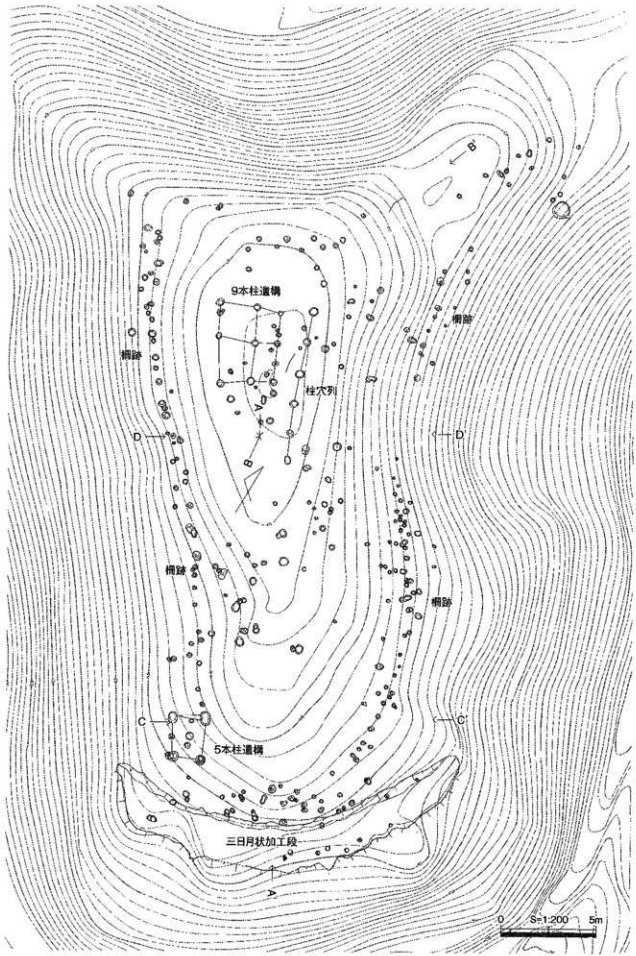
第１節　弥生時代の遺構

１．山頂部（第５・６図）

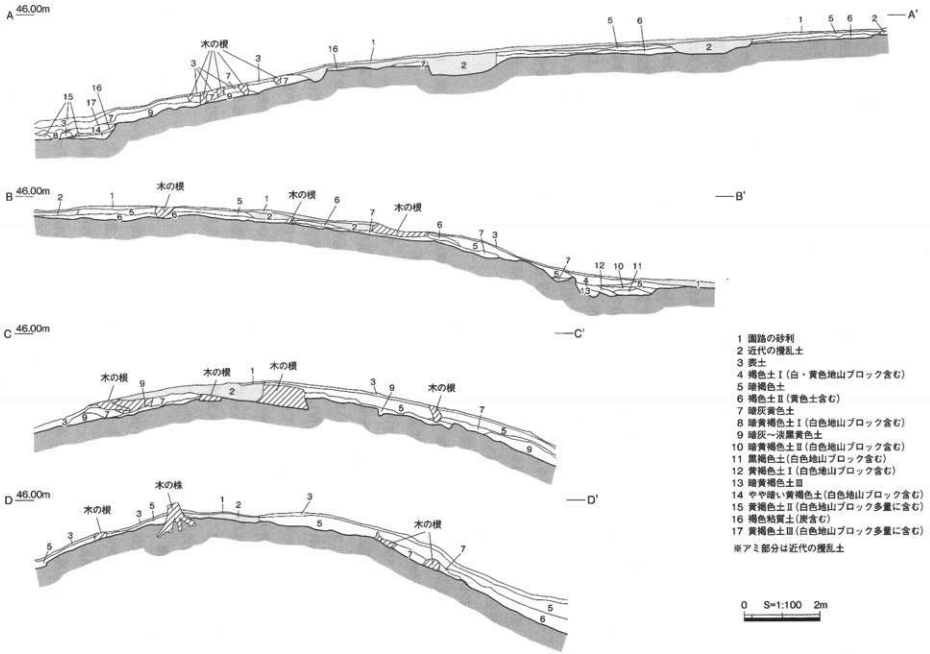
田和山遺跡群内北側の単独丘陵の頂部に位置し、後述する３重の環壕を廻らす中心部分となる場所にあたる。標高45m、平地からの比高差は39mを測る。

調査時の遺構面は、痩せた馬の背状を成し、斜面下方に向かって緩やかに傾斜している。また、丘陵が張り出した北側に向かっては、２段の段状に加工された緩やかな平坦地が成形されている。

第６図　山頂部　全体図



第７図　山頂頂部　全体図


A 46.00m
A'
木の根
B 46.00m
B'
木の根
木の根
木の根
C 46.00m
C'
木の根
木の根
木の根
D 46.00m
D'
木の株
木の根
木の根
1 園路の砂利
2 近代の攪乱土
3 表土
4 褐色土Ⅰ(白・黄色地山ブロック含む)
5 暗褐色土
6 褐色土Ⅱ(黄色土含む)
7 暗灰黄色土
8 暗黄褐色土Ⅰ(白色地山ブロック含む)
9 暗灰～浅黒黄色土
10 暗黄褐色土Ⅱ(白色地山ブロック含む)
11 黒褐色土(白色地山ブロック含む)
12 黄褐色土Ⅰ(白色地山ブロック含む)
13 暗黄褐色土Ⅱ
14 やや暗い黄褐色土(白色地山ブロック含む)
15 黄褐色土Ⅱ(白色地山ブロック多量に含む)
16 褐色粘質土(炭含む)
17 黄褐色土Ⅲ(白色地山ブロック多量に含む)
※アミ部分は近代の攪乱土
0 S=1:100 2m

第8図 山頂部断面図

これら遺構面は、いずれも斜面下方に向かって緩やかに傾斜しているが、遺構が機能していた時にはもう少し平坦に成形されていた可能性も考えられる。

山頂部にて検出した遺構は、弥生時代の柵跡、柱穴、三日月状加工段、５本柱遺構、９本柱遺構、柱穴列、古墳時代の墓壙、小墓壙である。遺物は、弥生土器、土玉、石斧、石包丁、黒曜石等が出土している。※古墳時代の墓壙・小墓壙は、2.古墳時代以降の遺構を参照。

柵跡（第７図）

南東から北西に軸をとる長細い山頂部の中心となる場所から、柱穴約300穴を検出した。このうち、山頂部遺構面の緩やかな平坦地から環壕に下りる斜面の傾斜変換点付近においては、この山頂部を一周する形で小形の柱穴を検出している。上端径は13～30cm、下端径は５～20cm、深さは15～30cmを測り、なかでも上端径20cm前後、下端径15cm強のものが多くを占め、総数は約200穴を数える。これら柱穴の多くは小形で山頂部を一周する形で存在することから、柵のような機能をもっていたものと推測される。この柵跡と思われる柱穴内からは、弥生土器小片や後述する環壕内から大量に出土している川原石（つぶて石）が数個出土している。出土した弥生土器小片は、口縁等がみられないことから、詳細な時期を特定させることは難しいものではあるが、土器胎土から弥生中期のものと推測される。また、これら柵跡は、重複するものが見られることから、幾度か作り直されたことが想定出来得るが、柱穴埋土層がほぼ同一（灰黄色土）であったことなどから、時期差を見出すことはできていない。

柱穴（規則性のない柱穴）（第７図）

南東から北西に軸をとる長細い山頂部を一周する柵跡の内側は、南東－北西約30m、南西－北東10m～14mを測り、この範囲が山頂部の言わば生活面（活動面）と考えられる。

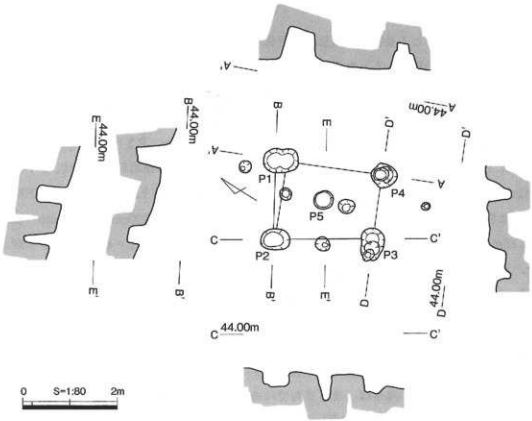
生活面（活動面）内からは、約100穴の柱穴を検出している。柱穴の上端径は、15～45cm、下端径は、12～35cm、深さは、10～36cmで小形から大形の柱穴が混在している。なかには、後述する５本柱遺構、９本柱遺構、柱穴列のような規格性が認められるものもあるが、ほとんどの柱穴には規格性が見られず、ランダムに存在している。また、この規格性の無い比較的大形の柱穴は、山頂部南東側半分の範囲にて確認されている。これらがどの様な性格を有するものかは推測の域をでないが、ある程度大きな柱がそこに立っていたことは想像に難くないと考える。建物等の施設では無い、独立した柱だけがある意味をもってそこに存在していたとも想定出来得るものである。

柱穴内からは、弥生土器と思われる細片が少数出土している。これらは弥生期の柱穴と考えられるが、弥生時代内の詳細な時期については不明である。

５本柱遺構（第７・９図）

南東から北西に軸をとる長細い山頂部の南側の環壕に下りる斜面の傾斜変換点付近において、１間×１間で中央に１穴の柱穴をもつ、５穴の柱穴から構成される遺構を検出した。遺構平面積は、約３㎡を測る。この遺構内には、柵跡もみつかっており、柵跡との新旧関係が認められている。

柱穴の検出時の法量は、Ｐ１が上端径45～70cm、下端径28～55cm、深さ67cm（柱穴底面Ｌ＝42.99m）、Ｐ２が上端径43～60cm、下端径30～42cm、深さ31cm（柱穴底面Ｌ＝42.89m）、Ｐ３が上端径47～66cm、下端径43～48cmと12cm、深さ40cm（柱穴底面Ｌ＝42.80m）と深さ52cm（柱穴底面Ｌ＝42.68m）、Ｐ４が上端径48～52cm、下端径20～24cm、深さ45cm（柱穴底面Ｌ＝42.89m）、Ｐ



第９図　５本柱遺構　平面図・断面図

５が上端径41～44cm、下端径38～40cm、深さ57cm（柱穴底面L＝42.76m）を測る。このうちP１、P３は、２穴の柱穴が重複しているようであり、柱穴が掘り直されたものと考えられる。P１、P３の重複する各２穴の推定される柱穴法量は、北側のP１は上端径45～48cm、下端径32cm、深さ65cm（柱穴底面L＝42.94m）、南側のP１は上端径45～48cm、下端径28～33cm、深さ52cm（柱穴底面L＝43.02m）で、東側のP３は上端径43～48cm、下端径23～25cm、深さ40cm（柱穴底面L＝42.80m）、西側のP３は上端径22～38cm、下端径12cm、深さ52cm（柱穴底面L＝42.68m）程度を測るものであったと推測される。なお、柱穴の深さは、調査時において柱穴を検出するため幾分遺構面を削り過ぎたこともあったことや、これが立地する場所が斜面上であり一部遺構面流失の可能性も考えられることから、調査時の状態より若干深かった可能性も考えられる。

柱間隔は、P１－P２で1.65m、P２－P３で2.1mと2.0m、P３－P４で1.35mと1.7m、P４－P１で2.0mと2.25mを測る。

柱穴内埋土は、いずれも灰黄色土～暗灰黄色土であり、柱痕及びP１、P３の掘り直された柱穴の新旧を確認することはできていない。

遺物は、P２内から弥生土器の小片が出土している。この弥生土器小片は、形状等からの詳細な時期特定をすることはできなかったが、胎土の石英等の砂粒の大きさから推測すると、弥生前期末～中期初頭（Ⅰ－４・Ⅱ－１様式）のものと考えられる。このことから５本柱遺構は、弥生前期末～中期初頭頃に存在した遺構と推測される。また、柵跡との新旧は、弥生前期末～中期初頭頃に存在した５本柱遺構が埋没した後、弥生中期頃に柵列が作られたものと考えられる。

9本柱遺構・柱穴列（第7・10図）

南東から北西に軸をとる長細い山頂部の北西側半分に位置する遺跡最高所、標高46.4mから2間×2間で中央に1穴の柱穴をもった遺構を検出した。9本の柱穴にて構成される平面形状は、いびつな「田の字状」を呈し、柱間隔の均等な規格性はみられない。遺構平面積は、約12㎡を測る。

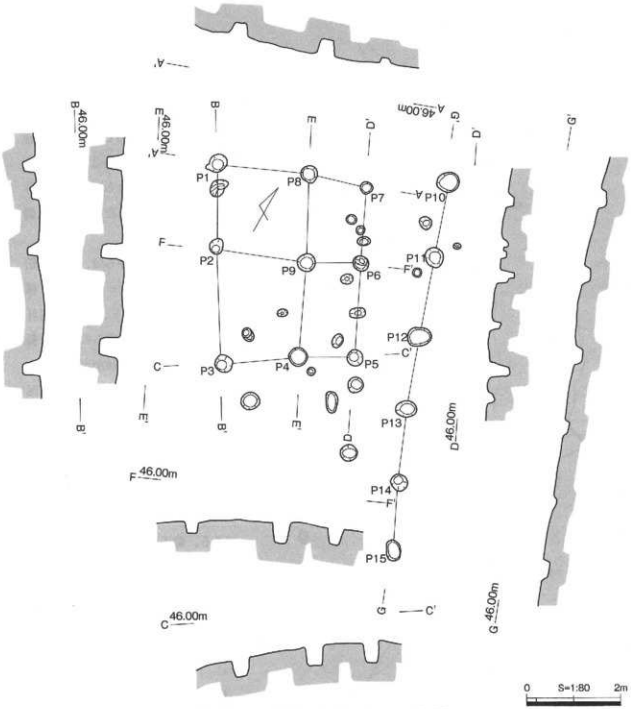
柱間は、P1－P2で1.8m、P2－P3で2.5m、P3－P4で1.6m、P4－P5で1.2m、P5－P6で2.0m、P6－P7で1.6m、P7－P8で1.3m、P8－P1で1.9m、P2－P9で1.9m、P9－P6で1.15m、P8－P9で1.85m、P9－P4で2.0mを測る。各柱穴の検出時の法量は、P1が上端径35～42cm、下端径22cm、深さ30cm（柱穴底面L＝44.90m）、P2が上端径27～32cm、下端径14～17cm、深さ27cm（柱穴底面L＝44.95m）、P3が上端径36cm、下端径20cm、深さ44cm（柱穴底面L＝44.82m）、P4が上端径40cm、下端径30cm、深さ45cm（柱穴底面L＝44.99m）、P5が上端径34cm、下端径20cm、深さ47cm（柱穴底面L＝44.97m）、P6が上端径31cm、下端径22cm、深さ34cm（柱穴底面L＝45.00m）、P7が上端径25cm、下端径18～20cm、深さ14cm（柱穴底面L＝45.15m）、P8が上端径35cm、下端径24cm、深さ34cm（柱穴底面L＝44.96m）、P9が上端径37cm、下端径25cm、深さ50cm（柱穴底面L＝44.91m）を測る。柱穴の深さは、前述の5本柱遺構と同様に、調査時に柱穴を検出するため幾分遺構面を削り過ぎたことから、調査時の状態より若干深かったものと考えられる。各柱穴の深さは、まちまちではあるが、P7が深さ14cm（柱穴底面L＝45.15m）と他の柱穴の深さ27～48cm（柱穴底面L＝44.82～45m）と比べ浅い。

柱穴埋土は、灰黄色土又は灰褐色土の一層で、柱痕は確認することはできなかった。

遺物は、P4内から弥生土器の小片が出土している。この弥生土器片は小片の為、確実な時期確定をするには難しいが、胎土の特徴から弥生前中期頃の遺物と推測できる。このことから9本柱遺構は、弥生中期頃に存在していた遺構と考えられる。

この9穴の柱穴を検出した当初は、1間×1間若しくは、1間×2間の建物等が重複するものとも考えられたが、柱穴内埋土の差異が無く同一なことや、ほとんどの柱穴法量が似通っていることなどから、重複する建物等を想定させるには根拠に乏いと考え、9穴の柱穴にて構成される遺構であると判断している。

柱穴列は、9本柱遺構の北側に6穴の柱穴がほぼ直線状に並ぶ形で検出している。9本柱遺構に沿う形になることから、この遺構に付随したものと推測される。それぞれの柱穴間隔は、P10－P11で1.65m、P11－P12で1.7m、P12－P13で1.55m、P13－P14で1.55m、P14－P15で1.5mを測り、その間隔は誤差20cm以内でほぼ等間隔と言えるものである。各柱穴の検出時の法量は、P10が上端径45cm、下端径35～40cm、深さ16cm（柱穴底面L＝45.02m）、P11が上端径38～42cm、下端径23～27cm、深さ16cm（柱穴底面L＝45.13m）、P12が上端径38～50cm、下端径28～42cm、深さ26cm（柱穴底面L＝45.01m）、P13が上端径35～48cm、下端径21～30cm、深さ13cm（柱穴底面L＝45.11m）、P14が上端径33～37cm、下端径16～20cm、深さ14cm（柱穴底面L＝45.10m）、P15が上端径30～43cm、下端径25～34cm、深さ16cm（柱穴底面L＝45.04m）を測る。これら柱穴は、以上の数値から分るとおり、深さが非常に浅いものとなっているが、前述の9本柱遺構と同様、これら付近は調査時に遺構面を削り過ぎていることや、遺構面が流失した可能性が考えられることから、当時の面は調査後のレベルより高く柱穴深は幾分深いものであったと推測される。また、柱穴



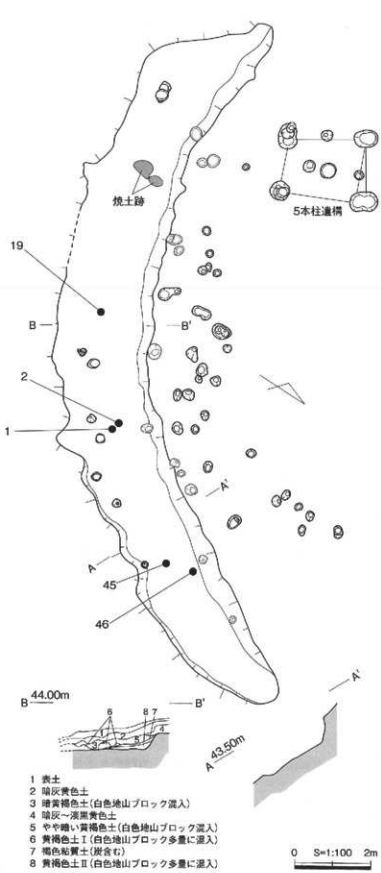
第10図　9本柱遺構・柱穴列　平面図・断面図

底面レベルが近接する9本柱遺構の柱穴に近いL＝45m付近であることから、当時の9本柱遺構とほぼ同等レベルの面から掘られたとも考えられる。

柱穴内埋土は、P10・P11・P12が灰橙色土、P13・P14が暗灰黄色土、P15が灰黄色土で柱痕は確認することはできなかった。また、柱穴内からの出土遺物はなく、柱穴列の時期を示す根拠はないが、9本柱遺構に並列することから、これと同時期に存在したものと解釈しておきたい。

三日月状加工段（第7・8・11図）

南東から北西に軸をとる長細い山頂部の南東側の端において、南西－北東に延びる三日月状の加



第11図　三日月状加工段　平面図・土層断面図

工段を検出した。長さは約18m、幅は約２mを測り、地山を段状に切って作られ、加工段の西側においては、焼土跡を検出している。また、加工段上及び段状に切られた斜面上からは、柱穴を検出しているが、柱穴の深さが極端に浅いことやその位置的状況から、これらは前述の柵跡の柱穴の底付近にあたるものと推測される。

加工段の埋土層からは、弥生前期末～中期初頭（Ⅰ－４・Ⅱ－１様式）の壺１・２・５、甕片、高坏27、底部19・20、黒曜石の石器未製品45、黒曜石の原石46が出土している。これら埋土層の出土遺物の状況から三日月状加工段は、弥生前期末～中期初頭段階に埋まった、もしくは埋められたものと考えられ、その機能していた時期は弥生前期末～中期初頭かそれ以前であったと推測できる。前述の加工段上などから検出した柱穴は、埋没した三日月状加工段の上から掘り込まれた弥生中期段階の柵の柱穴であろうことは、この状況からも推測でき得るものである。

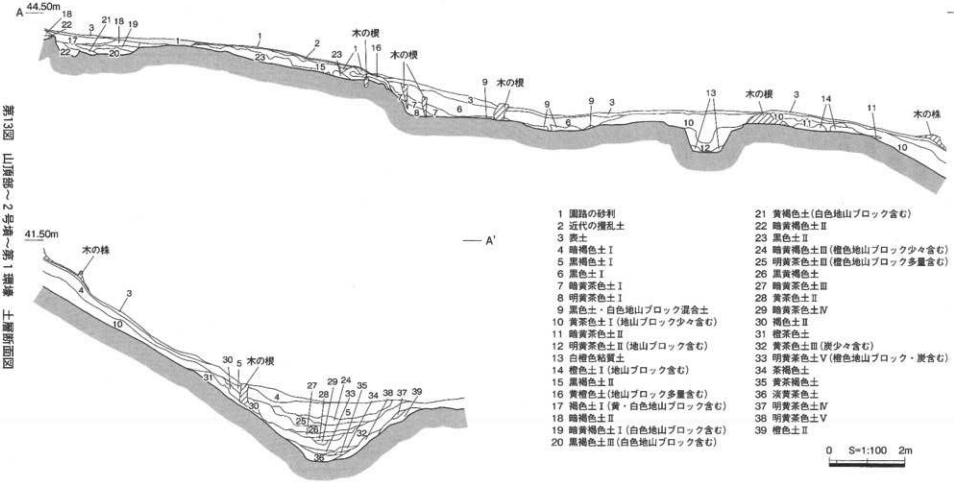
山頂部北側段状平坦面

（第７・８・12・13図）

柵跡によって囲まれた南東から北西に軸をとる長細い山頂部の北側には、北方に張り出した丘陵が延びている。ここからは、２段の段状に加工された緩やかな平坦地が確認されている。なお、この範囲からは、南東から北西に軸をとる山頂部のように一周する柵跡は検出していない。

柵に囲まれた山頂寄りの１段目からは、段状に加工された平坦地と柵跡によって囲まれる山頂部に続く斜面との変換点において、東西方向に向かう溝の痕跡を土層断面にて確認した。この溝は、山頂部の主となる柵跡によって囲まれる区域とを区画する目的で作られたものとも考えられる。その他、東側の斜面変換点付近から柵跡と似た小形の柱穴を少数検出している。１段目の緩やかな平坦面の標高は、43.5mを測る。

第12図　山頂部　北側段状加工面（２号墳）



第13図 山頂部～2号墳～第1溝墓 土層断面図

2段目の緩平坦面は、環壕によって囲まれた山頂部の北端部分にあたり、標高は、41.6mを測る。この緩平坦面からは、柱穴約30穴、土坑、古墳時代の墓壙を検出している。(古墳時代の墓壙の詳細は、後述する2.古墳時代を参照。)柱穴は、上端20～40cmの小形のもので、緩平坦面の北側において多くを検出しているが、後に掘られた古墳時代の墓壙の範囲にも幾つかは存在していたものと考えられる。また、この柱穴の配列には規則性は見られず、どのような用途・目的で存在していたか、詳細は不明である。柱穴内からは、弥生土器の底部が出土しており、胎土の特徴から弥生中期頃のものと推測される。土坑は、古墳時代の墓壙の北東側壁にて検出しており、一部がこの墓壙によって切られている状況であった。土坑の法量は、上端が80～85cm、下端が30～40cm、深さが43cmを測る。土坑内からの出土遺物はなかったことから、土坑存在時の明確な時期は分らないが、前述のとおり、古墳時代の墓壙によって土坑の一部が切られていること、弥生中期の柱穴と混在して存在することなどから、柱穴と同じく弥生中期頃に存在したものと考えておきたい。

その他、緩平坦面と環壕（第1環壕）の間の南東側斜面から弥生前期末（Ⅰ－4様式）の甕33が1個体出土している。この付近に当該期の遺構及び遺物が確認できていないことから、この遺物が何故ここから1個体出土したか、詳細は不明である。

山頂部出土遺物（第14～19図）

山頂部からは、弥生前期末～中期後葉の土器、土玉、打製石斧、蛤刃石斧、石包丁、黒曜石の未製品、黒曜石原石、川原石（つぶて石）が出土している。これらのほとんどは、柵跡によって囲まれた南東から北西に軸をとる山頂部内からの出土である。この柵跡内の出土遺物においては、北東側の柵跡付近が比較的多いようである。また、三日月状加工段の埋土からは、弥生前期末～中期初頭の土器が多く出土しており、弥生土器小片・細片は、この柵跡内の広い範囲で出土している。なお、本報告書に掲載は出来なかったが遺物の出土分布を見ると、弥生前期～中期初頭段階の土器と思われるものは南西側に多い傾向が窺えた。

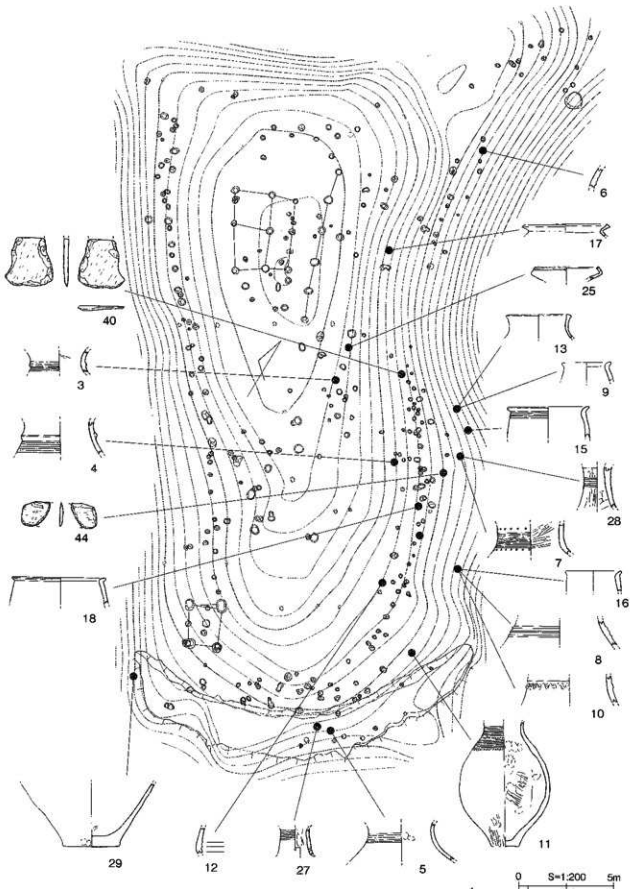
その他、山頂部～環壕（第1環壕）間の斜面から弥生前期末～中期後葉の土器、石剣、石包丁、蛤刃石斧、磨石が出土している。これらは山頂部からの転落物と思われるものである。

以下出土遺物について簡単に述べる。※出土位置・寸法等の詳細は、遺物観察表を参照。

弥生土器（第14～17図）

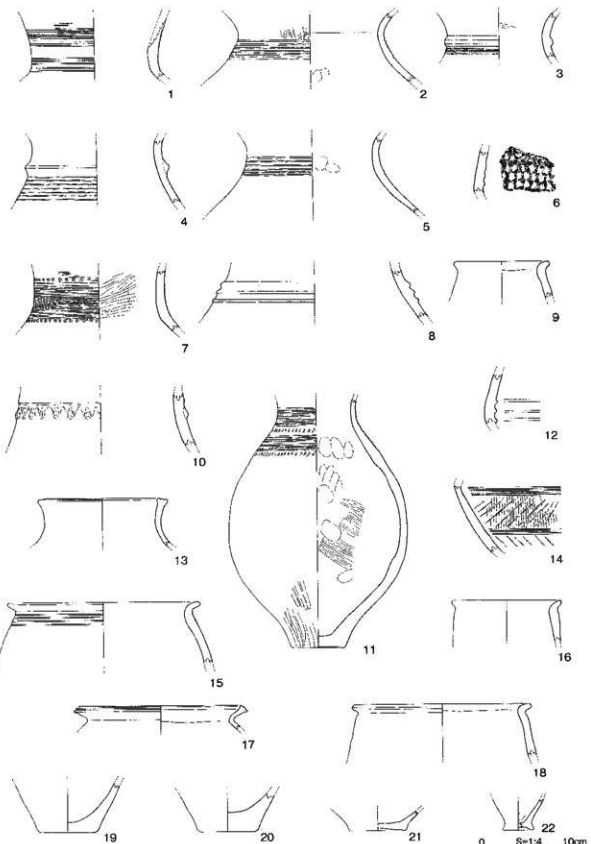
1・2・19・20は三日月状加工段の埋土から出土した弥生土器である。1は壷の頸部でⅡ－1様式のものと思われる。頸部にはクシ描き直線文が施される。2はⅠ－4様式の壷の頸部付近で頸部には6条のヘラ描き直線文が施される。19・20は壷または甕の底部である。この底部も胎土の砂粒の大きさ等からⅠ－4～Ⅱ－1様式のものと思われる。

3～18・21～29は柵跡に囲まれた山頂部から出土した弥生土器である。4・5は壷の頸部付近で頸部にヘラ描き直線文を施すものである。Ⅰ－4様式のものと思われる。8は頸部下付近に3条の突帯文を施すⅠ－4様式の壷の頸部付近である。3・7はいずれも頸部にクシ描き直線文を施すⅡ－1様式の壷の頸部である。9はⅠ－4～Ⅱ－1様式と思われる壷の口縁部である。11はⅡ－1様式の壷で、頸部～肩部にクシ描き直線文と三角刺突文を施すものである。山頂部から出土した壷で唯一完形に近いものである。12は頸部に3条の突帯文をもつ、Ⅲ－2様式と思われる壷の頸部付近である。13は口縁端部上面に2条の凹線を施す、Ⅳ－1様式の直口壷の口縁～頸部である。14は壷



※土器・石器は $\frac{1}{8}$

第14図　山頂部　遺物出土状況



第15図　山頂部　出土土器（1）

の肩部でクシ描き直線文と羽状文を施す、Ⅳ－１様式のものと思われる。15は頸部に４条のヘラ描き直線文を施すⅠ－４様式の甕の口縁部付近で、外面に煤が付着しているものである。[1]C炭素年代測定（AMS法）にてBC250年±40の数値がでている。(1) 16・18は、Ⅰ－４又はⅡ－１様式の甕の口縁部である。17は口縁端部に２条の凹線文を施すⅣ－１様式と思われる甕の口縁部である。21・22は壺または甕の底部である。26はⅢ－２～Ⅳ－１様式の高坏の口縁部で、拡張した口縁端部に３条の凹線を施すものである。24も高坏の口縁部で口縁外面に４条の凹線と端部に刻み目を施す。Ⅳ－１様式のものと思われる。25はⅣ－２様式の高坏の口縁部で、口縁外面に凹線文を施し、23はⅣ－２様式の高坏の口縁部と脚部で、口縁部・脚部ともに凹線文と刻み目を施すものである。27はⅣ－１～２様式の高坏の脚部で、８条の直線文と円形の透かし孔をもつものである。28もⅣ－１～２様式の高坏の脚部で、５状の直線文を施すものである。29は大形の壺の底部である。

30～36は山頂部～環壕（第１環壕）間の斜面から出土した弥生土器である。30は広口壺の頸部で、ヘラ描き直線文と三角刺突文を施す。Ⅰ－４様式のものと思われる。31は口縁直下に円孔をもつⅠ－４様式の壺の口縁である。32は広口壺の口縁部で、口縁内面にクシ描き直線文と羽状文を施す。Ⅳ－１様式のものと思われる。33は山頂部北方の２段目緩平坦面下の斜面から出土したⅠ－４様式の甕である。田和山遺跡出土のⅠ－４様式の甕、唯一の完形品である。34はⅠ－４～Ⅱ－１様式の甕の口縁部である。35は頸部に指頭圧痕文帯を廻らすⅣ－１様式の甕の口縁部である。36は、鉢または甕の底部と思われるものである。

土製品（第18図）

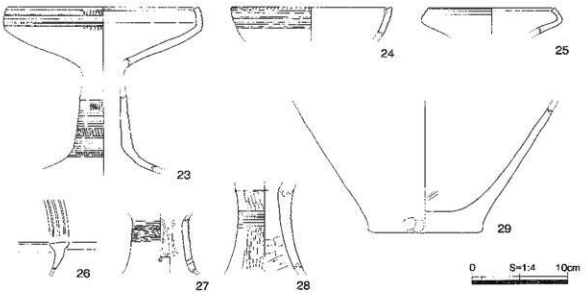
37は櫓跡に囲まれた山頂部の南側で出土した土玉である。山頂部出土の土器は弥生土器だけであることから、弥生時代の土玉だと思われる。弥生時代の土玉は、通常、祭祀に際して使用されたものと考えられているが、青谷上寺地遺跡では、土玉の孔に細枝を通し、樹脂で緊縛して環状にしたものが出土しており、数や重量の計測に用いられた可能性も指摘されている。(2)

石器（第14・19図）

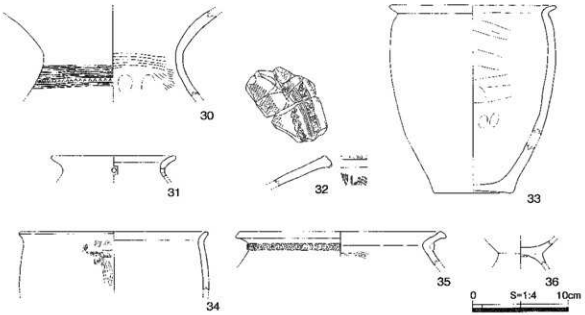
40・41・44は櫓跡に囲まれた山頂部から出土した石器である。40は打製石斧で所謂、石鍬と成り得るものである。41は蛤刃石斧である。やや扁平な形状を呈すもので、古い印象をうける。44は刃部は残っていないが、磨製石包丁と思われるものである。

45・46は三日月状加工段から出土した石器である。45は黒曜石製の石器未製品と思われるものである。46は黒曜石の原石で、原材産地分析により隠岐の久見産であることが分っている。(3)

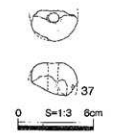
38・39・42・43は山頂部～環壕（第１環壕）間の斜面から出土した石器である。38は鉄剣形の磨製石剣の一部と思われるもので、断面は菱形を呈し、中央に一本の直線的な鎬を作りだしている。側縁は鋭利に尖っており、刃潰し研磨面はみられない。39は大型石包丁と思われるものである。42は蛤刃石斧である。刃部は潰れて鋭利さを欠っており、刃部欠損後、転用された可能性がある。43は槌石（ハンマーストーン）で、約半分は欠損しているが３箇所、敲いて潰れた痕跡がみえる。



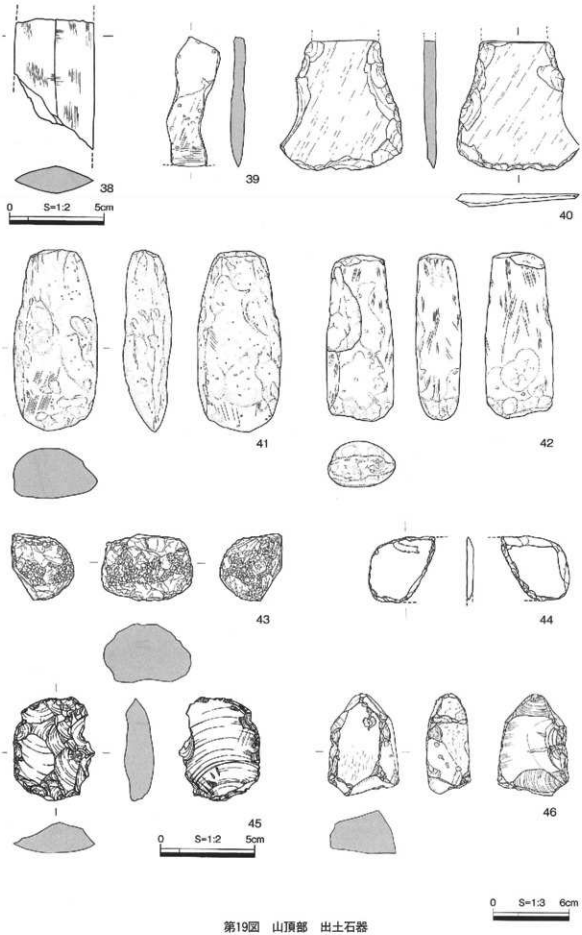
第16図　山頂部　出土土器（2）



第17図　山頂部～環壕間の斜面　出土土器



第18図　山頂部　出土土製品（土玉）



第19図　山頂部　出土石器

小　結

山頂部は、後述する３重の環壕に囲まれた田和山遺跡の核となり得る場所である。そのなかでも主となるところが遺跡最高所の柵跡に囲まれた区域と考えられる。この柵跡に囲まれた区域内からは、先にも述べたとおり、配列の規則性がない柱穴、９本柱遺構、柱穴列が検出されている。また、三日月状加工段、５本柱遺構が柵跡と切れ合う形で検出されている。

以下、これら遺構の用途・性格と山頂部の時期別変遷を述べる。

遺構の用途・性格

三日月状加工段の性格については、これに付随する柱穴や溝等が無いことや、湾曲して細長く延びるその形状などから、ここに建物があった若しくは、建物を建てようとしたとは考えにくいものである。焼土跡が存在することからここで何らかの目的のため、火を焚いていたことは明確ではあるが、確固たる用途については判然としない。何かを作る、建てるため、と考えるよりもこの段自体が必要不可欠なものであった、所謂、祭祀的な要素をもったものとしてこの場所に段を設け、火を使用していたものと現段階では考えておきたい。

５本柱遺構は、調査の初期段階において、１間×１間で中央に１穴の柱穴をもつ構造であること、また、柱穴が比較的大きいという点から物見櫓跡と想定されていた。しかし見張り台としての機能をもつものならば、山頂部南側に作るよりもむしろ宍道湖・乃木平野が眼下に見渡せる北側に作った方が機能的であろうことや遺構が立地する場所が前述のとおり、環壕に下りる斜面上に位置することから、そのような高層建物を配するには極めて不向きであるように思われる。そもそもどの様な形態であろうとも、建物跡がこのような極めて不安定な立地条件下に作られたこと自体、懐疑的であるように思える。また、この５本柱遺構が存在する斜面が作られた当時は、平坦面を成しており、それが流失して調査時には斜面となっていたとも考えられなくもないが、そのことを考慮しても立地の不安定さは否めないものである。よって、５本柱遺構は、建物跡だけに言及せず、柱だけの施設といったものも考えておく必要があるように思われる。

９本柱遺構においては、通常、このような９穴の柱穴をもった田の字状の遺構は、総柱の掘立柱建物跡と解釈されることから、当初は高床式倉庫跡と想定されていた。しかし、その形状がかなり歪んでいる状況から、そのまま掘立建物跡を想定することは難しいと感じられる。当地が、妨げるものが一切ない独立丘陵の頂部に位置し、強い風が吹くその状況から考えてもこれに耐え切れる建物跡の存在には疑問を抱く。実際、調査中にもレベル等の機器や写真撮影用足場が倒されるほどの強い風が吹く状況である。このようなことから、建物跡を完全に否定するものではないが、今までの概念にとらわれず５本柱遺構と同様、柱だけの施設といったものも考えておく必要があろう。

柱穴列跡については、９本柱遺構に並列することから、９本柱遺構に対する東からの風よけ、若しくは日隠しのための言わば塀（柵）のような要素をもったものと想定できる。

その他の配列の規則性がない柱穴は、山頂部内に点在しているが、なかでも比較的大形の柱穴は山頂部南東側半分の範囲において確認されている。これら大形の柱穴は、ある程度大きな柱がそこに立っていたことを示唆するには想像に難くないものである。建物等の施設では無い、独立した柱だけがある意味をもってそこに存在していたとも想定出来得るものである。

遺構の変遷

山頂部に遺構が作られたのは、出土遺物からみて弥生前期末～中期初頭と考えられることから、三日月状加工段、５本柱遺構が山頂部に現れる最初の遺構となる。これら遺構が当該期に同時に存在していたかどうかは定かではないが、前後があったにせよ時期幅が極めて狭い中の収まるものであろうことから、両者は少なからず関連性があったものと推測できる。また、弥生前期末～中期初頭の土器片が山頂部南西半分に集中して出土していることから、この付近に存在する規則性のない柱穴も当該期の柱穴であった可能性も考えられる。よって、弥生前期末～中期初頭段階の山頂部は、山頂部南東半分を主たる活動範囲とし、三日月状加工段、５本柱遺構、規則性のない柱穴のみが存在する状況であったと考えられる。

弥生中期段階においては、山頂部の縁辺部に柵が一周して作られ、山頂部北西側の遺跡最高所に９本柱遺構が塀（柵）を作い作られる。当該期の主たる活動範囲は、山頂部北西半分に移りかわり、この時にはそれまで機能していた三日月状加工段は埋没し、５本柱遺構はその場所に柵が作られ機能を停止している。

その後、田和山遺跡内からの弥生後期土器の出土は一切みられないことから、弥生中期の柵が囲繞する９本柱遺構と、これに伴う塀（柵）を最後に山頂部の弥生期の遺構は廃絶したものと考えられる。（なお、古墳時代前期には北側段状平坦面に古墳が造られる）

註

（1）本報告書内、第５章　自然科学分析と検討　年代測定結果報告書　TW－１を参照。

（2）「宮谷上寺地遺跡４」『一般県道宮谷停車場井出線地方特定道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』2002.3 財団法人　島根県教育文化財団

（3）本報告書内、第５章　自然科学分析と検討　田和山遺跡、友田遺跡、長砂11号墳遺跡出土のサヌカイト製遺物及び黒曜石遺物の原材産地分析を参照。

参考文献

・浅川滋男「五本柱と九本柱　大社造りの起源と巨大本殿の復元・序説」『文化財　文化財講座特集号』2003.3　島根県文化財所有者連絡協議会

・岡田精司「大型建物遺構と神社の起源」『日本古代史　都市と神殿の誕生』1998.7　新人物往来社

・寺前直人「弥生時代の武器形石器」『考古学研究　第45巻　第２号』1998.9　考古学研究会

・種定淳介「銅剣形石剣試論（上）（下）」『考古学研究　第36巻　第４号』1990.3　考古学研究会

・中原　斉「２　妻木晩田遺跡における掘立柱建物跡について（１）－９本柱掘立柱建物跡を中心に－」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報』2002　島取県教育委員会

・中原　斉「妻木晩田遺跡にみる弥生の国邑　九本柱掘立柱建物の問題を中心に」『建築雑誌　都市と都市以前　アジア古代の集住構造VOL.117』2002.5　日本建築学会

・錦田剛志「「古代神殿論」をめぐる近年の研究動向（上）（下）－考古資料の解釈をめぐって－」『皇學館大学神道研究所所報　第63号』2002.7.30　皇學館大学神道研究所

・錦田剛志「「田」字形建物研究の最前線から　～「神社」」「大社造」は田和山遺跡に遡れるのか?!」田和山

遺跡活用事業秋季講演会資料　2003.12.21
・濱田竜彦「弥生の祭場　中・四国　－日本海沿岸地域を中心に－」『季刊　考古学　第86号』2004.2.1　雄山閣
・広瀬和雄『日本古代史　都市と神殿の誕生』1998.7　新人物往来社
・松本岩雄「田和山遺跡の空間構造　3重の環壕は何を守護していたのか」『建築雑誌　都市と都市以前　アジア古代の集住構造VOL.117』2002.5　日本建築学会
・松本岩雄「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』　木耳社
・「日本海をのぞむ弥生の国々　～環壕から見える弥生社会とは？」『第3回妻木晩田弥生文化シンポジウム』2002.11　鳥取県教育委員会
・「弥生時代の磨製石器」『島根県古代文化センター調査研究報告書13』2003.3　島根県埋蔵文化財調査センター・島根県古代文化センター
・「第1年度シンポジウム　山陰地方の掘立柱建物跡　－弥生・古墳時代－」鳥取環境大学　平成15－16年度浅川科研『大社造の起源と変容に関する歴史考古学的研究』資料　2004.11

2．環壕部（第5図）

環壕部は、山頂部が位置する単独丘陵の斜面において検出した弥生時代の環壕の部分である。この環壕部の外側の丘陵裾には、後述する住居部である環壕外側遺構が存在している。

検出した環壕は、弥生前期末～中期後葉に属するもので、その形態を3段階に変化させながら作られたことが分っている。最古段階の環壕は、山頂部を巡る斜面のうち、緩やかな谷状を呈する東部、南西部、北西部の3ヶ所のみにて検出している。これを以下、1－a環壕と呼称する。次段階の環壕は、1－a環壕とほぼ同じ場所において確認されたもので、1－a環壕埋没後、内側（山頂部側）に作り直された環壕である。以下、1－b環壕と呼称する。最終段階の環壕は、それまでの環壕との形態を大きく変貌させ、山頂部を鉢巻状に廻る3重環壕となったものである。以下、この段階の環壕を山頂部側からそれぞれ第1環壕（1－c環壕）、第2環壕、第3環壕と呼ぶことにする。

その他、環壕部からは地滑りによって環壕の消失・ズレが起きている部分や、環壕が意図的に作られていない部分が確認されている。

これらの調査報告については、1－a環壕から順に以下のとおり述べることにする。

（1）1－a環壕（第20図）

1－a環壕は、後述する1－b環壕・1－c環壕の環壕外側の肩（土塁）の下において検出したものである。このため調査は、1－c環壕の現況が損なわれない方法をとり、全掘せずトレンチまたは部分調査という形でおこなった。

1－a環壕は、前述のとおり山頂部を巡る斜面のうち、緩やかな谷状を呈する東部（C区～6区）、南西部（1区～3区）、北西部（B区～0区）の3ヶ所のみにて確認している。それぞれの環壕の長さは、東部で約41m、南西部で約40m、北西部で約38mを測るものと推定される。環壕の断面形は、そのほとんどが緩やかな曲線状を成し、壕底は広く深さは比較的浅いものである。環壕下端（壕底）幅は0.4～3m、下端（壕底）から上端（環壕肩）の最大高は、1.6mを測っている。上端幅は内側（山頂側）の上端が後述する1－b環壕によって切られていることから正確な数値は明らかではないが、土層断面等から推定すると、広いところでは5mを超える幅をもっていたものと考えられる。

環壕の底部は、いずれの場所も地山面となっており、内側は山頂部斜面へと続き、外側は緩やかに上り頂点を過ぎた後は環壕外斜面へと続いている。なお、環壕の外側は、環壕の肩を作るために高まり（土塁）が作られていたことが確認されている。

それぞれの環壕の両端は、尾根に近づいたところで、壕底が急に浅くなり終結している状況であった。なかでも北西部の1－a環壕北東端は、壕底が鋭角に屈折し終結する状況がみられ、1－a環壕が山頂から派生する尾根の直前から掘られたことを顕著に示すものであった。このことから1－a環壕は、意図的に山頂部から派生する3方の尾根を掘り残して作られていたものと考えられる。

遺物は、埋土層及び、壕底面から弥生前期末～中期初頭の壺・甕、磨製石剣、石鏃、石包丁、石斧、磨石、石（つぶて石）、楽浪郡出土の石硯と類似する石版状石製品が出土している。

以下、各区個別の調査結果について述べる。

※　なお、この1－a環壕は前述のとおり、尾根を掘り残す形で存在することから、山頂部を一周するものでない。正確には完周しない1－a環壕を「環壕」と呼ぶのは不適切であり「壕」と

するのが適切な表現であろうが、本遺跡場合、既に各報告・論文等で「1－a環壕」と呼称してきたことから、記述の煩雑を避けるため、「1－a環壕」と称して記している。遺構の性格からすると逆に混乱する恐れもあろうがご容赦願いたい。

第20図　1－a環壕　全体図

1区　1－a環壕掘り始め跡（第21・22図）

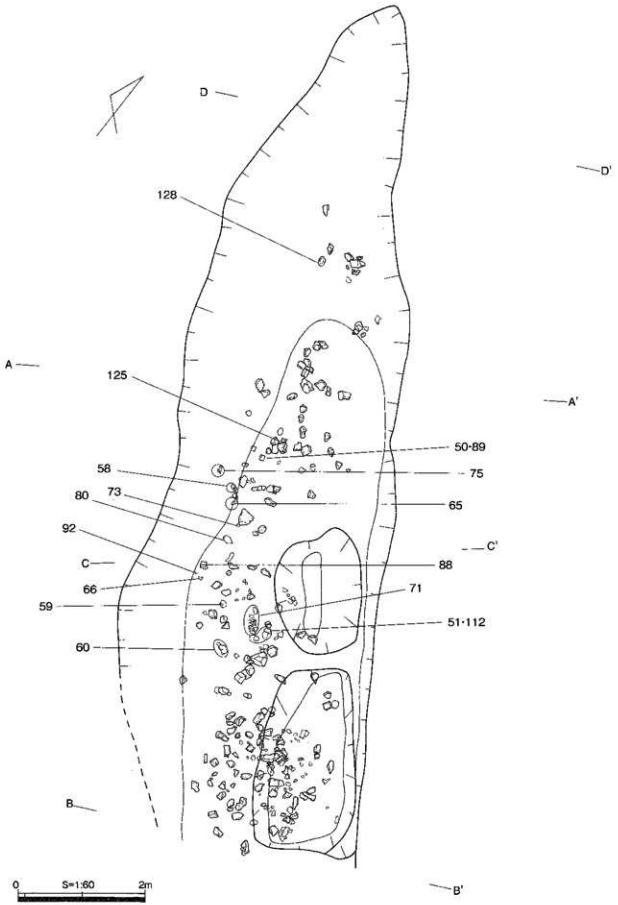
南西部（1・2・3区）にて検出した1－a環壕の北西端付近である。環壕の断面形は緩い曲線状を呈し、幅は広く浅いものである。環壕の北西端は、尾根に近いところから壕底の傾斜を変え、尾根にすりつくようにして終結している。環壕底面はL＝36.8～37.1mを測る。環壕の下端（壕底）最大幅は2.7mを測り、上端幅は前述のとおり1－b環壕によって切られている状況であったことから、土層断面からの推定で最大幅は4mを超えるものであったと考えられる。環壕の下端（壕底）から上端にあたる外側の環壕肩までの高さ（環壕の深さ）は、残存するところで1.2mを測るものである。外側の環壕肩は、後述する第2環壕の造成時に削られている可能性が高いことから、調査時より高い（環壕深さがより深い）ものであったと推測される。また、環壕を掘削した面は、固い地山面まで到達しており、当時この環壕を掘削することは大変な作業であったことが窺える。環壕の土層断面からは、1－a環壕→1－b環壕→1－c環壕と作り変えられていった状況が顕著に現れている。また、土層断面からは、環壕を掘り直したと思われる痕跡も認められている。この掘り直した1－a環壕は、A－A'土層断面では最初の1－a環壕の自然堆積土・崩落土である32・36・38・42・49層をその基盤とし、C－C'土層断面においては、同じく最初の1－a環壕の自然堆積土・崩落土である32・35～49層を基盤としたものである。また、この環壕を掘り直したと思われる痕跡の下からは、山頂部側から崩落したと思われる地山の塊36層がみられることから、環壕が地山崩落等で埋まったため環壕を再度掘り直したものとも考えられる。この環壕を掘り直すという行為は、ある一定期間この環壕が必要であったことを示すものである。

その他、環壕底面で楕円形と歪な方形の土坑状の落ち込みを検出している。楕円形の落ち込みは直径1.3～1.8m、底径0.3～1.3m、深さ36cm、歪な方形の落ち込みは直径1.5～2.9m、底径1.1～2.7m、深さ約30cmを測るものである。意図的に掘られたものと思われるが、性格については不明である。

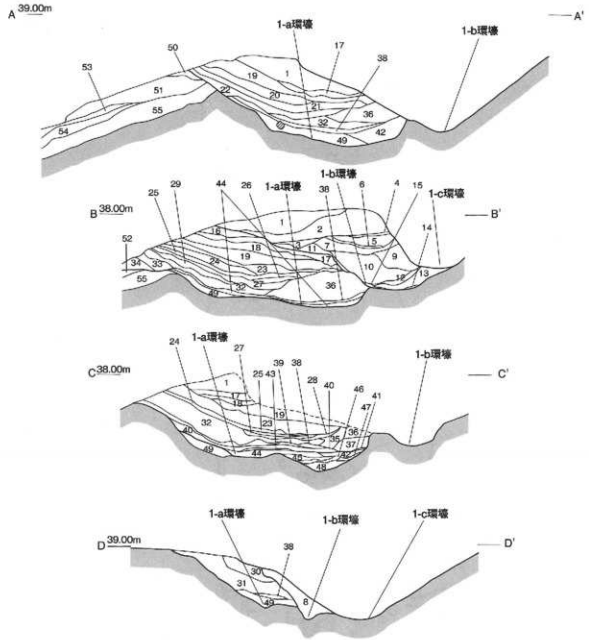
遺物は、環壕底面及び環壕底から5～15cm浮いた状態で弥生前期末～中期初頭の壺50・51・58・59・60、甕65・66・73・80・88・89・92・94、甕か鉢71・75等の土器片が多数出土している。石器は、蛤刃石斧125、磨石128、サヌカイト製石鏃112・116等が出土している。また、この遺物と混在して主に山頂部下、東側斜面に露出する岩脈の岩と同材の角ばった石が出土している。この石は、100を超える数が出土しており、土器等の遺物と同様な出土状況であることから、つぶて石として使用されたものと考えられる。その他、環壕内堆積土の6層から弥生前期末～中期初頭の甕67・91、17層からサヌカイト製石鏃105、19層から弥生前期の壺48、25層から弥生前期末の壺61、35層から黒曜石製石鏃99、49層からサヌカイト製石鏃111・120が出土している。これらの他、環壕内堆積土からは多くの弥生前期末～中期初頭頃の土器等が出土している。これら遺物は、山頂部から転落してきたものと推測される。

3区　1－a環壕掘り始め跡（第23・24図）

南西部（1・2・3区）にて検出した1－a環壕の南東端付近である。前述の1区1－a環壕掘り始め跡の反対側の1－a環壕掘り始め跡付近となる。環壕の断面形は1区の1－a環壕と同様、緩い曲線状を呈し、幅は広く浅いものとなっている。環壕の南東端は、尾根に近くなるところから幅を狭くし、壕底は傾斜を変えて尾根に上がって終結している。また、尾根に最も寄ったところでは、



第21図　1区　1−a環壕　掘り始め跡　平面図

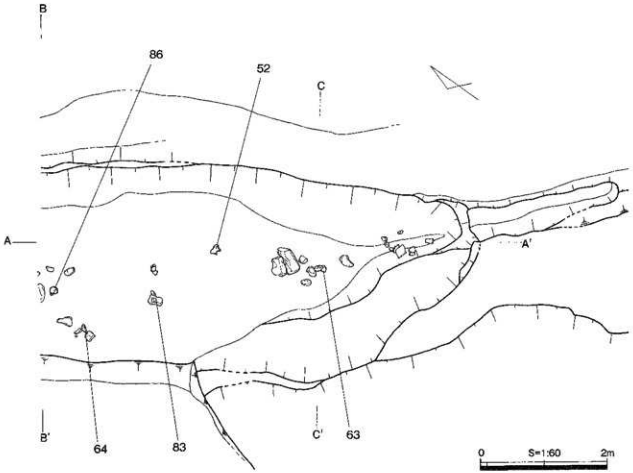


1 淡黄褐色土、暗褐色土の混合土(地山ブロック多量含む)
2 暗褐色土、暗橙褐色土の混合土(地山ブロック少々含む)
3 暗茶褐色土
4 淡黄褐色土Ⅰ(地山ブロック含む)
5 暗褐色土Ⅰ(地山ブロック少々含む)
6 黒褐色土
7 暗褐色土Ⅱ
8 暗黄茶褐色土
9 淡黄茶褐色土(地山細粒少々含む)
10 地山の地盤れ土Ⅰ
11 淡暗黄色土(地山ブロック含む)
12 地山の地盤れ土(灰白色土)
13 地山の地盤れ土(明橙色～灰白色土)
14 暗灰色粘質土Ⅰ(炭含む)
15 暗灰色粘質土Ⅱ
16 淡黄褐色土Ⅱ(地山ブロック多量含む)
17 淡暗褐色土(地山ブロック多量含む)
18 暗橙褐色土、暗褐色土の混合土(灰白色地山ブロック含む)
19 灰白色地山ブロック土、淡黄色土の混合土
20 暗黄灰褐色土Ⅰ(地山ブロック多量含む)
21 暗黄灰褐色土Ⅱ(地山ブロックわずかに含む)
22 暗黄灰褐色土Ⅲ(地山ブロック少々含む)
23 暗黄茶褐色土、暗褐色土の混合土
24 暗褐色土、暗黄褐色土の混合土(地山ブロック少々含む)
25 暗茶褐色土Ⅰ(地山ブロック少々含む)
26 暗黄茶褐色土、灰褐色土の混合土
27 暗褐色土Ⅲ
28 暗茶褐色土
29 暗茶茶褐色土Ⅱ(地山細粒少々含む)
30 明黄茶褐色土(地山ブロック少々含む)
31 茶褐色土(地山ブロック少々含む)
32 淡灰褐色土(地山細粒少々含む)
33 暗茶褐色土
34 暗橙灰褐色土
35 淡暗茶褐色土(地山ブロック少々含む)
36 地山の地盤れ土Ⅱ
37 明茶褐色土
38 暗褐色土Ⅳ
39 明黄褐色土
40 明黄灰褐色土
41 淡黒灰褐色土Ⅰ
42 黄灰色土Ⅰ(地山細粒含む)
43 淡黄灰褐色土
44 黄灰色土Ⅱ
45 明黄灰褐色土(地山ブロック含む)
46 黒灰褐色土
47 淡黒灰褐色土Ⅱ
48 暗赤茶褐色土(地山細粒多量含む)
49 黄灰褐色土
50 明橙茶褐色土(地山ブロック多量含む)
51 明橙茶褐色土と淡黒茶褐色土の混合土
52 暗橙茶褐色土、淡黒茶褐色土の混合土
53 淡明黒茶褐色土
54 黒茶褐色土
55 淡黒茶褐色土

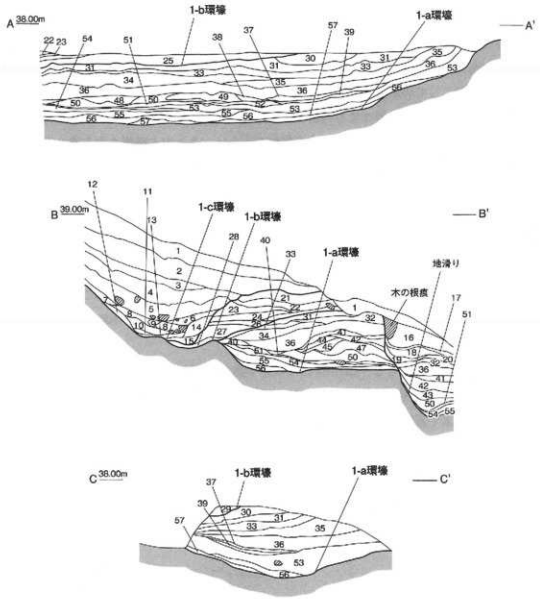
第22図　1区　1—a環壕　掘り始め跡　土層断面図

壕底から一段上がって尾根に向かい延びる長さ2.5m、幅0.6mの溝を検出したが、これが環壕の一部となるものなのか、別の用途のために作られたものなのか、判断が難しいものであった。環壕底面はL＝36.3～36.7m、環壕の下端（壕底）最大幅は2.7mを測るものである。上端幅は、環壕の外側部分が地滑りを起こしている状態であったことから、この3区においては推定値を出すことは不可能であった。環壕の深さは、残存する内側（山頂側）の掘りかたの頂点から約50cmを測るが、当時は、より深いものであったと考えられる。土層断面からは、ここでも環壕を掘り直したと思われる痕跡が認められている。この掘り直しの痕跡はB－B'土層断面においてその状況が認められ、40・50・51・54・55・56層が最初に掘られた1－a環壕に自然に溜まった堆積土で、このうち40・50層を切る形で環壕を掘り直し、外側に41・42・44・45・47層の若干の高まり（土塁）を作って新しい壕を成形した工程が窺える。なお、このB－B'土層断面の31～34・36層は、後述する1－b環壕の外側の高まり（土塁）となるものであるが、36層は外側から流れ込んでいる状況が認められ、山頂部側の内側から流れ込むであろう自然堆積土ではないものと考えられる。このことから、36層は人為的に入れられた土と推測でき、1－a環壕がその形を保っている時に1－b環壕に作り変えたものと推測できる。

遺物は、環壕底面及び底から5～15cm浮いた状態で弥生前期末～中期初頭の壺52・63・64、甕83・86等の上器片多くと鉢刃石斧127、サヌカイト製石鏃110、1区1－a環壕掘り始め跡出土と同類の角ばった石（つぶて石）が出土している。環壕内堆積土からは、36層で弥生前期末～中期初頭



第23図　3区　1－a環壕　掘り始め跡　平面図



1 暗黄茶色土
2 黒色土Ⅰ（陽標茶色の地山小ブロック含む）
3 淡黄茶色土（陽標茶色の地山小ブロック少量含む）
4 黒褐色土Ⅰ（陽標茶色の地山ブロック含む）
5 暗黄褐色土Ⅰ（訳３層淡黒黄褐色土、一部混入）
6 淡黄黒色土（炭、黄色地山ブロック含む）
7 淡黄茶色土（地山ブロック少量含む）
8 暗黄褐色砂質土（炭、焼土多く含む）
9 炭Ⅰ
10 赤褐色土（炭、焼土多量含む）
11 炭Ⅱ
12 黄灰色土Ⅰ
13 黄灰色土Ⅱ（炭含む）
14 暗黄褐色土Ⅱ
15 暗黄灰色土（炭多く含む）
16 暗黄褐色土層（地山ブロック少量含む）
17 淡灰灰色土Ⅰ（白色地山小ブロック含む）
18 黄褐色土・暗黄褐色土の混合土Ⅰ（炭含む）
19 黒色土Ⅱ（黄褐色土、一部混入）
20 黄褐色土・暗黄褐色土の混合土Ⅱ（粗）
21 暗黄褐色土Ⅳ（地山大ブロック含む）
22 暗黄褐色土Ⅴ（黄色・橙色の砂粒を含む）
23 灰褐色土（黄色の砂粒含む）
24 黄褐色土Ⅰ
25 暗褐色土Ⅰ
26 暗黄褐色土Ⅵ（橙色土の一部と炭含む）
27 暗橙白色の地山ブロック土Ⅰ（第34層より細）
28 灰褐色粘質土
29 黒褐色土Ⅱ
30 褐色粘質土（地山ブロック３～40cm大含む）
31 暗褐色砂質土（地山ブロック２～３cm大含む）
32 淡黒褐色土Ⅰ（地山ブロック少量含む）
33 暗黄褐色土Ⅶ（地山ブロック４～５cm大多量含む）
34 暗橙白色の地山ブロック土Ⅱ
35 黄褐色土Ⅲ
36 暗黄褐色土Ⅱ（炭色地山小ブロック含む）
37 明灰黄色土
38 暗黄橙色土
39 暗灰黄色土（炭含む）
40 明褐色土（地山小ブロック含む）
41 暗橙褐色土Ⅰ
42 淡黒褐色土（炭含む）
43 明黄褐色土Ⅰ（地山ブロック少量含む）
44 黄白色土（白色地山小ブロック含む）
45 暗橙褐色土Ⅱ（黒色砂粒含む）
46 淡橙褐色粘質土
47 地山ブロック土Ⅰ（軟らかい）
48 橙褐色土
49 明黄褐色土Ⅱ
50 乳橙白色の地山ブロック土（硬くしまる）
51 淡黄灰色土Ⅱ
52 暗黄褐色土区（地山小ブロック含む）
53 やや暗い黄褐色土（白黄色地山ブロック含む）
54 暗黄褐色土Ⅹ
55 明黄褐色砂質土（地山ブロック１～２cm大含む）
56 灰褐色粘質土（黄色地山ブロック含む）
57 橙灰色土（地山崩れ土）

0 S=1:60 20m

第24図　３区　１—a環壕　掘り始め跡　土層断面図

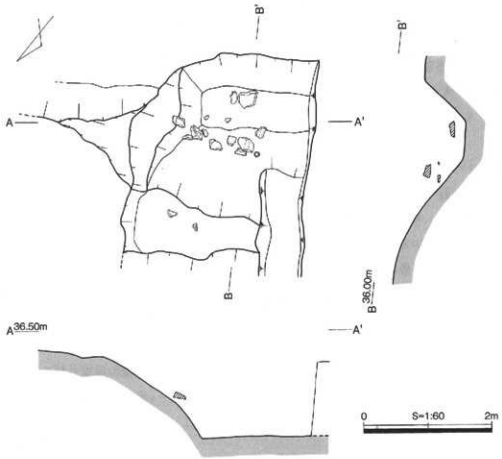
の壷56・62、甕68・81、サヌカイト製の石鏃117、50層で弥生前期末～中期初頭の甕93、52層で磨製石剣片の96、53層で弥生前期末～中期初頭の壷57、甕82・90、55層でサヌカイト製の石鏃113、1－a環壕最下層56層で弥生前期末の壷47・49が出土している。その他、環壕外側の地滑り土中から磨製石剣片の97、サヌカイト製の石鏃107が出土している。また、環壕内堆積土からは多くの弥生前期末～中期初頭の土器が出土している。これら遺物は山頂部から転落してきたものと思われる。

なお、弥生前期末～中期初頭の甕86は土器胴部に煤が付着しており、この煤の^{14}C年代測定によるとBC840年±40年という測定結果がでている。[1]

B区　1－a環壕掘り始め跡（第25図）

北西部（0・A・B区）にて検出した1－a環壕北東側の先端部分である。環壕の断面形は、壕底が平坦な逆台形状を呈している。壕底は、尾根に近いところで完全に止まっており、この尾根近くから掘られた様子が窺えるものである。環壕底面はL＝36.3～36.7mを測る。環壕の下端（壕底）最大幅は65cmを測り、上端幅は残存するところで、2.6mを測る。掘削された環壕の基盤となる面は地山面となっており、環壕の下端（壕底）から外側の環壕肩までの高さ（環壕の深さ）は、80cmを測っている。この場所も他の1－a環壕同様、外側の環壕肩が第2環壕造成時に削られている可能性が高いと思われることから、当時は、より深いものであったと推測される。

遺物は、環壕底面及び底から10～30cm程度浮いた状態で他の1－a環壕掘り始め跡と同類の角



第25図　B区　1－a環壕　掘り始め跡　平面図・断面図

ばった石（つぶて石）が出土している。また、環壕内堆積土からは、最下層で弥生前期末の甕70、中層～下層では、弥生前期末の甕72・77が出土している。この他にも、この環壕内堆積土からは弥生前期末～中期初頭の土器片が出土している。

C区　1－a環壕掘り始め跡（第26図）

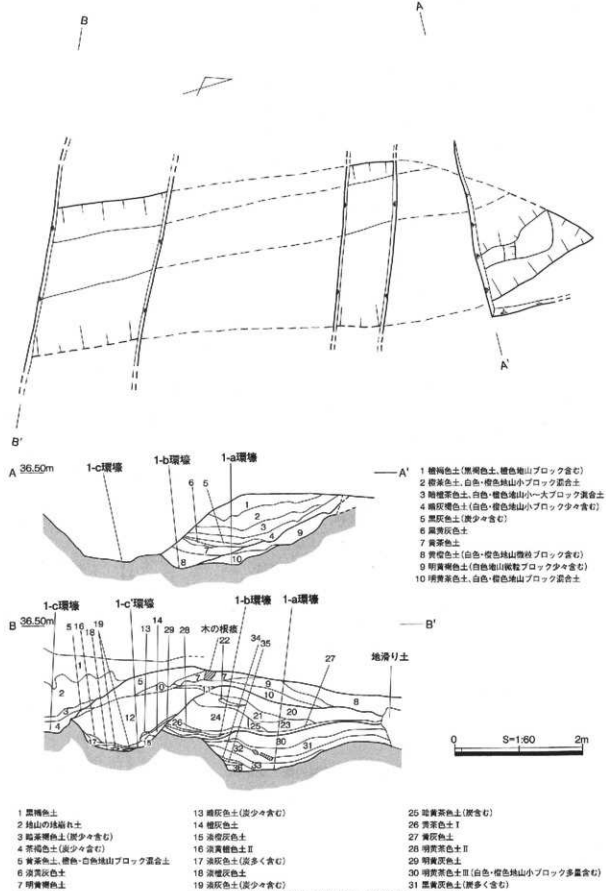
東部（6・7・8・C区）にて検出した1－a環壕の北端付近である。環壕の断面形は、緩い曲線状を呈し、幅は広く浅いものとなっている。環壕北端の壕底は、尾根に近くなるところで不鮮明となり、終結しているようである。環壕底面はL＝34.7～35mを測る。環壕の下端（壕底）最大幅は80cmで、上端幅は3mは超えるものであったと推測される。環壕の下端（壕底）から外側の環壕肩までの高さ（環壕の深さ）は浅く、土層断面から推測すると50cm程度しかなかったものと思われる。この場所では南西部で確認されたような環壕を掘り直したと思われる痕跡は認められなかったが、1－a環壕の北端の土層断面A－A'において1－b環壕が1－a環壕のほぼ同位置に掘られている状況が窺えた。このことは、1－b環壕が1－a環壕に変わるものとして作られた可能性を示唆するものであり、その性格も1－a環壕に準拠するものであったとも推測できる。その他、B－B'土層断面では1－b環壕は壕底を少し残すだけで、壕としての形状をほとんど残さない状況がみえた。これは、27層が壕底付近から壕外側まで同レベルで堆積している状況から、1－b環壕の外側の肩を除去し、平坦にしたものと推察できる。この造成作業の意図は、推測の域をでないが、のちに作られる1－c環壕（ここでは1－c'環壕）を掘る際の作業ステージのようなものを設けるため、若しくは、1－c環壕の外側の肩を強固なものとするために一旦平地に成形し、その上に土塁状の高まりをつくったとの両者の可能性が考えられる。この両者とも兼ねる目的で平坦に削ったとも解釈でき得るが、詳しくは後述する1－c環壕時の造成作業が、かなり大掛かりなものであったと推測できることから、前者の掘削・土の運搬等のための作業ステージを作った可能性が高いと考えられる。また、A－A'土層断面においては、9・10層のみが1－a環壕堆積土で、6～8層は1－b環壕の堆積土、1～5層は1－c環壕の外側の肩（土塁）を作るために盛られた土であることが分っている。

遺物は、1－a環壕内堆積土から弥生前期末～中期初頭の土器片と、他の1－a環壕掘り始め跡と同類の角ばった石（つぶて石）が少数出土している。また、A－A'土層断面の1～5層で弥生前期末～中期の土器片、8層で扁平片刃石斧124が出土している。このうち、5層からは石板状石製品片95が1片出土している。この石器片は、2.8×3.2cmの扇形状で残存しているが、本来は方形を呈するものであったと思われる。楽浪郡出土の石硯に類似することから、聞きなれない言葉ではあるが、石板状石製品と仮称している。[注] 同層からは弥生中期の土器片が出土していることから、この時期に属する遺物と思われる。

（2）1－b環壕（第27～29図）

1－b環壕は、1－a環壕埋没後に作られた環壕で、後述する1－c環壕の環壕外側の肩（土塁）の下において検出したものである。調査は、1－a環壕と同様、1－c環壕の現況が損なわれない方法をとったもので、基本的には1－a環壕の調査に合わせて、1－b環壕の確認をするという形でおこなった。

確認した1－b環壕の壕底は、標高L＝35～37.8mを測る。環壕の断面形は、U字状・V字状・隅



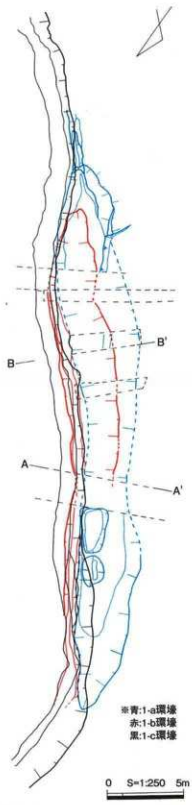
第26図　C区　1—a環壕　掘り始め跡　平面図・土層断面図

丸逆台形状と場所によって相違し、壕底は1－a環壕の広いものから比較的狭く丸みを帯びたものへと変化している。環壕下端（壕底）幅は0.3～1.2mを測り、上端幅は内側（山頂側）が1－c環壕によって削られていることから、正確な数値は定かではないが、土層断面等から推定すると3～5mの幅をもっていたものと思われる。下端（壕底）から上端の高さ（壕の深さ）は、0.6～1.2mを測る。環壕の底は1－a環壕と同様、内側は山頂部斜面へと続き、外側は緩やかに上り頂点を過ぎた後は環壕外斜面へと続いている。なお、環壕の外側は、環壕の肩を作るために高まり（土塁）が作られている。

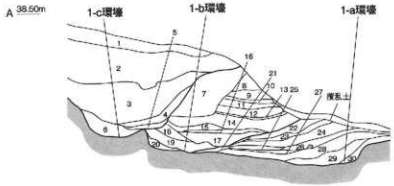
1－b環壕のその存在する位置は、1－a環壕の内側（山頂部側）に新たに移され、1－a環壕堆積土を掘り込んで作られている（一部は地山面まで達している）。環壕外側の肩（土塁）は、1－a環壕堆積土の上にさらに土を盛って肩（土塁）の高さを作りだしている。A区付近においては、1－a環壕堆積土の上に約1.2mの盛土を施している状況が窺える（第29図16～21層が盛土）。また、1－b環壕においても壕を掘り直した跡が確認できている。第28図の7～17層を埋土とするものが掘り直された1－b環壕であり、当初の1－b環壕は18～20層の自然堆積土のみをその埋土として残している。なお、この掘り直された壕の埋土である8～16層は、通常、自然堆積土ならみえるU字状に堆積する状況とは違い、水平堆積している。これは、1－c環壕の外側の肩（土塁）をより強固に作りだす目的でおこなわれた作業の痕跡だと思われる。

1－b環壕が存在する位置については、前述のとおり1－a環壕の内側（山頂部側）移動していることが分っているが、尾根近くの1－b環壕の痕跡がこの後に掘られた1－c環壕によって消されている状況であったことから、その全長を明確にすることはできないものであった。

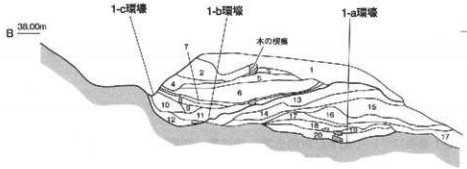
遺物は、壕底面付近から弥生前期末～中期初頭の壷・甕が出土している。環壕内堆積土からは、第28図A－A'土層断面図13層から、弥生前期末～中期初頭の壷130、甕139、底部146が、B－B'土層断面図2層から、弥生前期末～中期初頭の鉢141、底部144、6層から、弥生前期末の壷129、弥生中期初頭の甕134が出土している。その他の堆積土からも弥生前期末～中期初頭の土器片、蛤刃石斧149、凝灰岩製の石鏃147、サヌカイト製石鏃148等が出土している。



第27図　1－a・1－b・1－c環壕
1区～3区　平面図



1 褐色土
2 黒色土
3 暗黄褐色土Ⅰ
4 黄褐色土Ⅰ(灰白色地山ブロック含む)
5 黄灰色土Ⅰ(炭含む)
6 黄褐色土Ⅱ
7 暗黄褐色土Ⅱ
8 灰白色地山ブロック層
9 やや黒い黄橙色土(灰白色地山ブロック少々含む)
10 淡褐色土
11 暗灰褐色土
12 暗黄褐色～橙褐色土(灰白色地山ブロック含む)
13 暗褐色～淡黒褐色土(地山ブロック含む)
14 暗黄橙色土(灰白色地山ブロック含む)
15 橙褐色土
16 暗褐色土(地山ブロック含む)
17 黄灰色土Ⅱ(炭含む)
18 黄白色土
19 灰黄色地山ブロック層
20 橙灰色土
21 灰黄色土(粘質)
22 やや暗い灰色地山ブロック層(ブロックはかなりこわれている)
23 暗褐色土と黄橙色土と炭合土
24 黄灰色土(灰黄色地山ブロック含む)
25 淡黄褐色土(地山ブロック少々含む)
26 暗茶褐色粘質土
27 暗茶褐色砂質土
28 暗茶褐色土(地山ブロック含む)
29 茶褐色土(地山ブロック含む)
30 明橙色土



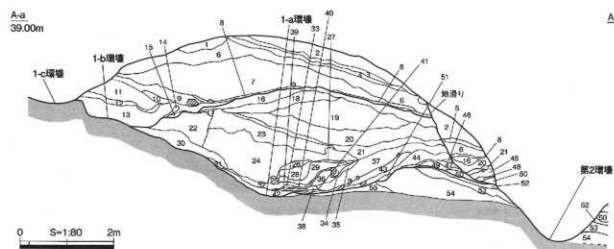
1 暗黄褐色～橙褐色土(灰白色地山ブロック含む)
※A-A'土層面12層と同
2 黒茶褐色土
3 橙黄色土(白色地山ブロック含む)
4 暗黄橙色土
5 褐黄橙色土(白色・橙色地山ブロック含む)
6 白色・橙色地山ブロック層(橙色土少々含む)
7 黒褐色土(白色・橙色地山ブロック少々含む)
8 暗灰褐褐色土(白色小地山ブロック含む)
9 灰橙色土
10 暗灰褐色土
11 暗灰褐色土Ⅰ(白色、橙色小地山ブロック含む)
12 橙灰色土
※A-A'土層面20層と同
13 暗灰橙色土Ⅱ(白色大、橙色小地山ブロック含む)
14 暗褐色土Ⅰ(橙色地山ブロック含む)
15 灰黄色土
16 暗褐色土Ⅱ(橙色地山ブロック含む)
17 褐灰黄色土Ⅰ(地山ブロック含む)
18 白色、橙色地山ブロック層
19 黒褐色土と白色、橙色地山ブロック混合土
20 暗灰黄色土Ⅱ ※17より暗

0 S=1:60 2m

第28図　1－a・1－b・1－c環壕　1区～3区　土層断面図

1－a環壕　出土遺物（第30～36図）

1－a環壕から出土した遺物は、壕底・環壕内堆積土から出土したものである。このなかでも多いのは堆積土からのもので、弥生土器の壺・甕、石板状石製品、磨製石剣、石鏃、石包丁、石斧、磨石、角石が出土している。特筆する遺物としては、楽浪郡出土の石硯に類似する石板状石製品があげられる。角石は、つぶて石と思われるもので遺跡内の岩脈から採取されたものと考えられる。なお、弥生土器片においては、図化できなかったものも多数あり、実際出土した土器はコンテナ10



T-1トレンチ
1 淡黄褐色土Ⅰ(地山ブロック含む)
2 にぶい黄茶色土(地山ブロック含む)
3 黒色土Ⅰ
4 黄褐色土Ⅰ(地山ブロック少々含む)
5 2と3の混合土
6 黄茶色土Ⅰ(炭、地山ブロック多量に含む)
7 暗褐色土、黄色土、灰色土の混合土(炭、石、地山ブロック少々含む)
8 黒色土Ⅱ(炭、黄橙色地山ブロック多く含む)
9 淡黄茶色土Ⅰ(一部炭含む)
10 淡茶黄色土、黄褐色土の混合土
11 淡黄茶色土Ⅱ(地山ブロック小粒含む)
12 11層と13層の混合土
13 白色・橙色の地山ブロック土※潰った(崩れた)地山
14 11層に類似
15 明黄茶色土、地山ブロックの混合土
16 明黄茶色土、地山小粒ブロック混合土(一部黒灰色土混入)
17 黒褐色土、黄茶色土の混合土※23層が崩れたもの?
18 黄茶色土Ⅱ(一部黒褐色土含む)(地山ブロック少々含む)
19 黄茶色土に黒炭色土が帯状に入る(炭含む)
20 暗黄褐色土Ⅰ(炭、地山小粒ブロック含む)
21 黒褐色土Ⅰ(黄茶色土一部含む)(炭含む)
22 淡黄褐色土Ⅱ(固くしまる)
23 黒褐色土Ⅱ(炭含む)
24 明黄褐色土
25 26層と同じ
26 淡明黄褐色土(白色地山小粒ブロック少々含む)
27 黄褐色土Ⅱ(炭含む)
28 淡明黄褐色土(白色・橙色地山中粒ブロック多量含む)
29 白色・橙色地山ブロック土※潰った(崩れた)地山
30 地山(岩盤)※潰った地山
31 白黄色土(小粒地山ブロック少々含む)
32 橙色土、白色土の混合土(地山ブロックが崩れた感じ)
33 灰白色土(橙色土含む)
34 黄褐色土Ⅱ(炭、地山小ブロック含む)
35 34層に地山小ブロック多く含む
36 灰白色土、橙色土、橙色土の混合土(地山が風化した土に似ている)
37 黄褐色土Ⅳ(炭、地山ブロック含む)
38 灰色土、橙色土の混合土(炭含む)
39 灰褐色土
40 淡橙色土
41 灰色土(炭含む)
42 暗灰色土(炭含む)
43 明黄褐色土Ⅱ(地山ブロック多量含む)
44 黄褐色土Ⅴ(炭、地山ブロック含む)
45 37と44の混合土
46 暗黄褐色土Ⅱ
47 黒褐色土Ⅱ(黄色土一部含む)(地山小粒ブロック含む)
48 46と47の混合土
49 黄褐色土、黒褐色土の混合土(地山小ブロック含む)
50 黒茶褐色土(黒色土、黄褐色土含む)
51 淡黄褐色土Ⅱ(地山ブロック含む)
52 黒色土Ⅱ(1-a環壕掘削前後の旧表土)
53 黒茶褐色土
54 にぶい黄橙色土
55 黄褐色土

第29図　1−a環壕　A区　土層断面図

箱に及んでいる。

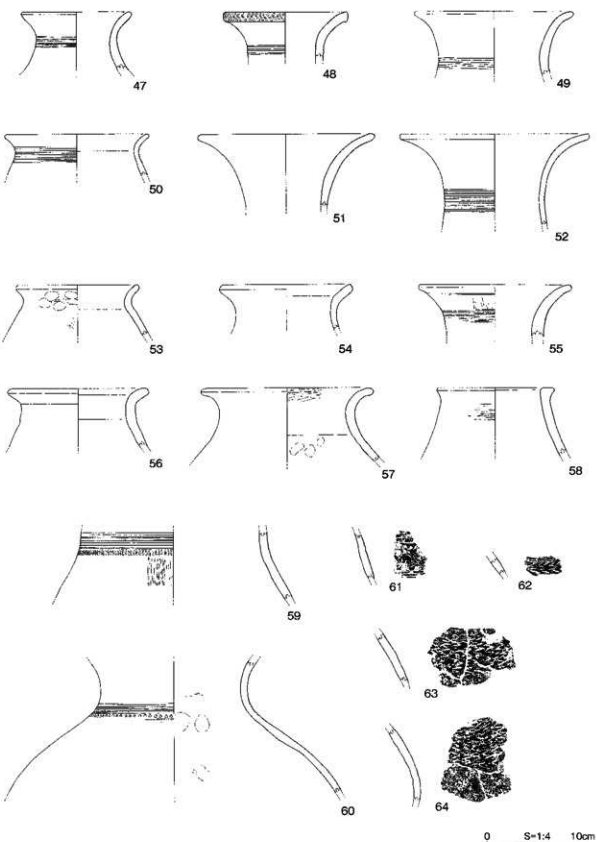
以下、簡単に出土遺物について記す。※出土地・寸法等、詳細は遺物観察表を参照。

弥生土器（第30〜32図）

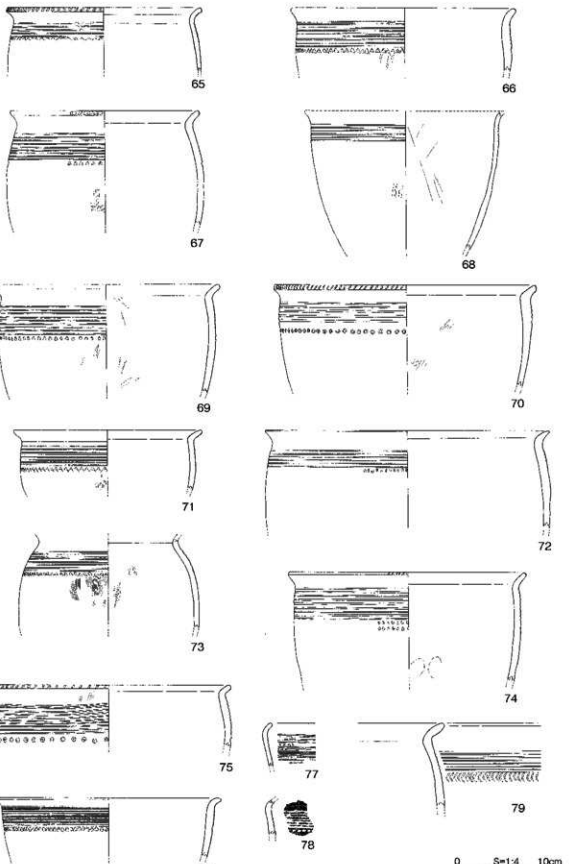
壺：47〜50・52は頸部にヘラ描き直線文が施され、48は口縁端部に羽状刺突文がみられる壺の口縁部〜頸部である。60は頸部にヘラ描き直線文と三角形刺突文を施す壺の頸部から胴部付近である。61〜64は壺の胴部付近でヘラ描き直線文を施すもので、61は刺突文、62〜64は羽状刺突文もみられる。以上の壺はⅠ−4様式のものと思われる。53・54・56・57は無文の壺の口縁部〜頸部である。Ⅰ−4〜Ⅱ−1様式のものと思われる。55・58・59は頸部にクシ描き直線文を施す壺の頸部付近で、59はクシ描き直線文の下に刺突文も施されている。Ⅱ−1様式のものと思われる。

甕：65〜72・74・77〜79は頸部〜胴部にヘラ描き直線文を施す甕の口縁部〜胴部である。このうち65〜67・69〜72・74・77・78は三角形刺突文が、79は羽状刺突文がヘラ描き直線文の下に施されている。以上の甕はⅠ−4様式のものと思われる。

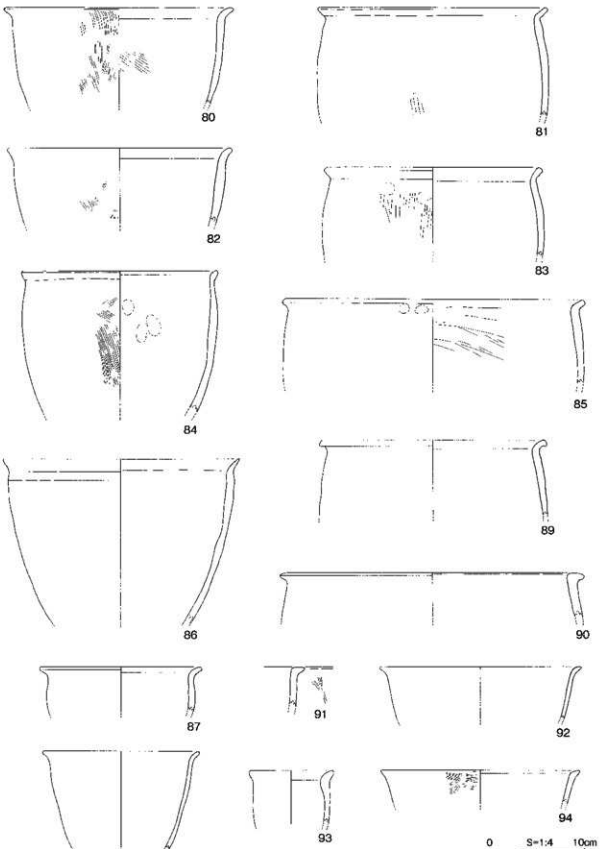
80〜94は無文の甕の口縁部〜胴部である。このうち93は小形の甕となり得るものである。また、86は土器胴部付着の煤の^{14}C年代測定により、BC840年±40年という測定結果がでている。[1] 73は頸部〜胴部にかけて直線文とその下に刺突文を施す甕の口縁部〜胴部である。75は頸部〜胴部にかけて直線文とその下に半裁竹管文を施す甕か鉢と思われるものである。以上、Ⅰ−4〜Ⅱ−1様式のものと思われる。76は甕の口縁部〜胴部で口縁部下にクシ描き直線文と三角形刺突文を施すもので



第30図　1－a環壕　出土土器（1）



第31図　1−a環壕　出土土器（2）



第32図　1—a環壕　出土土器（3）

ある。Ⅱ－１様式のものと思われる。なお、71は鉢の可能性も考えられる。

石器（第33～36図）

石版状石製品：95はC区１－a環壕掘り始め跡の堆積土から出土した石片である。2.8×3.2cmの扁形を呈するが完形品ではない。原形の大きさは分らないが、方形を呈するものであったと思われる。石材は砂岩で内外ともに黄茶色で側面に一部黒色のところがみえる。また、片面は円形に窪んだ箇所があり、意図的に丸く磨り削られている。国内の弥生期の石器にはあてはまるものがなく、楽浪郡出土の石硯にその形態が類似するものである。[3~6] 仮に楽浪の石硯とするならば、円形の窪んだところには把手のようなものが付くのかもしれない。楽浪郡出土石硯の国内所蔵品と比較すると材質は類似するものと見受けられる。[7]

武器形石器：96は鉄剣形の磨製石剣の先端部付近である。断面は扁平な六角形を呈し、鎬は２本作られている。97も鉄剣形の磨製石剣の一部と思われるものである。この石剣は断面菱形の中央に１本の鎬をもつタイプに属するものと推察される。

石鏃：98～101は黒曜石の石鏃である。98は縦長で基辺の窪みが浅い凹基式で、側辺は鋸歯状に作られている。100は横広タイプの石鏃で、基辺の窪みは浅い凹基式である。先端は欠損している。99・101は小形の石鏃で基辺の窪みは浅いが凹基を意識して作られたものと思われる。102・103は石鏃の未製品と思われるものである。104～122はサヌカイト製の石鏃である。このうち、104～110・112・113・115・116は凹基式か、凹基式を意識して作られたものと思われ、111・114・117～119・121・122は平基式、120は先端部を欠損する凸基Ⅱ式と思われる。サヌカイト製石鏃は104～107のような比較的大形のものも少数あるが、小形のものが大半を占めるように見受けられる。113は他の石鏃とは形態が異なるもので、古いタイプの石鏃かもしれない。なお、99・100・104～108・110・112・114～117・120～122は先端部もしくは先端が欠損し、109・111・118・119は先端が摩滅しているものである。黒曜石製・サヌカイト製、両者ともに先端・先端部が欠損・摩滅しているものが多いことから、実際に使用されたものと考えられる。

※104は１－b環壕埋上、114は１－c環壕埋土の出上品である。

その他の石器：123は左右が欠損した左包丁で、上部に穿孔痕が残っているものである。124は扁平片刃石斧の完形品である。125～127は蛤刃石斧の基部・刃部の欠損品である。このうち125は柄装着の痕と思われる痕跡が残っている。128は１面を使用した磨石である。

※124は１－b環壕埋上の出土品である。

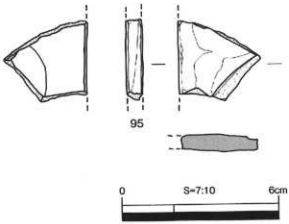
１－b環壕　出土遺物（第37～39図）

１－b環壕から出土した遺物も１－a環壕と同様、壕底・環壕内堆積上から出土したものである。またこれらの多くは堆積土からのもので、弥生土器の壺・甕・鉢・底部、石鏃、石斧が出土している。出土遺物量は少ないようにみえるが、弥生土器片においては、図化できなかったものが多数あることから、実際にはもっと多くの土器が出土している。出土した土器はコンテナ３箱に及んでいる。

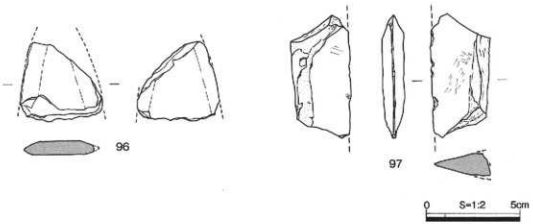
以下、簡単に出上遺物について述べる。※出土地・寸法等、詳細は遺物観察表を参照。

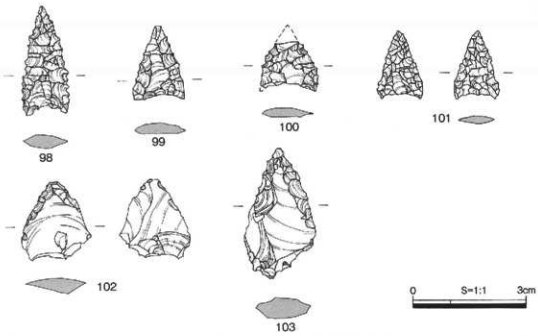
弥生土器（第37図）

壺：129・130は頸部にヘラ描き直線文が施されるⅠ－４様式の壺の口縁部～頸部である。131は

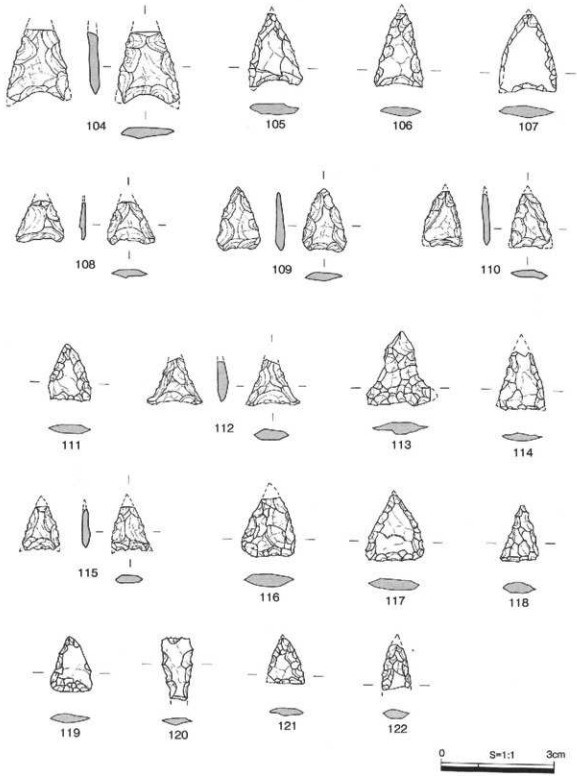


第33図　C区　1−a環壕　掘り始め跡付近出土　石板状石製品

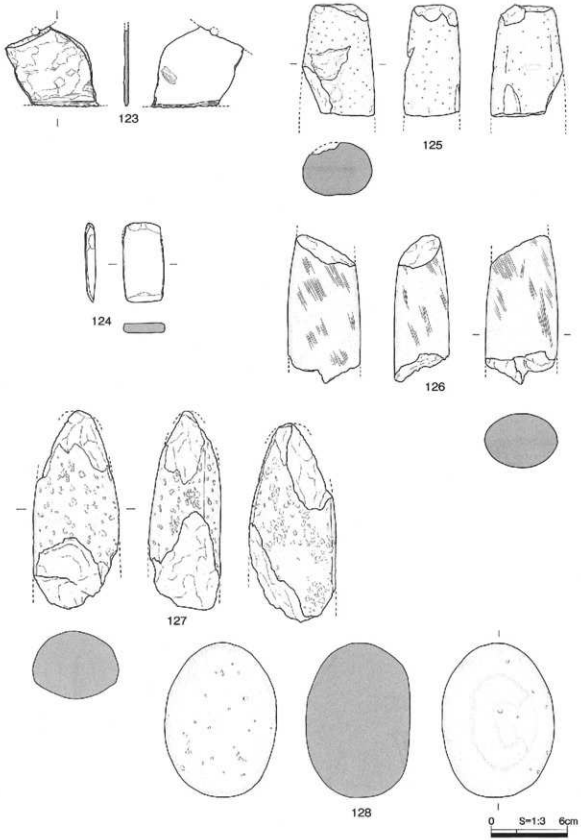




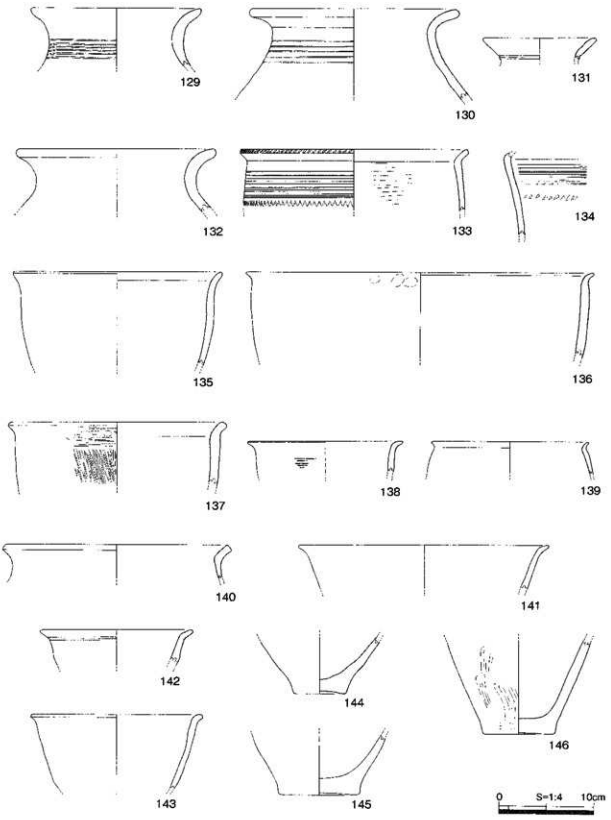
第34図　1−a環壕　出土石器（石剣・石鏃）（1）



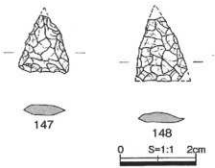
第35図　1−a環壕　出土石器（石鏃）（2）



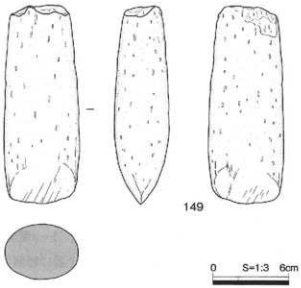
第36図　1－a環壕　出土石器（3）



第37図　1−b環壕　出土土器



第38図　1−b環壕　出土石器（石鏃）（1）



第39図　1−b環壕　出土石器（2）

頸部に突帯がまわる壺の口縁部付近で、132は無文の壺の口縁部～頸部である。以上、Ⅰ－4～Ⅱ－1様式のものと思われる。

甕：133は頸部～胴部にヘラ描き直線文と刺突文を施すⅠ－4様式の甕の口縁部～胴部である。135～140は無文の甕の口縁部～胴部である。Ⅰ－4～Ⅱ－1様式のものと思われる。134は頸部～胴部にクシ描き直線文と三角形刺突文を施すⅡ－1様式と思われる甕の口縁部～胴部である。

鉢：141～143は口縁部付近が残るⅠ－4～Ⅱ－1様式の鉢と思われるものである。

底部：144～146は壺もしくは甕の底部である。

石器（第38・39図）

石鏃：147～148は平基式の石鏃である。147は凝灰岩製で先端が欠損している。148はサヌカイト製のもので、先端と基端を欠損する。

その他の石器：149は蛤刃石斧の完形品である。1−b環壕調査時に出土しているが、1−c環壕の堆積土となる土層から出土している可能性も考えられる。

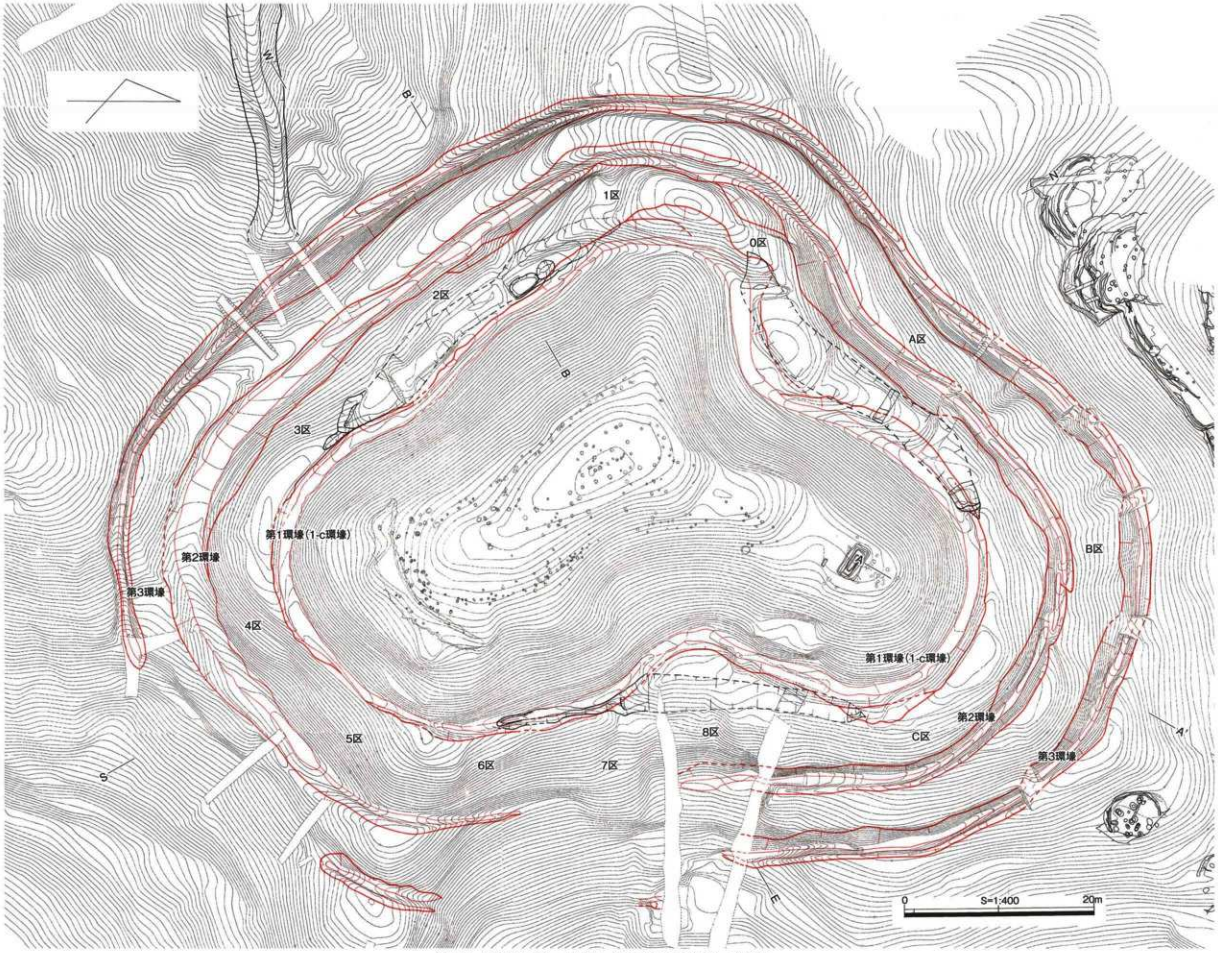
（3）第1環壕（1−c環壕）・第2環壕・第3環壕（第5・40〜42図）

第1環壕（1−c環壕）、第2環壕、第3環壕は、1−b環壕埋没後に作られた山頂部を一周する環壕である。それぞれ山頂部側から第1環壕（1−c環壕）、第2環壕、第3環壕と呼称している（以下、第1環壕（1−c環壕）は「1−c環壕」と省略して述べる）。調査は、環壕の存在する位置を確認するためのトレンチ調査をした上で、その全容を明らかにする全掘調査をおこなった。検出したこれら3本の環壕は、前述のとおり山頂部を中心にして山頂部下斜面を鉢巻状に一周するもので、山頂部標高L＝46mに対し、1−c環壕底面L＝35.3〜38.8m、第2環壕底面L＝31.6〜39.2m、第3環壕底面L＝27.2〜38.6mを測っている。それぞれの環壕間の水平距離は第1〜第2環壕間約8〜10m、第2〜第3環壕間約8mと、ほぼ均等な間隔を保っており、第1環壕を基に計画的に作られた様子が窺えるものである。また、1−c環壕と第2環壕の埋土から出土した土器片が接合した事実やこの3本の環壕の埋土中出土土器に時期差がみられないことから、これら3本の環壕は同時期に機能し且つ、廃絶したものと考えられる。なお、これら環壕内からは、大量の土器・石器・つぶて石が出土しており、この3本の環壕が存在する時が本遺跡の最盛期を誇る時期と考えられる。

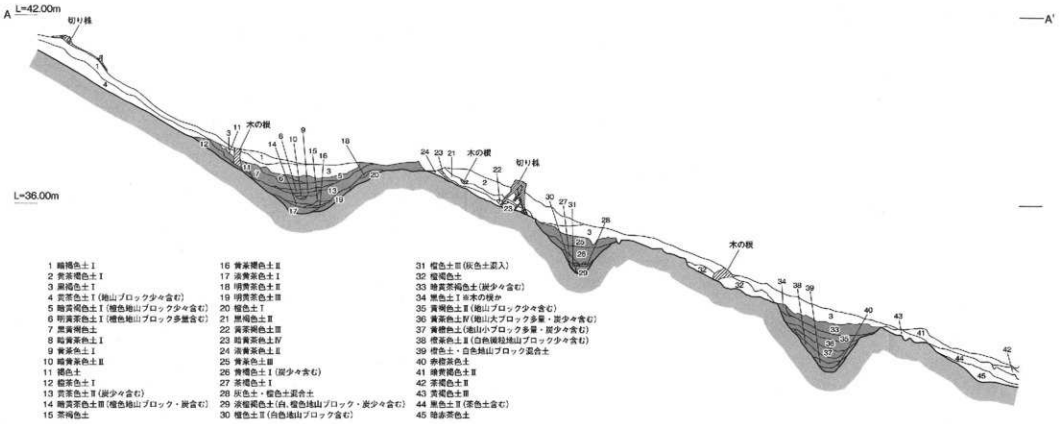
以下、各環壕についての詳細を順に述べる。

第1環壕（1−c環壕）（第40〜42図）

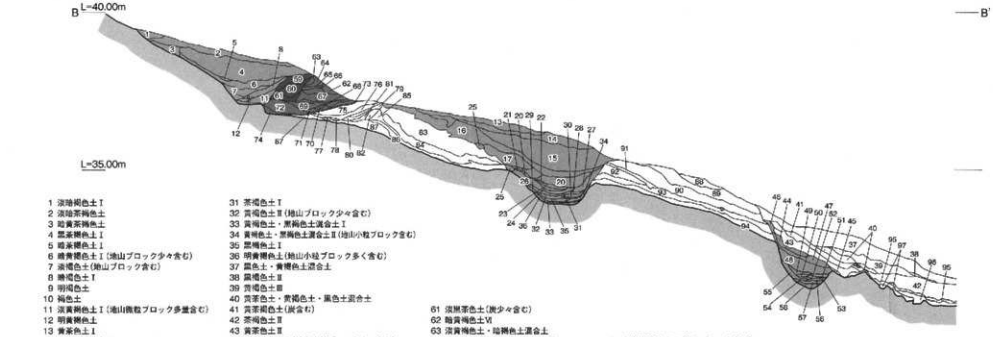
1−c環壕は、1−b環壕埋没後に作られたもので、基本的には1−b環壕を作り直した環壕と思われる。作り直された位置は、1−b環壕の内側（山頂部側）となり、1−a環壕→1−b環壕→1−c環壕とそのつど内側（山頂部側）に作り直されていった過程がこの状況から窺える。環壕の総延長は、約209mを測り、1−a環壕のような途切れた壕から全周する環壕と変わっている（1−b環壕は途切れるか一周するか不明）。環壕下端（壕底）幅は0.4〜2m、上端（環壕肩）幅は3〜6mで、環壕の深さである下端（壕底）から上端（環壕肩）の最大高は、1.5mを測っている。環壕の断面形は壕底が平坦な逆台形状を呈し、内側は山頂部斜面へと続き外側は緩やかに上り、環壕肩の頂点を過ぎた後は環壕外斜面へと続いている。また、環壕の外側の一部では、環壕の肩を作るために土塁状の高まりが作られている状況が確認されている。この土塁状の環壕外側の肩は、1−b環壕堆積土の上に1.2mもの盛土を施し構築している場所も確認されている（A区）。環壕の基盤は環壕底から環壕内側（山頂部側）については、いずれの場所も地山となっているが、環壕外側においては、1−b環壕が存在した場所は1−b環壕堆積土、その他、山頂部から四方に派生する尾根または、1−b環壕が存在しない場所は地山となっている。前述の土塁状の環壕外側の肩は、この1−b環壕堆積土上に築かれているものである。これは、地山面を掘削した尾根などでは容易に作り出せた環壕肩が、谷状に位置する1−b環壕存在箇所においては、土を盛ることでしか環壕肩を作り出せなかったことに起因するものと考えられる。また、先述の1−a環壕・1−b環壕でも触れたが、1−c環壕を掘削する際に1−b環壕堆積土を削平し、作業ステージを作った場所（C区1−a環壕掘り始め跡　参照）や土塁状の環壕肩をより強固にするための構築作業の様子（1−b環壕　参照）が確認されている。その他、1−a環壕や1−b環壕でみられた環壕の掘り直しが一部で確認されているが、C区〜8区においては山頂部〜環壕間斜面の大規模な地滑りから大掛かりな環壕掘り直しがおこなわれていることが確認されている。



第40図　第１環壕（1－c環壕）・第２環壕・第３環壕　全体図

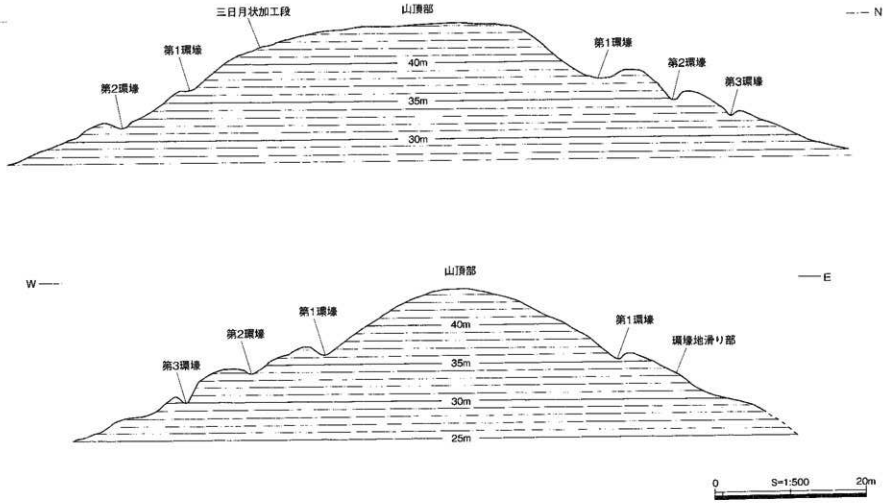


1 暗褐色土Ⅰ
2 黄茶褐色土Ⅰ
3 黄褐色土Ⅰ
4 黄茶色土Ⅰ(地山ブロック少々含む)
5 暗黄褐色土Ⅰ(橙色地山ブロック少々含む)
6 明黄茶色土Ⅰ(橙色地山ブロック多量含む)
7 黒黄褐色土
8 暗青茶色土Ⅰ
9 青茶色土Ⅰ
10 暗青茶色土Ⅱ
11 褐色土
12 橙茶色土Ⅰ
13 黄茶色土Ⅱ(炭少々含む)
14 暗黄茶色土Ⅱ(橙色地山ブロック・炭含む)
15 茶褐色土
16 青茶褐色土Ⅱ
17 淡青茶色土Ⅰ
18 明青茶色土Ⅱ
19 明黄茶色土Ⅱ
20 橙色土Ⅰ
21 黒褐色土Ⅱ
22 青茶褐色土Ⅲ
23 暗青茶色土Ⅳ
24 淡青茶色土Ⅱ
25 青茶色土Ⅲ
26 青褐色土Ⅰ(炭少々含む)
27 茶褐色土Ⅰ
28 灰色土・橙色土混合土
29 淡橙褐色土(白、橙色地山ブロック・炭少々含む)
30 橙色土Ⅱ(白色地山ブロック含む)
31 橙色土Ⅲ(灰色土混入)
32 橙褐色土
33 暗黄茶褐色土(炭少々含む)
34 黒色土Ⅰ(赤木の根か)
35 青褐色土Ⅱ(地山ブロック少々含む)
36 青茶色土Ⅳ(地山大ブロック多量・炭少々含む)
37 青橙色土(地山小ブロック多量・炭少々含む)
38 橙茶色土Ⅱ(白色風粒地山ブロック少々含む)
39 橙色土・白色地山ブロック混合土
40 赤橙茶色土
41 暗黄褐色土Ⅱ
42 茶褐色土Ⅱ
43 黄褐色土Ⅱ
44 黒色土Ⅱ(茶色土含む)
45 暗赤茶色土



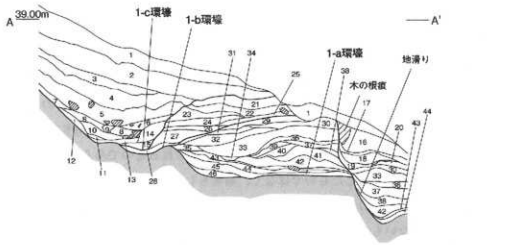
1 淡暗褐色土Ⅰ
2 淡暗茶褐色土
3 暗黄茶褐色土
4 黒茶褐色土Ⅰ
5 暗茶褐色土Ⅰ
6 暗黄褐色土Ⅰ(地山ブロック少々含む)
7 淡橙色土(地山ブロック含む)
8 暗橙色土Ⅰ
9 明橙色土
10 褐色土
11 淡黄褐色土Ⅰ(地山微粒ブロック多量含む)
12 明黄褐色土
13 黄茶色土Ⅰ
14 淡黄茶褐色土Ⅰ
15 黒色土Ⅰ
16 暗黄褐色土Ⅱ
17 淡橙茶褐色土Ⅰ(地山ブロック含む)
18 淡茶褐色土Ⅰ
19 暗茶褐色土・地山ブロック混合土
20 暗黄褐色土Ⅱ(炭少々含む)
21 明橙茶褐色土Ⅰ
22 黄茶灰色土
23 淡茶灰色土(地山大粒ブロック含む)
24 暗茶色土
25 黒色土Ⅱ
26 暗橙褐色土Ⅰ
27 黄褐色土Ⅰ
28 暗黄茶褐色土Ⅰ
29 暗黄褐色土・黒色土混合土
30 暗黄茶褐色土Ⅱ(地山微粒ブロック多量含む)
31 茶褐色土Ⅰ
32 黄褐色土Ⅱ(地山ブロック少々含む)
33 黄褐色土・黒褐色土混合土Ⅰ
34 黄褐色土・黒褐色土混合土Ⅱ(地山小粒ブロック含む)
35 黒褐色土Ⅰ
36 明黄褐色土(地山小粒ブロック多く含む)
37 黒色土・黄褐色土混合土
38 黒褐色土Ⅱ
39 黄褐色土Ⅲ
40 黄茶色土・黄褐色土・黒色土混合土
41 黄茶褐色土(炭含む)
42 茶褐色土Ⅱ
43 黄茶色土Ⅱ
44 暗黄茶色土Ⅰ(地山小粒ブロック少々含む)
45 茶灰色土
46 黄褐色土Ⅰ
47 淡黄褐色土Ⅱ(地山中粒ブロック少々含む)
48 黄褐色粘質土
49 黄褐色土Ⅳ
50 黄茶色土・橙褐色土混合土
51 橙褐色土Ⅰ
52 暗黄褐色土Ⅳ(地山微粒ブロック含む)
53 暗黄茶褐色土Ⅱ
54 暗黄褐色土Ⅴ
55 暗黄茶褐色土Ⅳ
56 橙褐色土Ⅱ
57 橙褐色土Ⅲ(地山微粒ブロック多量含む)
58 黄褐色土Ⅴ
59 橙褐色土・暗褐色土混合土
60 橙褐色土Ⅲ(暗褐色土多く含む)
61 淡黒茶色土(炭少々含む)
62 暗黄褐色土Ⅵ
63 淡黄褐色土・暗褐色土混合土
64 明黄橙色土(地山ブロック含む)
65 暗褐色土Ⅱ
66 淡橙褐色土(地山ブロック多く含む)
67 暗橙褐色土Ⅱ
68 暗褐色土Ⅲ(炭含む)
69 淡暗褐色土・淡茶褐色土混合土
70 黄褐色土Ⅵ(地山微粒ブロック少々含む)
71 明黄褐色土Ⅵ(地山微粒ブロック少々含む)
72 灰色、橙色地山ブロックから成る層
73 灰褐色土
74 橙茶色土
75 淡黄褐色土(地山ブロック多量含む)
76 暗褐色土Ⅳ
77 黄褐色土Ⅶ
78 黄褐色土Ⅲ
79 淡黄茶褐色土Ⅱ
80 淡暗褐色土Ⅱ
81 淡橙茶褐色土Ⅱ(地山ブロック含む)
82 淡橙茶褐色土Ⅲ
83 明橙茶褐色土Ⅱ
84 黒茶褐色土Ⅱ
85 淡黒褐色土(地山ブロック少々含む)
86 黄茶褐色土Ⅱ
87 黄橙色土・地山ブロック混合土(地山?)
88 黒色土・黄褐色土混合土
89 明黄茶色土Ⅱ(地山微粒ブロック少々含む)
90 暗黄茶色土Ⅱ(地山中粒ブロック多量含む)
91 黒褐色土Ⅳ
92 黄茶色土Ⅱ(地山中粒ブロック多量含む)
93 黒茶褐色土Ⅲ
94 黄茶褐色土Ⅲ
95 黒色土Ⅲ(旧耕土)
96 暗茶褐色土Ⅱ
97 淡茶褐色土Ⅱ

第41図　第1・2・3環壕　土層断面図



第42図 山頂部～環壕断面図

第43図　1—c環壕　3区　平面図



1 暗黄茶色土
2 黒色土Ⅰ(暗褐茶色の地山小ブロック含む)
3 淡黒黄褐色土(暗褐茶色の地山小ブロック少量含む)
4 黒褐色土Ⅰ(暗褐茶色の地山ブロック含む)
5 暗黄褐色土Ⅰ(黒3層淡黒黄褐色土、一部混入)
6 淡黄黒色土(黒、黄色地山ブロック含む)
7 淡黄茶色土(地山ブロック少量含む)
8 暗黄褐色砂質土(黒、地土多く含む)
9 炭Ⅰ
10 赤褐色土(黒、地土多量含む)
11 炭Ⅱ
12 黄灰色土Ⅰ
13 灰灰色土Ⅱ(炭含む)
14 暗黄褐色土Ⅱ
15 暗黄灰色土(炭多く含む)
16 暗黄褐色土Ⅲ(地山ブロック少量含む)
17 淡黄灰色土Ⅰ(白色地山小ブロック含む)
18 黄褐色土・暗黄褐色土の混合土Ⅰ(炭含む)
19 黒色土Ⅱ(黄褐色土、一部混入)
20 黄褐色土・暗黄褐色土の混合土Ⅱ(堀)
21 暗黄褐色土Ⅳ(地山大ブロック含む)
22 暗黄褐色土Ⅴ(黄色・橙色の砂粒を含む)
23 灰褐色土(黄色の砂粒含む)
24 黄褐色土Ⅰ
25 暗褐色土Ⅰ
26 暗黄褐色土Ⅵ(橙色土の一部と炭含む)
27 暗橙白色の地山ブロック土Ⅰ(第34層より粗)
28 灰褐色粘質土
29 暗褐色粘質土(地山ブロック2～3cm大含む)
30 淡黒褐色土Ⅰ(地山ブロック少量含む)
31 暗黄褐色土Ⅶ(地山ブロック4～5cm大多量含む)
32 暗橙白色の地山ブロック土Ⅱ
33 暗褐色土Ⅱ(黄色地山小ブロック含む)
34 明褐色土(地山小ブロック含む)
35 淡橙褐色粘質土
36 暗橙褐色土Ⅰ
37 淡黒褐色土(炭含む)
38 明黄褐色土Ⅰ(地山ブロック少量含む)
39 黄白色土(白色地山小ブロック含む)
40 暗橙褐色土Ⅱ(黒色砂粒含む)
41 地山ブロック土Ⅱ(散らかい)
42 乳橙白色の地山ブロック土(硬くしまる)
43 淡黄灰色土Ⅱ
44 暗黄褐色土Ⅹ
45 明黄褐色砂質土(地山ブロック1～2cm大含む)
46 灰褐色粘質土(黄色地山ブロック含む)

0 S=1:60 2m

第44図　1－c環壕　3区　土層断面図

遺物は、埋土層及び、環壕底面から弥生前期末～中期後葉の壺（九州系の可能性がある土器片218）・甕・鉢・蓋・底部、弥生中期中葉～中期後葉の高坏・台形土器、土玉、石板状石製品、銅剣形磨製石剣、鉄剣形磨製石剣、環状石斧、黒曜石製石鏃、黒曜石製石鏃未製品、サヌカイト製石鏃、石包丁、大型石包丁、蛤刃石斧、扁平片刃石斧、砥石、槌石、黒曜石製石錐未製品、サヌカイト製楔形石器、サヌカイトの板状原材、つぶて石（2000個以上）等が出土している。これら遺物は壕底からの出土が少なく、そのほとんどは埋土層からのもので、つぶて石と混在する状態で壕底上約10～30cmの埋土層から多くが出土している。その他、環壕内上層の埋土からは、須恵器片が少々出土している。なお、環壕内からの出土遺物はこの1－c環壕が圧倒的に多く、その量はコンテナ44箱に及んでいる。

以下、各区個別の調査結果について述べる。

1－c環壕　3区（第40・43・44図）

1－c環壕の南西側付近であり、南西部で検出した1－a環壕の南西端の環壕終結付近にもあたるところである。検出した1－c環壕は、1－b環壕の内側に作られており、1－a環壕→1－b環壕→1－c環壕と内側に作り直されていった状況を顕著に現しているものであった。環壕の断面形は逆台形状を呈し、環壕底面はL＝37～37.5mを測る。環壕の下端（壕底）幅は1～1.4m、上端幅は約

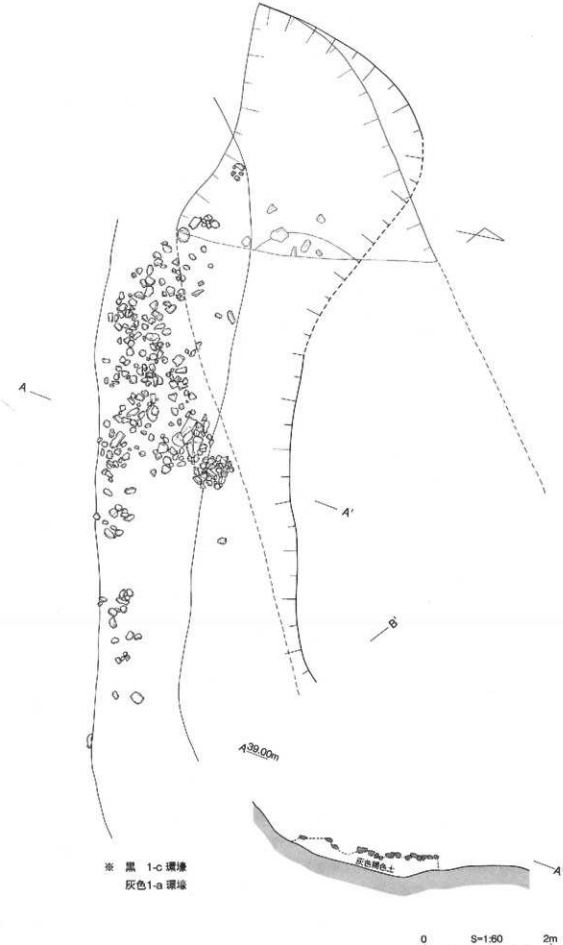
3m、環壕の下端（壕底）から上端にあたる外側の環壕肩までの高さ（環壕の深さ）は約0.9mを測るものである。この場所での環壕外側の肩の土層状部分は21～24層部分とみられ、50cm程度の盛土が施されたものと推定される。また、環壕を掘削した面は、固い地山面まで到達しており、当時この環壕を掘削することは大変な作業であったことが窺える。土層断面からは、環壕を掘り直したと思われる痕跡が認められている。当初の環壕は14・15層を埋土にもつもので、これを掘り直し、最終的に1～13層を埋土とした環壕となっているようである。この掘り直した環壕の痕跡は、1－a環壕・1－b環壕同様、一部の環壕箇所においてみられるものである。これは、一連の環壕を大規模（計画的）に掘り直したものではなく、崩落もしくは自然に堆積してしまった環壕を現状に戻すために掘り直したものと考えられる。また、環壕内堆積土は自然堆積土と思われ、意図的に埋めた様子はみられないものである。その他、環壕底からやや中頂部に上がったところからは焼土跡を検出している。この焼土跡は、環壕底面と同じ地山面に焼けた痕跡を残すものであったことから、環壕が作られた時もしくは、環壕が機能していた時の焼土跡と推測できるが、その目的・性格は不明である。

遺物は、環壕底面及び環壕底から10～20cm浮いた状態で5～20cm大のつぶて石と混在して、弥生中期中葉～中期後葉の壷178・193・217・高坏281・底部301・305、上玉339・341、環状石斧346、楔石465、黒曜石製の石鏃361・369・372・379・382、サヌカイト製の石鏃403・407・413・418・420・423・424・428・437・440が出土している。また、調査時の排土から黒曜石製の石鏃381、サヌカイト製の石鏃386、堆積土8層からサヌカイト製の石鏃114、8・13層から弥生中期中葉～中期後葉の壷196・甕252等が出土している。なお、堆積土中からは弥生中期中葉～中期後葉の土器片等が多く出土しているが、6・8・9層中の出土がもっとも多い。その他、これら堆積土中から九州系の弥生土器の壷ともみられる上器片218が出土している。以上のこれら遺物は、山頂部から転落してきたものと推測され、土器はすべてが破片である。

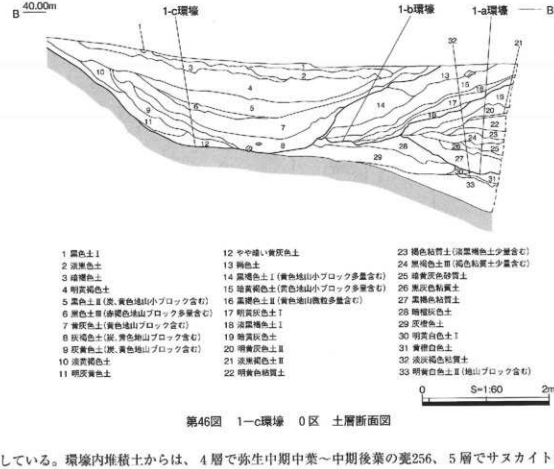
1－c環壕　0区（第40・45・46図）

1－c環壕の北西側付近であり、北西部で検出した1－a環壕の南東端の環壕終結付近にもあたるところである。検出した1－c環壕は、1－b環壕の内側（山頂部側）に作られており、ここでも1－a環壕→1－b環壕→1－c環壕と順次、内側に作り直されていった状況を土層断面にて確認している（この場所での1－b環壕はトレンチでの確認に留めたため、その全容は分っていないことから平面図第43図に1－b環壕を作図することはできていない）。環壕の断面形は逆台形状を呈し、環壕底面はL＝37.8～38mを測る。環壕の下端（壕底）幅は0.8～2m、上端幅は約6m、を測り、この場所の1－c環壕は上端・壕底ともに幅が広いものとなっている。環壕の下端（壕底）から残存する上端にあたる外側の環壕肩までの高さ（環壕の深さ）は約1.4mを測るが、外側の環壕肩は調査時に掘り過ぎの感が否めないことから、当時はもう少し高い（環壕の深さが深い）ものであったと考えられる。環壕内堆積土は自然堆積土と思われ、意図的に埋めた様子はみられないものである。

遺物は、環壕底面及び環壕底から20～30cm浮いた状態で5～20cm大のつぶて石と混在して、弥生前期末～中期初頭の壷159・甕225・232・鉢235、弥生中期中葉の壷166・219、弥生中期中葉～中期後葉の甕251・高坏296・底部326・329・330、石板状石製品343、サヌカイト製の石鏃414が出土



第45図　1−c環境　0区　平面図・断面図



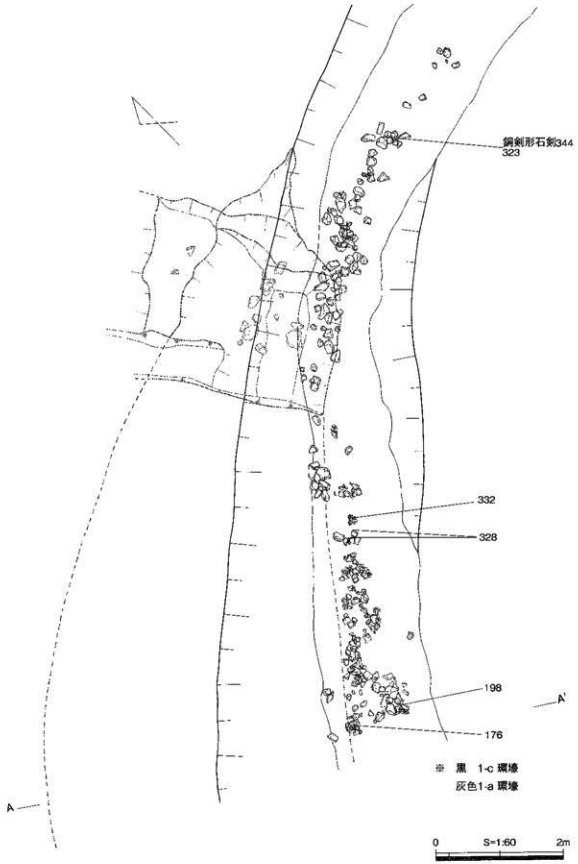
第46図　1－c環壕　0区　土層断面図

している。環壕内堆積土からは、4層で弥生中期中葉～中期後葉の甕256、5層でサヌカイト製の石鏃441・442、石板状石製品にも類似し得る、用途不明石製品464、6層でサヌカイト製の石鏃421、7層で弥生中期中葉～中期後葉の甕247・高坏279、黒曜石製石鏃359、サヌカイト製石鏃401・408・416・425、つぶて石、最下層8層で弥生中期中葉～中期後葉の甕244、サヌカイト製石鏃391、つぶて石が出土している。また、堆積土上層からはサヌカイト製の石匙467、調査時の排土から黒曜石製の石鏃360・365・366、サヌカイト製の石鏃405が出土している。その他、堆積土中からは黒曜石製の石鏃374の他、多くの弥生土器片が出土しているが、もっとも出土数が多いのは下層に属する7・8層中からであった。なお、これら遺物は、山頂部から転落してきたものと推測され、土器はすべてが破片である。

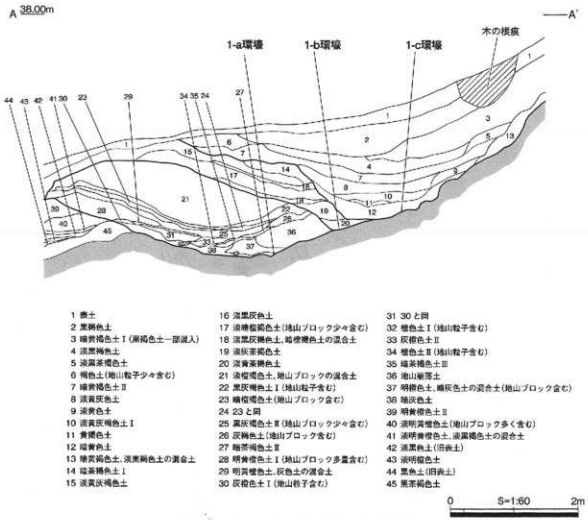
1－c環壕　B区～C区（第40・47・48図）

1－c環壕の北側付近であり、北西部で検出した1－a環壕の北西端の環壕終結付近にもあたるところである。検出した1－c環壕は、1－b環壕の内側（山頂部側）に作られており、この場所においても1－a環壕→1－b環壕→1－c環壕と順に内側に作り直されていった状況を上層断面で確認している（この場所での1－b環壕もトレンチでの確認調査に留めたため、その全容が分らなかったことから、第45図の平面図には1－b環壕を作図していない）。環壕の断面形は他の場所と同じく逆台形状を呈しており、環壕底面はL＝35.3～35.6mを測っている。環壕の下端（壕底）幅は0.65～1.1m、上端幅は約5.5mで、環壕の下端（壕底）から残存する上端にあたる外側の環壕肩までの高さ（環壕の深さ）は約1.2mを測る。環壕内堆積土は自然堆積土と思われる。

遺物は、環壕底面及び環壕底から15～30cm浮いた状態で5～20cm大のつぶて石と混在して弥生



第47図　1−c環壕　B区～C区　平面図



第48図　1－c環壕　B区～C区　土層断面図

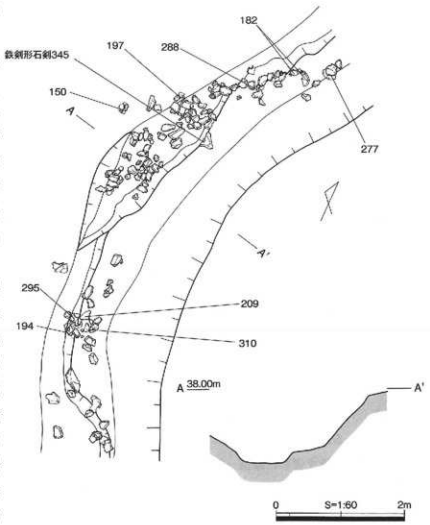
中期中葉～中期後葉の壷176・198・底部273・323・328・332・高坏299、銅剣形石剣344、環状石斧が出土している。環壕内堆積土からは、7層で弥生前期末～中期初頭の壷154、土玉338、中層でサヌカイト製の楔形石器471、黒曜石製の石鏃352・375・377、サヌカイト製の石鏃389・392～394・396・429、上層で砥石462、黒曜石製の石鏃378が出土している。その他、堆積土中からは多くの弥生土器片が下層を中心に出土している。なお、出土している土器片はすべてが破片であり、山頂部からの転落物と思われる。

以上の出土遺物のなかでも特筆するものとして銅剣形磨製石剣344がある。青銅器の銅剣の模倣品と考えられるもので、祭祀用遺物と想定されるものである。このような希少な祭祀用具がこの場所で出土することは、この落下元である山頂部北側の平坦面の突端付近で何らかの祭祀がおこなわれていたことを示唆させるものである。

1－c環壕　8区（第40・49図）

1－c環壕の東側付近にあたるところである。検出した1－c環壕は、1－a環壕から大きく内側（山頂部側）にはいったところに作られている。なお、この場所では、1－b環壕は検出されていない。環壕の断面形は他の場所と同じく逆台形状を呈しており、環壕底面はL＝36～36.6mを測る。環壕の下端（壕底）幅は0.8～1.3m、上端幅は約4mで、環壕の下端（壕底）から残存する上端に

あたる外側の環壕肩までの高さ（環壕の深さ）は約1mを測るものである。環壕内の土層堆積状況は、他と同様、自然堆積土である。環壕基盤は、1－b環壕が存在しないことから、壕底及び環壕外側の肩も地山であり、この場所では、土塁状の環壕肩の高まりはみられない。



第49図　1－c環壕　8区　平面図・断面図

遺物は、環壕底面及び環壕底から15～30cm浮いた状態で5～20cm大のつぶて石と混在して弥生前期末～中期初頭の壺150、弥生中期中葉～中期後葉の壺182・194・197・209・220・高坏288・295・台形土器277・底部310・316が出土している。環壕内堆積土からは、弥生前期末～中期初頭の壺152・155・甕224・229・231・233・234、弥生中期中葉～中期後葉の壺188・201・203・205・214・甕239・248・264・265・269・270・高坏282・286・289・290・底部302・312・318・327、鉄剣形石剣345、石包丁443・446、砥石457・463・466、サヌカイト製の板状大型石材の石片469、サヌカイト製の石鏃395・399・426、その他多くの弥生土器片が出土している。これらの他、調査時の排土から黒曜石製の石鏃358、環壕寄りの山頂部下斜面でサヌカイト製の石鏃415が出土している。以上、出土している土器片はすべてが破片であり、山頂部からの転落物と思われる。なお、1－c環壕の出土遺物量は、1区・2区・3区と、この8区が最も多いものである。

1－c環壕　出土遺物（第50～74図）

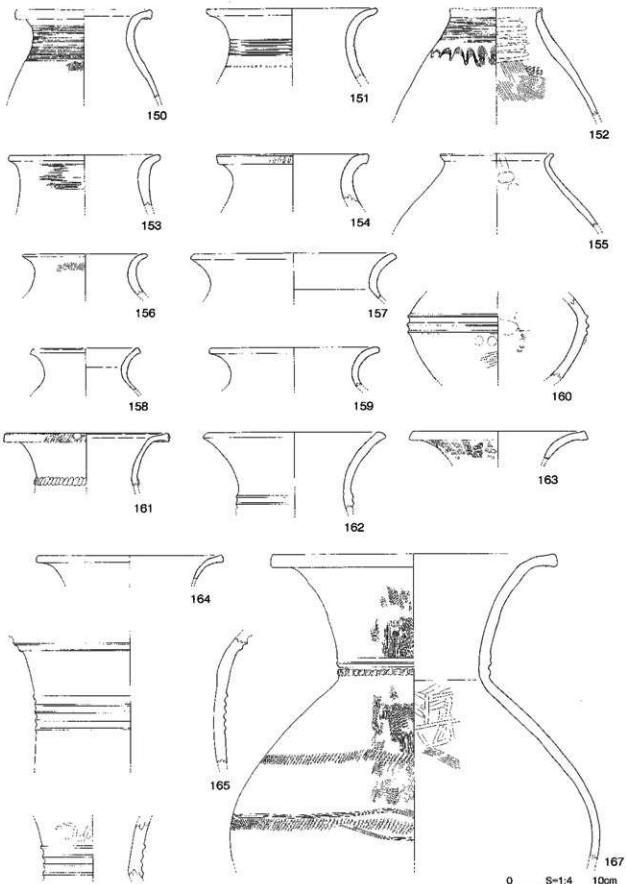
1－c環壕出土遺物は、壕底・環壕内堆積土から出土したものである。そのなかでもその多くは堆積土からのもので、弥生前期末～中期後葉の壺・甕・鉢・蓋・底部、弥生中期中葉～中期後葉の高坏・台形土器、土玉、石板状石製品、銅剣形磨製石剣、鉄剣形磨製石剣、環状石斧、黒曜石製石鏃、黒曜石製石鏃未製品、サヌカイト製石鏃、石包丁、大型石包丁、蛤刃石斧、扁平片刃石斧、砥石、槌石、黒曜石製石錐未製品、サヌカイト製楔形石器、サヌカイトの板状原材、つぶて石等が出土している。なお、弥生土器片においては、図化できなかったものが多数あり、実際出土した土器

はコンテナ44箱に及んでいる。

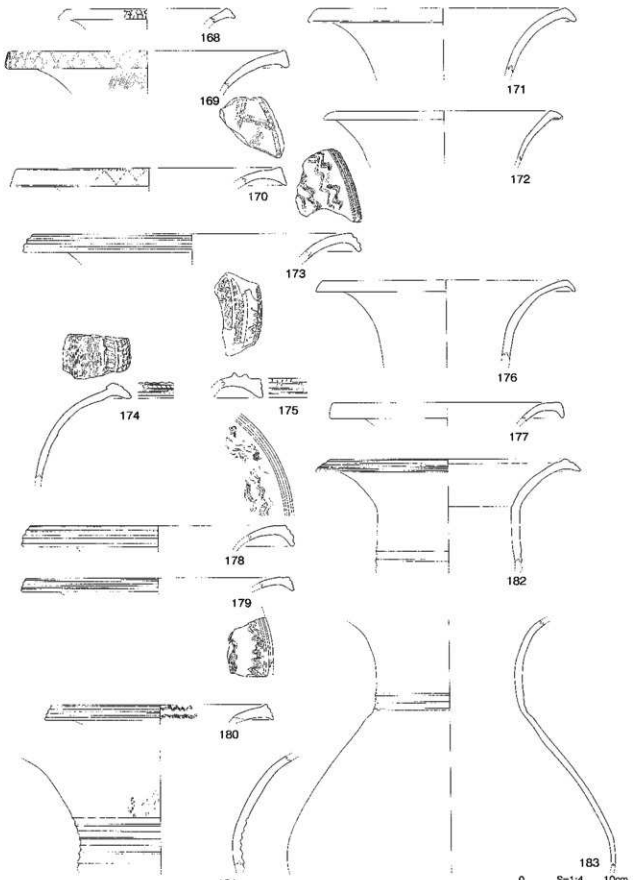
以下、簡単に出土遺物について記す。※出土地・寸法等の詳細は遺物観察表を参照。

弥生土器（第50～59図）

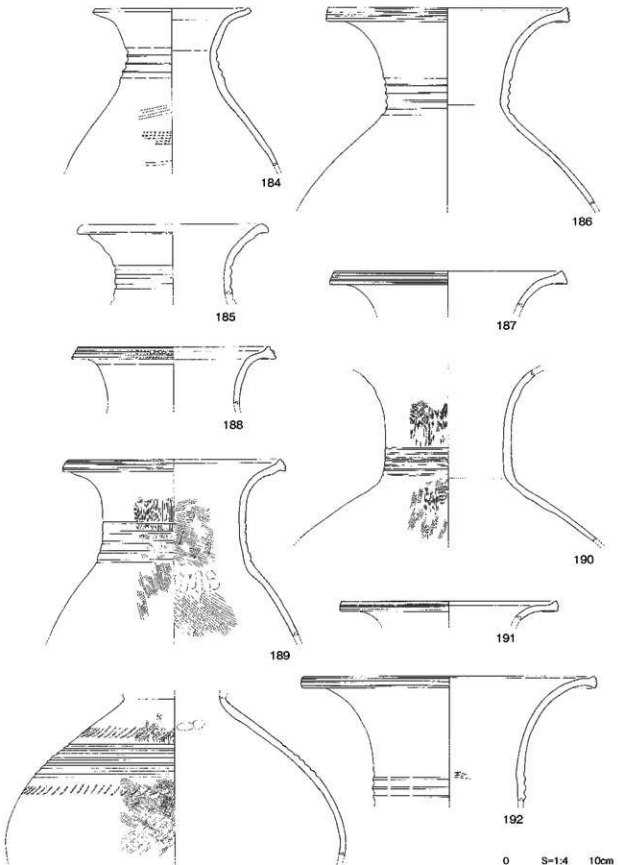
壷：151は頸部に6条のヘラ描き直線文と刺突文が施された壷の口縁部～頸部である。160は胴部に3条の突帯文が施され、円形浮文の痕跡もみられる壷の胴部である。以上の壷は、Ⅰ－4様式のものと思われる。154～159は壷の口縁部～頸部付近である。このうち、153・155は頸部に直線文の痕跡を残すもので、他のものは無文の上器である。Ⅰ－4～Ⅱ－1様式のものと思われる。150・152は頸部にクシ描き直線文と波状文を施す壷の口縁部～胴部・頸部～胴部である。Ⅱ－1様式のものと思われる。161は口縁端部に刻目と円形浮文、頸部に縄目状の突帯を施し、162は頸部に2条の突帯文を施す壷の口縁部～頸部である。163・164は施文がみられない壷の口縁部～頸部で、165・166は頸部に突帯文を施す壷の頸部である。167は頸部に指頭圧痕文帯、肩部・胴部に斜行刺突文を施す壷の口縁部～胴部である。168は口縁端部に円形浮文と刻目、169は口縁端部に斜格子文、170は口縁部内面・口縁端部に斜格子文と山形文を施す壷の口縁部～頸部である。171・172は施文がみられない壷の口縁部～頸部である。以上、Ⅲ－1～2様式のものと思われる。173～175・178・180は口縁端部に凹線文、口縁部内面にクシ描き文や波状文を施す壷の口縁部～頸部である。174・175のように口縁端部に刻目をいれるものもある。176・177は施文がみられない壷の口縁部～頸部である。以上、Ⅳ－1様式のもと思われる。179・187・188・191は口縁端部に凹線文を施す壷の口縁部～頸部である。188の口縁端部には円形浮文もみられる。181～186・189・190・192は頸部に3～7条の凹線文を施す壷の口縁部～頸部・胴部付近である。このなかには口縁端部にも凹線文を施すものもある。以上、Ⅳ－1～2様式のものと思われる。193は肩部に貝殻による刺突文、凹線文を施す壷の頸部～胴部である。194は口縁端部に凹線文、頸部に凹線文・指頭圧痕文帯・列点文を施す壷の口縁部～頸部で、195は頸部に凹線文と列点文を施す壷の頸部である。196は頸部に6条の凹線文、その下に列点文、肩部にクシ描き直線文と羽状文を施す壷の頸部～胴部である。以上、Ⅳ－1様式のものと思われる。197・198は口縁端部・頸部に凹線文を施す壷の口縁部～肩部である。199～202は壷の口縁部付近で、199は口縁下部に突帯文、200は口縁端部に凹線文と刻目、201は口縁端部と口縁下部に凹線文、202は口縁端部に凹線文と円形浮文を施すものである。以上、Ⅳ－1～2様式のものと思われる。203は頸部～肩部に波状文・凹線文・列点文・波状文を施す壷の頸部～肩部である。この壷は、外面に茶色の顔料のようなものもみえる。204は頸部に凹線文・指頭圧痕文帯、肩部～胴部に列点文・羽状文・円形浮文を施す壷の頸部～胴部である。205～217は外斜してのびる壷の口縁部と思われるもので、口縁端部は平坦に潰されているものである。205を除くすべての平坦な口縁端部には斜線や円形浮文の施文が施されている。また、口縁下部には例外なく凹線文が施されるようで、なかには粘土紐の貼り付けがみられるものもある。以上、Ⅳ－1様式のものと思われるが、これら205～217の壷は県内ではあまりみられないタイプの口縁をもつものようである。218は胴部に3条以上の突帯文を施す壷の胴部付近と思われるものである。胎土が在地のものとは明らかに違う様相をみせるもので、搬入土器の可能性が考えられるものである。このような胴部に突帯を施すものとしては、九州須玖式の壷があげられるが、詳細な検討をしていないため九州系の土器となり得るかは定かではない。219は壷の肩部で3条の突帯文とヘラ描き直線文・羽



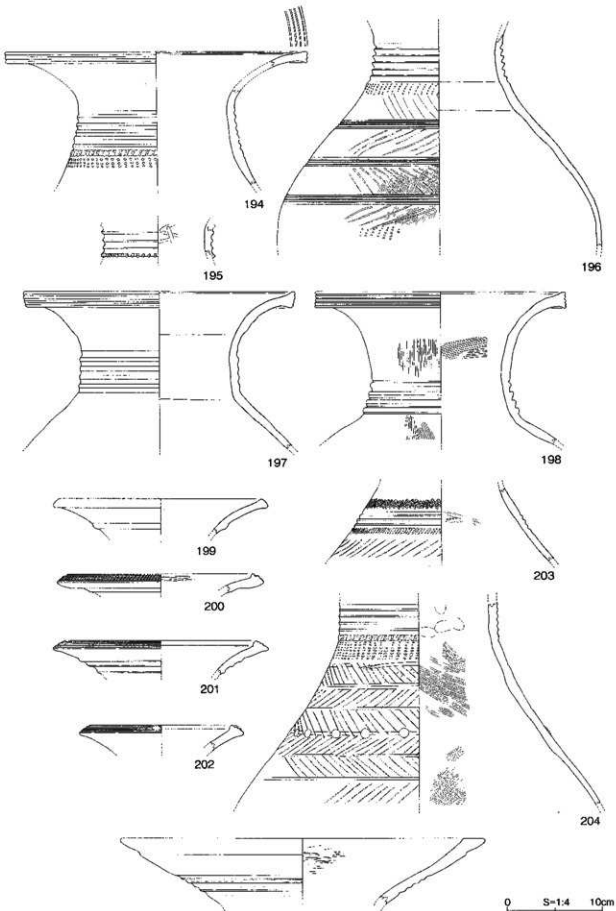
第50図　第１環壕（1−c環壕）　出土土器（１）



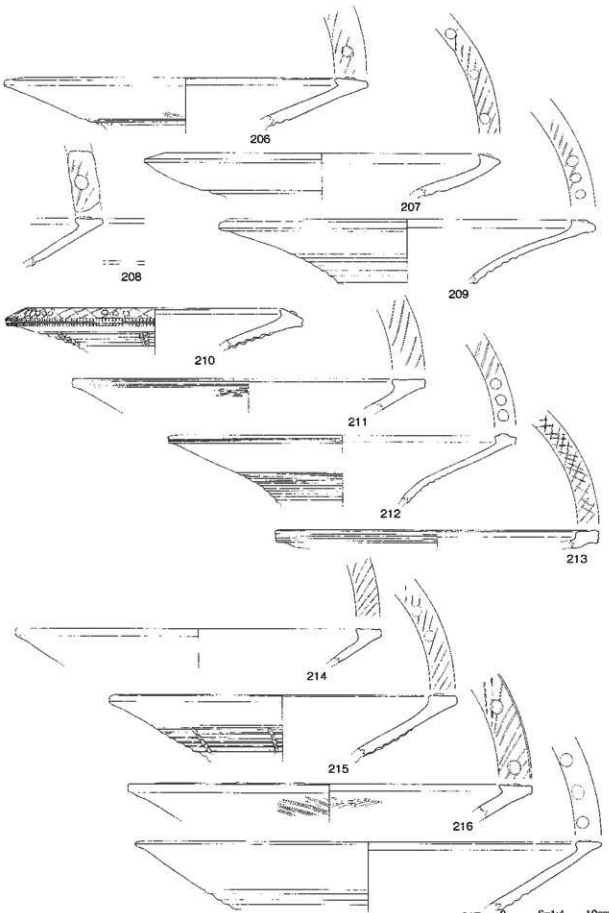
第51図　第1環壕（1−c環壕）出土土器（2）



第52図　第１環壕（1−c環壕）　出土土器（３）



第53図　第１環壕（1−c環壕）出土土器（４）



第54図　第1環壕（1−c環壕）　出土土器（5）

状刺突文が施されるものである。220は平坦に潰された口縁端部に2条の凹線文、短い頸部に縄目状の圧痕文帯を施す直口壺の口縁部～頸部である。221は口縁端部に2条の凹線文を施す壺の口縁部～頸部である。以上、Ⅲ－2～Ⅳ－1様式のものと思われる。

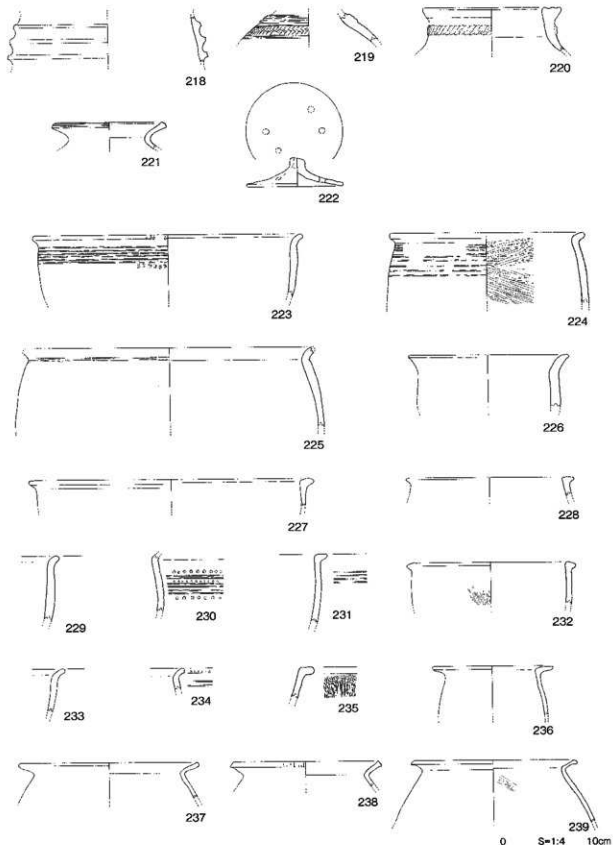
蓋：222は無頸壺の蓋と思われるもので、4穴の円孔が空けられているものである。

甕：223・224・230・231・234は頸部下にヘラ描き直線文を施す甕の口縁部～胴部である。このうち223は口縁端部に刻目、直線文下に竹管文、230は円形刺突文も施される。225は頸部に3条の沈線を施す甕の口縁部～胴部である。以上、Ⅰ－4様式のものと思われる。226～229・232・233・236は施文がみられない甕の口縁部から頸部・胴部付近のものである。229・232の外面には炭化物（煤）の付着が認められる。以上、Ⅰ－4～Ⅱ－1様式のものと思われる。237はⅢ－1様式のものと思われる甕の口縁部～頸部付近である。238・239は甕の口縁部～頸部・口縁部～胴部上である。このうち238の口縁端部には刻目が施されている。以上、Ⅲ－1～2様式のものと思われる。240は胴部に列点文を施す甕の口縁部～胴部である。Ⅲ－2様式のものと思われる。241は口縁端部に1条の凹線文を施す甕の口縁部～胴部である。外面付着の炭化物（煤）の^{14}C炭素年代測定（AMS法）からBC80±40年という測定結果がでている。[26] Ⅲ－2～Ⅳ－1様式のものと思われる。242～249は口縁端部に2条の凹線文を施す甕の口縁部～胴部付近である。このうち246は胴部に刺突文も施されている。以上、Ⅳ－1様式のものと思われる。250～253は頸部に指頭圧痕文帯を施す甕の口縁部～頸部付近である。このうち250には口縁端部に1条の凹線文も施されている。以上、Ⅲ－2～Ⅳ－1様式のものと思われる。254～262は口縁端部に2～3条の凹線文と頸部に指頭圧痕文帯が施された甕の口縁部～頸部・胴部である。このうち260は口縁端部に羽状文、262は円形浮文も合わせて施されている。以上、Ⅳ－1様式のものと思われる。263～265は頸部に指頭圧痕文帯を施す甕の口縁部～頸部である。これらはⅢ－2～Ⅳ－1様式のものと思われる。266～268は頸部に指頭圧痕文帯を施す甕の口縁部～頸部である。このうち268は口縁端部に2条の凹線文も施されている。以上、Ⅳ－1様式のものと思われる。269～271は口縁端部に3条の凹線文と頸部に指頭圧痕文帯が施された甕の口縁部～頸部付近である。このうち269・271には口縁端部に円形浮文も施されている。以上、Ⅳ－1～2様式のものと思われる。

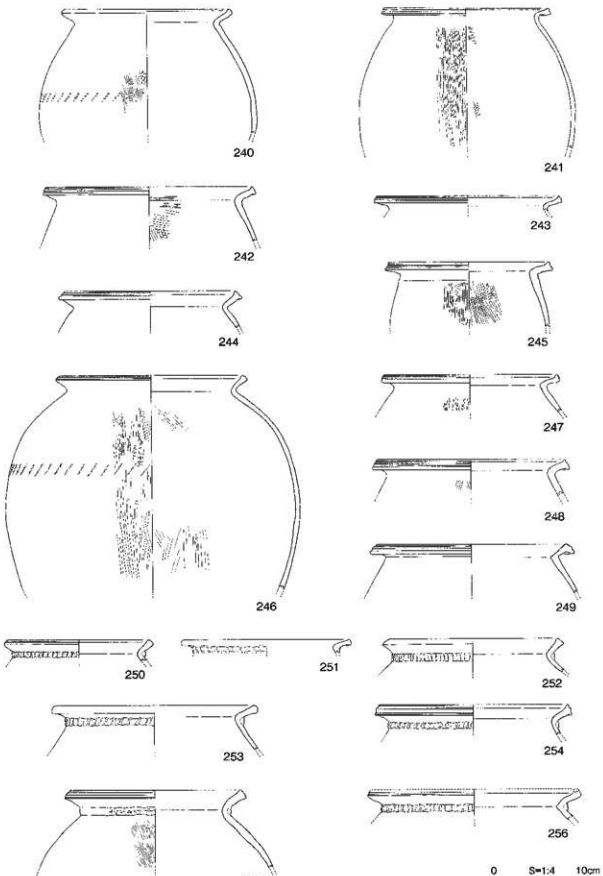
鉢：235は鉢の口縁部付近で、口縁部は逆L字状を呈するものである。

底部：272～276・300～334は壺・甕・鉢の底部である。272・273は底部に円孔があけられ、274・275・276・302・313～320の底部はハの字状に開く、上げ底となっている。また、274・275は上げ底の台の外面に凹線文が施されている。なお、300～312は胎土に大粒の砂粒を含むことからⅠ－4～Ⅱ－1様式、313～334は大粒の砂粒等の混入物を含まないことからⅢ－1～Ⅳ－2様式のものと推測される（出土した弥生土器がⅠ－4～Ⅳ－2様式のみであることから、この範疇で考察した）。

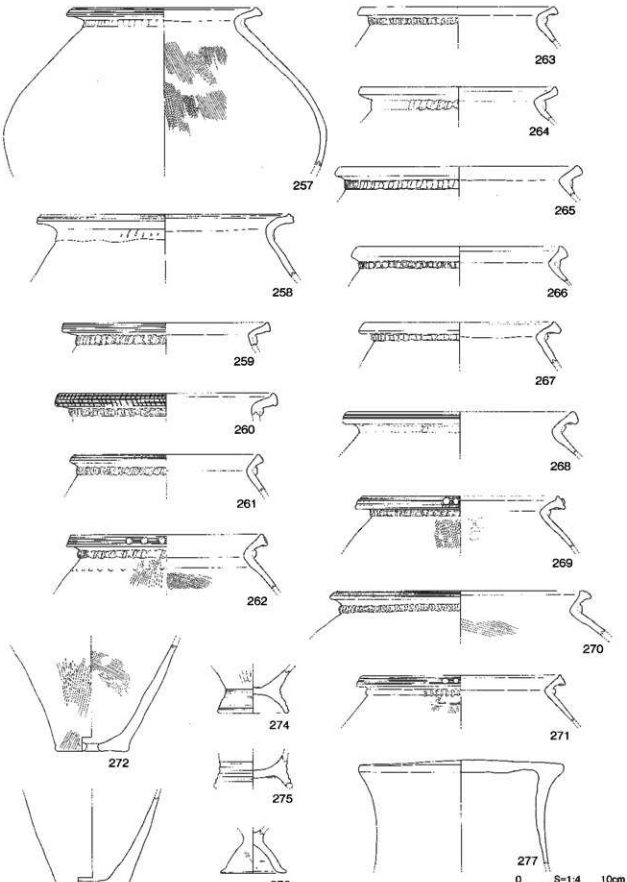
台形土器：277は台形土器の上部平坦面～脚部付近である。本遺跡ではSB－02で1点、西側自然流水路跡で1点出土しているが、これまで当地山陰では松江市の布田遺跡[9]で3点、鳥取県の中山町所蔵遺物[10]、鳥取県名和町の茶畑山道遺跡[11]、鳥取県青谷町の青谷上寺地遺跡[12]でのみ出土例が認められるものである。全国的にみても稀少なものであるが、摂津・播磨等で集中的に出土していることが知られている。[13] この種の土器は山陰ではⅢ・Ⅳ様式に限定して出土しており、器台・



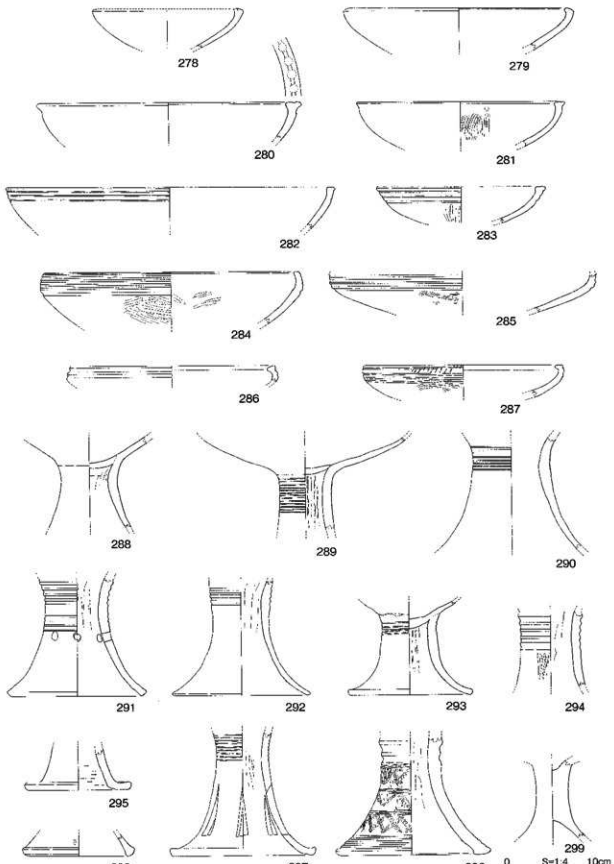
第55図　第1環壕（1－c環壕）　出土土器（6）



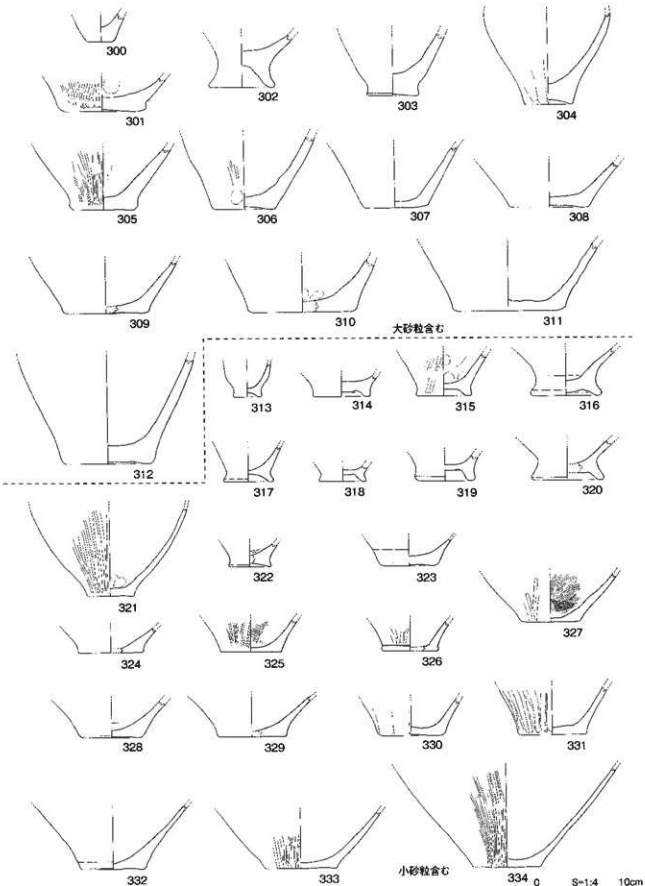
第56図　第1環壕（1−c環壕）　出土土器（7）



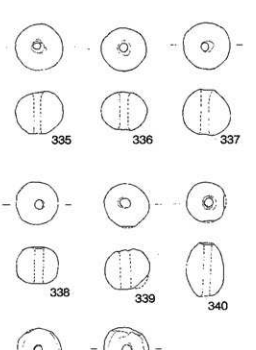
第57図　第１環壕（1−c環壕）　出土土器（８）



第58図　第１環壕（1−c環壕）出土土器（９）



第59図　第1環壕（1−c環壕）　出土土器（10）



第60図　第１環壕（１－c環壕）出土土製品（土玉）

回転台・作業台と想定されてきた土器である。近年では、広島県庄原市の和田原E地点遺跡[14]の焼失破棄住居で完形品が置かれた（据えられた）状態で出土している。この和田原E地点遺跡出土の台形土器の平坦面部分には、ドーナツ状の擦痕と粘土の付着がみられるうえ、台形土器の周辺から粘土塊や粘土の薄い広がりが認められることから、土器作りの過程の施文用途として使用されたとも想定されている。田和山遺跡出土の台形土器277については、他の遺物と同様、山頂部から転落してきたものと考えられるが、その用途は明らかではない。

高坏：278～281は高坏の坏部である。口縁端部は平坦に潰されており、このうち280には凹線文と円形浮文が施されている。Ⅲ－１～２様式のものと思われる。282・283も高坏の坏部である。口縁端部は平坦に潰され、外面に３条の凹線文を施すものである。Ⅳ－１様式のものと思われる。284～287も高坏の坏部である。口縁は内傾し、口縁端部は平坦に潰されている。口縁外面には凹線文が施され、287には列点文もみられる。これらはⅣ－１～２様式のものと思われる。288は高坏の坏部下半～脚部付近で、円盤充填によって作られたものである。Ⅲ－１～２様式のものと思われる。289～295は高坏の坏部下半～脚部・脚部である。このうち289～294は脚部に凹線文・直線文が施され、291には８孔の円形の透かし孔がみられる。Ⅳ－１様式のものと思われる。296～298は高坏の脚部である。このうち297には直線文が施され、６方向に三角形透かし孔もみられる。また、外面には朱色の顔料も認められる。298には３条の凹線文と直線文・斜格子文が施されている。以上、Ⅳ－１～２様式のものと思われる。299は脚部内が筒状とならない高坏の脚部である。

土製品（第60図）

土玉：335～342は祭祀遺物と考えられている土玉である。335～339のような円形のものと340の楕円のもの、341の円形で厚さが薄いもの、342の紡錘形のものと、さまざま形のものが出土している。本遺跡内では他に山頂部・第２環壕・第３環壕・小ピット群１・SI－06・SB－14でも出土している。

石器（第61～74図）

石板状石製品[2]：343は０区から弥生土器やつぶて石と混在して出土したものである。4.1×3.3cmを測る歪な形で残存しており、原形の大きさは分らないが方形を呈したもののであったと推測される。石材は凝灰岩で硬質なものである。色調は片側外面が灰色で反対側の面及び、内面は白色である。片側の灰色面には直線状の光沢がみられ、この面を直線方向に磨った（研いだ）ような痕

を残している。また、反対側の面の一部には研磨した痕がみられ、側面の片側にも斜め方向の研磨痕が認められる。国内の弥生期の石器にはあてはまるものがなく、楽浪郡出土の石硯にその形態が類似するものである。[37-40] C区1－a環壕掘り始め跡の堆積土からも同様に推測される石板状石製品95が出土しているが、石材・色調などは相違するものである。

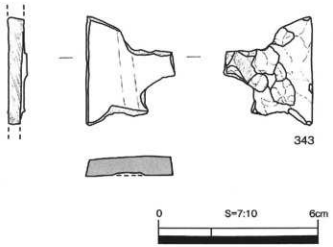
銅剣形石剣（有樋式磨製石剣）：344は青銅器の銅剣を模したものと考えられる石剣で、祭祀用遺物と想定されるものである。非常に丁寧な作りが成されたものであり、石材も他の石器ではあまりみられない良質な黒色頁岩を用いて作られている。当地域においては、島根半島に比較的良質な黒色頁岩を求めることができるようである。[15] 残存する部分は元部のみであるが翼・脊・関をよく残すものである。形式的には1式に分類されるようであるが、1式の特徴でもある関の双孔はみられない。[16] これら双孔がないものは、山陰地方の特性をみせるものなのかもしれない。[17]

鉄剣形石剣：345は鉄剣形の磨製石剣の破片である。刃を作り出す研磨は縁辺部においておこなわれ、鎬はみられないものである。

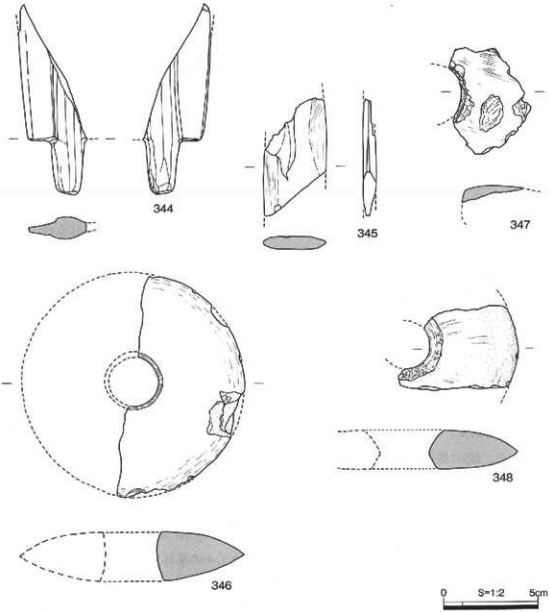
環状石斧：346～348は出土数は少ないもので、民俗例から円孔に木棒を入れ、戦闘指揮棒として使われたとも想定されているものである。本遺跡では第2環壕・平坦加工面遺構でも出土しており、総数5点を数えるがいずれも欠損品である。

石鏃：349～382・386～442は黒曜石製34点（349～382）、サヌカイト製56点（386～442）の石鏃である。石鏃自体が比較的小さいことや、欠損品もあったことを加味すると調査時に見落としてしまった可能性が考えられることから、実際にはこれ以上の量の石鏃が点在していたものと思われる。なお、石鏃は後述する他の遺構においても多く出土しており、本遺跡内出土総数は200点を超えている。形態は凹基式・平基式・凸基1式・凸基2式と様々であるが、凸基式にはほとんどがサヌカイト製のものである（黒曜石製は376の1点のみ）。また、特に黒曜石製にみられるが、非常に細かい剥離がおこなわれ、側辺が鋸歯状となっているものも多い。先端部は欠損するものが多いことから実際に使用されたものと考えられる。

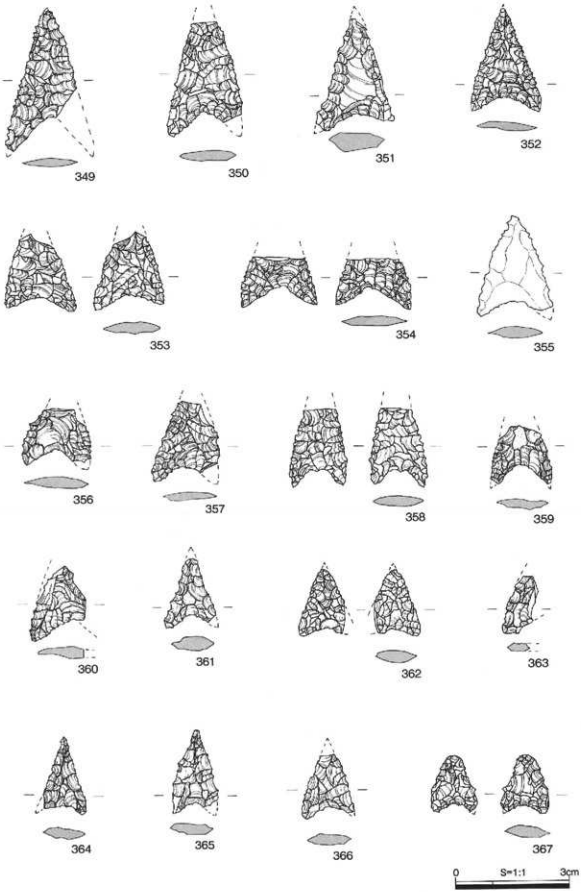
その他の石器：383～385は黒曜石製の石鏃未製品である。443～448は石包丁の欠損品で、443・444・447・448には穿孔がみられる。449は大型石包丁の欠損品で、450は石包丁の刃部付近である。451～454は蛤刃石斧の欠損品で、このうち451には柄装着痕とみられる痕跡が認められる。455・456は扁平片刃石斧の欠損品と完形品である。457～463は砥石と思われるもので、ほとんどは環壕内堆積土の上層からの出土品である。464は用途不明の石製品であるが、石板状石製品343に類似しているものである。表面に墨ともみられる痕跡が認められる。この遺物も環壕内堆積土の上層から出土している。465は槌石（ハンマーストーン）である。466は大型の砥石で、環壕内堆積土の上層から出土している。467はサヌカイト製の石匙である。468は刃器片で469は板状大型石材の石片である。両者ともサヌカイト製で原材産地分析により金山産であることが分っている。470は黒曜石製の石錐未製品である。471・472はサヌカイト製の楔形石器で、473は楔形石器の可能性が考えられるものである。475は板状石材として搬入されたサヌカイトの原材で、[18] 原産地分析により金山産であることが分っている。山陰地方の縄文時代においては、日野川流域・江の川流域に出土例が確認されているが、[19] 弥生時代の出土例は現在のところ、鳥取県の青谷上寺地遺跡[20] に類似するものが確認できるのみである。山陰地方に搬入された弥生期のサヌカイトの搬入形態を考える上で貴重



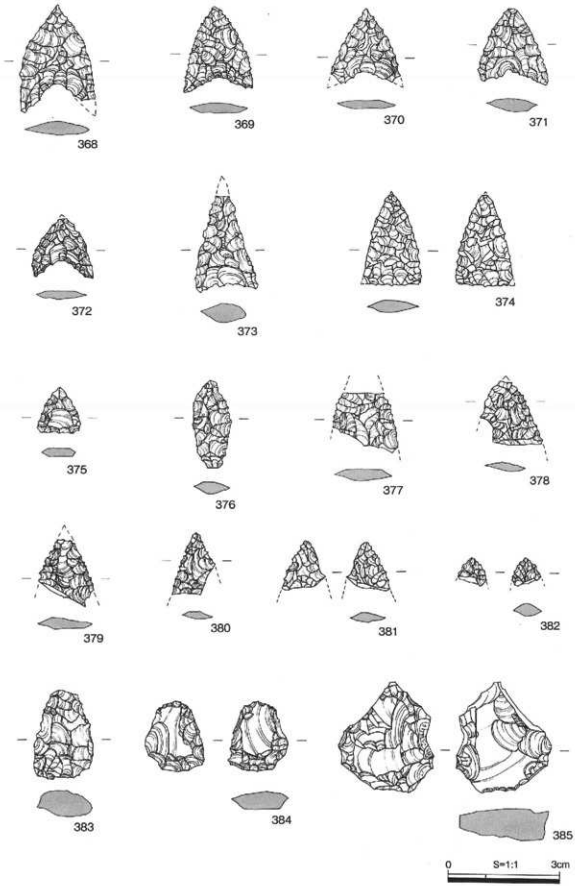
第61図　第１環壕（１－c環壕）　出土石製品



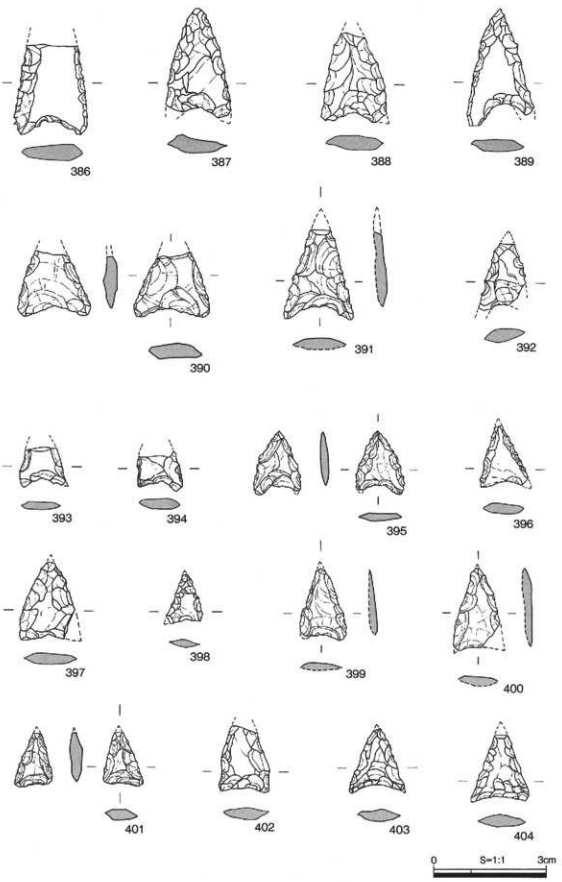
第62図　第１環壕（１－c環壕）　出土石器（石剣・環状石斧）（１）



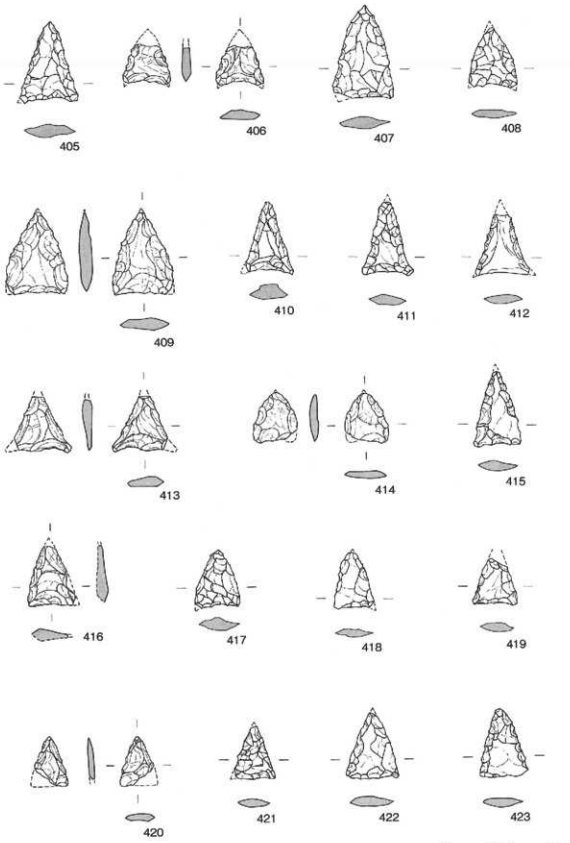
第63図　第１環壕（1−c環壕）　出土石器（石鏃）（２）



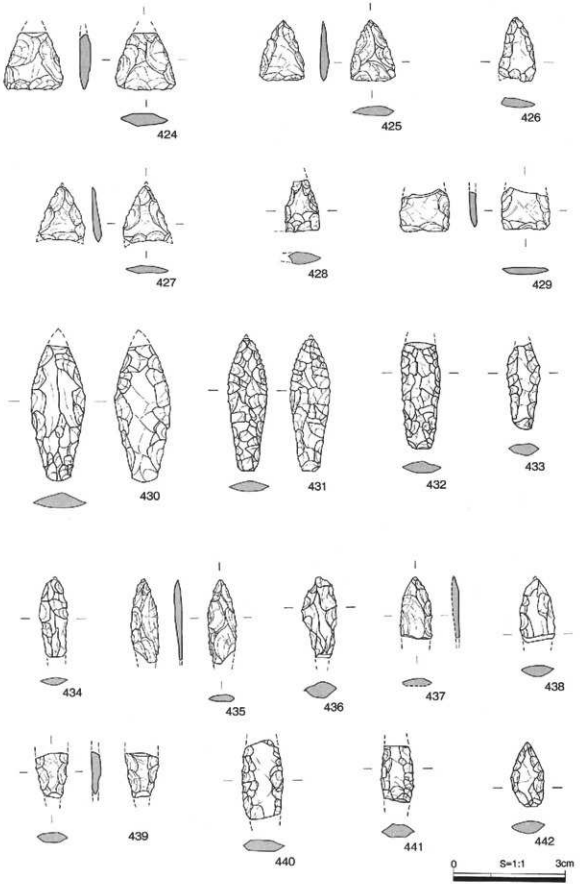
第64図　第１環壕（1－c環壕）　出土石器（石鏃）（３）



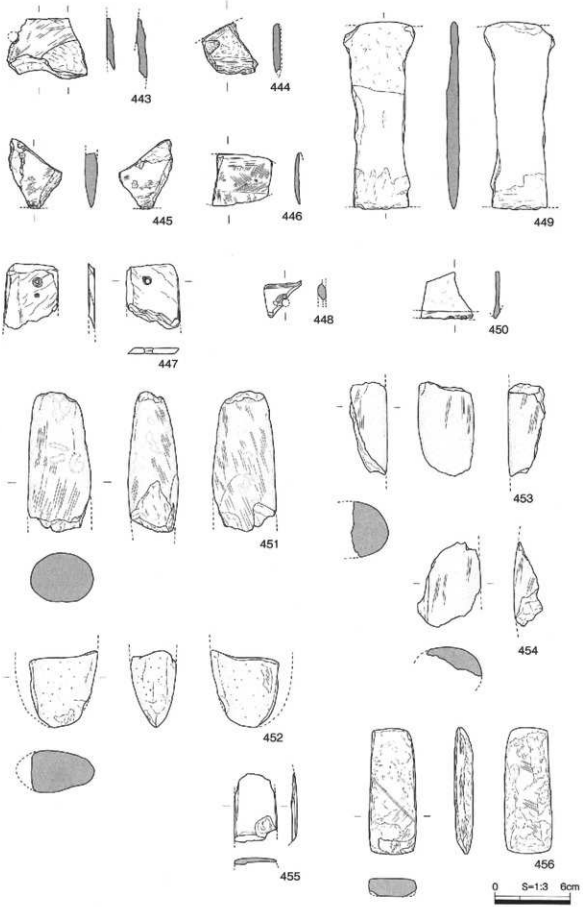
第65図　第１環壕（1―c環壕）　出土石器（石鏃）（４）



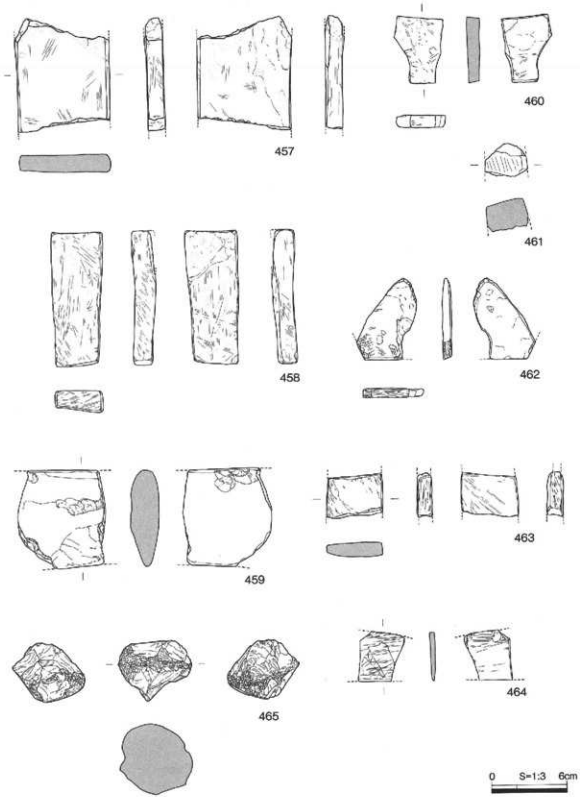
第66図　第１環壕（1－c環壕）　出土石器（石鏃）（５）



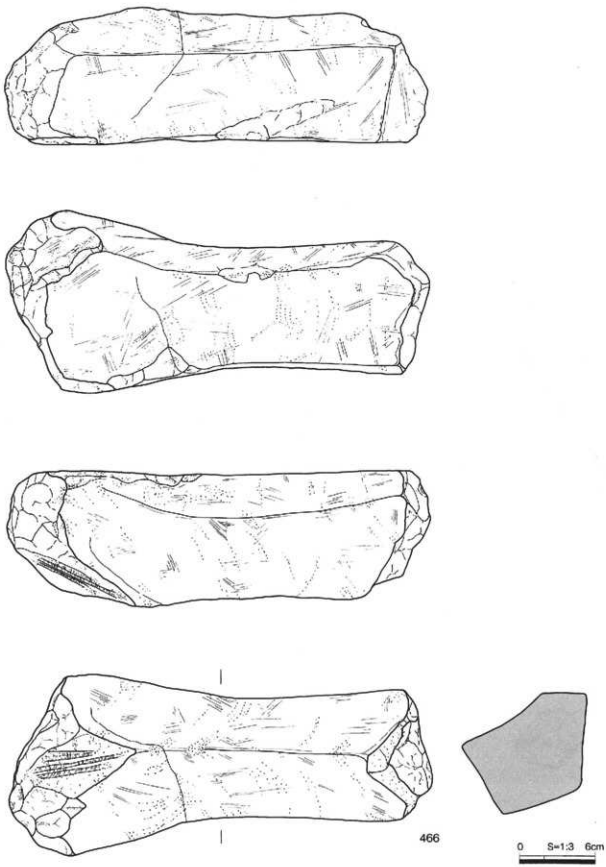
第67図　第1環壕（1−c環壕）　出土石器（石鏃）（6）



第68図　第１環壕（1−c環壕）　出土石器（７）



第69図　第１環壕（1ーc環壕）出土石器（８）

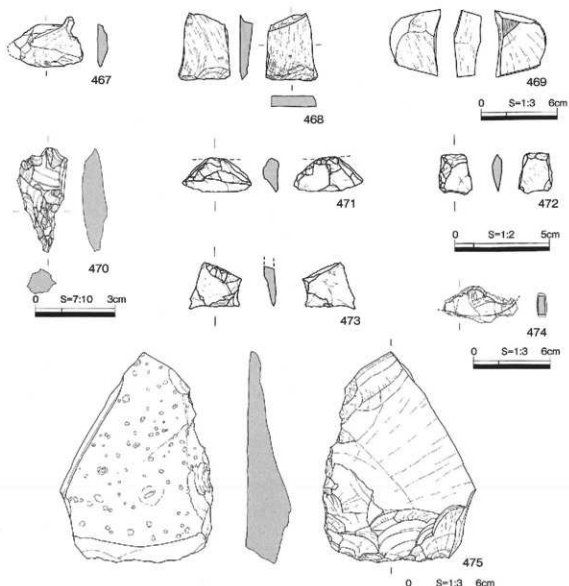


第70図　第１環壕（1−c環壕）　出土石器（９）

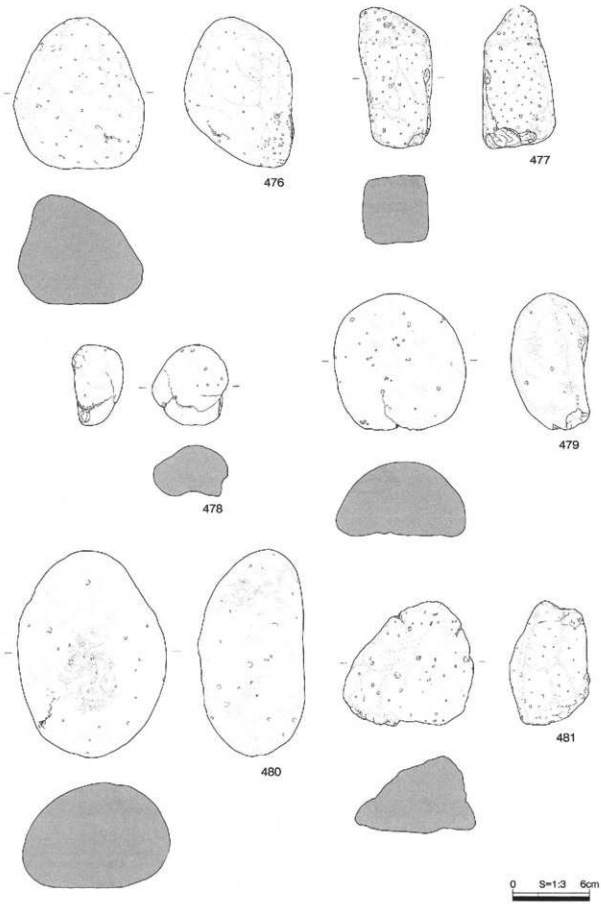
な資料となり得るものである。476～484は礫石（つぶて石）である。約6～20cmの大小様々なものがある。なお、このつぶて石は1－a環壕で出土している遺跡内の岩脈から採取できる角ばった石とは違い、角の取れた石が大半を占めるものである。この石は本遺跡の西を流れる忌部川から採取されたものと考えられ、[21] つぶて石採取方法が1－a環壕・1－b環壕時から変化させている状況が窺われるものである。485・486は旧石器時代と思われるもので、485は水晶の楔形石器、486は同じく水晶の縦長剥片素材である。[22]

鉄器（第71図）

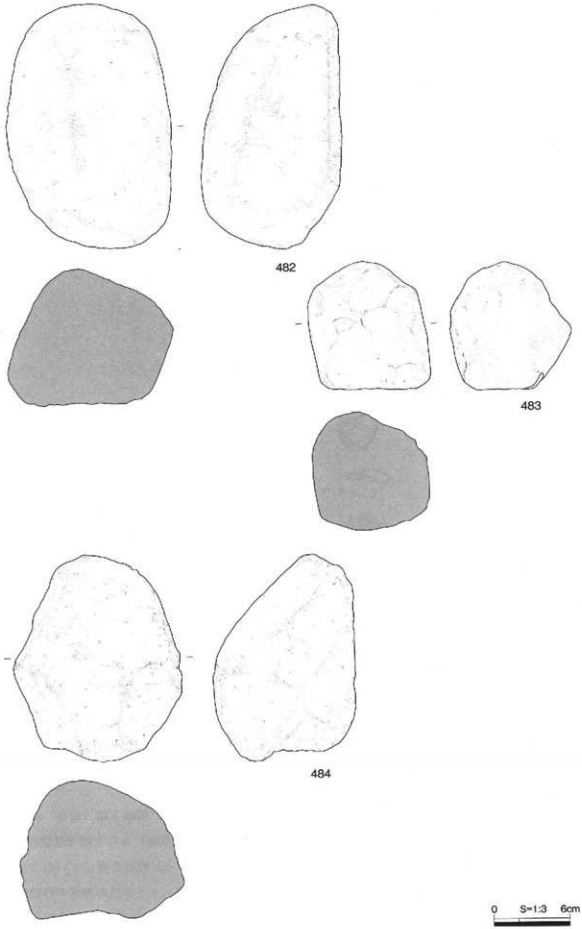
474は火打ち金の欠損品と思われるもので、中央上に孔の痕跡がみられる。出雲市の古志本郷遺跡[23]や三刀屋町の馬場遺跡[24]において、同様な遺物が出土している。



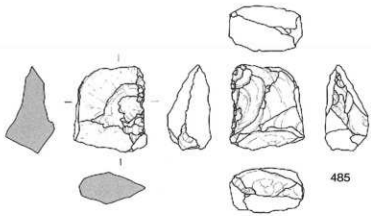
第71図　第1環壕（1－c環壕）出土石器・鉄器（10）

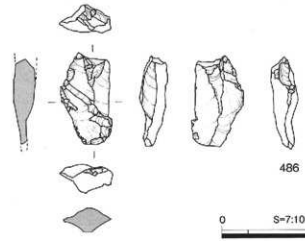


第72図　第1環壕（1−c環壕）　出土川原石（つぶて石）（1）



第73図　第１環壕（1−c環壕）出土川原石（つぶて石）（２）





第74図　第１環壕（１−c環壕）　出土旧石器

第２環壕（第40〜42図）

第２環壕は、１−c環壕から斜面下方に８〜10mの間隔をあけたところに作られたもので、１−c環壕の形状に従う形で山頂部を一周するものである。東側の一部では、18mに渡って環壕が途切れる場所がみられるが、この場所では、第２・３環壕が地滑りによって斜面下方に2.8m平行移動している痕跡が確認されていることから、第２環壕も本来は全周するものであったと思われる。また、この環壕内出土土器と１−c環壕出土土器が接合したことや、両者の埋土中の出土土器に時期差がみられないことから、１−c環壕・第２環壕は同時期に機能し且つ、廃絶したものと考えられる。

検出した環壕の総延長は約240m（地滑りで消滅した範囲は含まない）、環壕下端（壕底）幅は約0.5〜３m、上端（環壕肩）幅は約２〜６m、環壕の深さである下端（壕底）から上端（環壕肩）の最大高は、1.5mを測り、環壕の断面形はU字状・V壕字状と場所によって形状を変えていることが確認されている。環壕の基盤はほとんどの場所が地山となっているが、１〜３区の環壕の外側肩は土塁状に土が盛られている状況が窺える。これは１〜３区が環壕を作る以前に谷状地形を成していたことから、土を盛ることでしか環壕肩を作り出せなかったことに起因するものと考えられる。こ

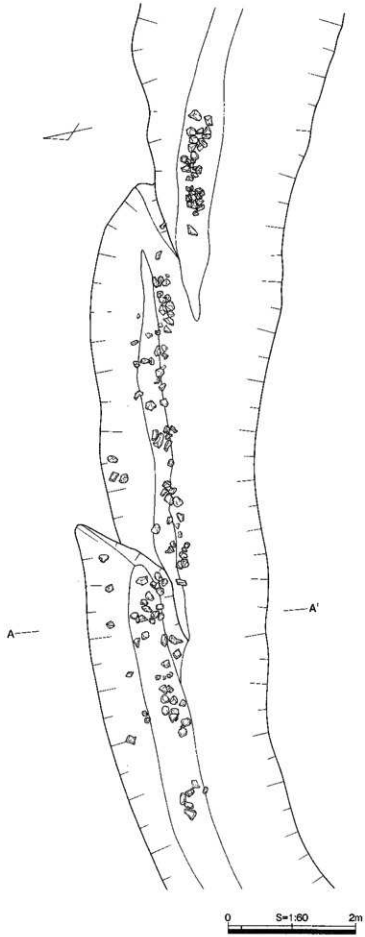
の場所の環壕は「掘って作る環壕」というより「土塁によって作られた環壕」と表現したほうが適切なものなのかもしれない（但し、環壕底付近は地山まで掘られている）。その他、B区付近で環壕が斜め方向にズレている箇所を確認している。この環壕のズレは、本遺跡内でみつかっている断層によるものであることが分っている。

遺物は、埋土層及び、環壕底面から弥生前期末～中期初頭の壺・甕、弥生中期中葉～中期後葉の壺・甕・把手・高坏・底部、土玉、環状石斧、黒曜石製の石鏃、サヌカイト製の石鏃、石包丁、蛤刃石斧、砥石、旧石器時代と思われる剥片、つぶて石等が出土している。つぶて石の出土数は1－c環壕より減少し、約600個が出土している。これら遺物は壕底からの出土が少なく、そのほとんどは埋土層からの出土である。その他、環壕内上層の埋土からは、須恵器片が少々出土している。なお、出土遺物は図化できなかったものも多数あり、出土遺物はコンテナ12箱に及んでいる。

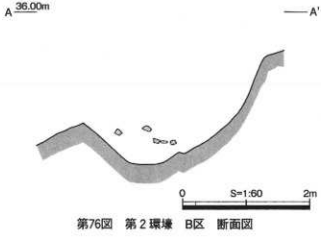
以下、各区個別の調査結果について述べる。

第2環壕　B区（第40・75・76図）

第2環壕の北側付近である。1－c環壕から8mの間隔をあけて斜面下方側に作られており、後述する第3環壕との間隔も8mを測るものである。環壕の断面形はU字状を呈し、環壕底面はL＝34～34.4mを測る。また、環壕の下端（壕底）幅は25～65cm、上端幅は2.8m、環壕の下端（壕底）から上端にあたる外側の環壕肩までの高さ（環壕の深さ）は約1.7mを測っている。環壕の外側肩は流



第75図　第2環壕　B区　平面図



第76図　第２環壕　B区　断面図

失等のため当初より低くなっているようであり、環壕が機能していた時はもう少し高いものであったと思われる。環壕の基盤は地山となっており、環壕内の埋土は、自然堆積によるものである。なお、この場所においては、長さ８m分の環壕がその形状を保ったまま東側を外側（斜面下方側）に振る状態でズレている状況を確認している。このズレた環壕は、土器および、つぶて石の出土地が環壕形状に従う形であったことから、第２環壕埋没後にズレたものと思われ、そのズレの要因は本遺跡内にある断層に起因する表層すべりであることが分かっている。[25] なお、この外側（斜面下方側）に位置する第３環壕においても断層のラインに沿ってズレを起こしている箇所が認められている。

遺物は、環壕底面及び環壕底から10～20cm上で、弥生中期中葉～中期後葉の壺499・500等がつぶて石と混在して出土している。また、環壕内堆積土から弥生中期中葉～中期後葉の壺504・512・甕521・高坏530・底部536・538が出土している。なお、出土した弥生土器はみな破片である。

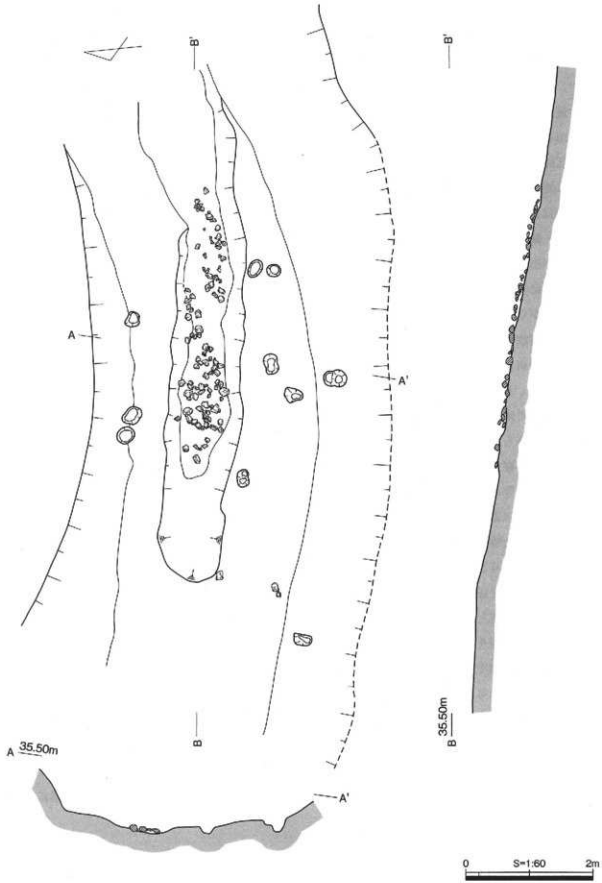
第２環壕　４区（第40・77図）

第２環壕の南側付近である。１－c環壕から平行距離で約10mの間隔をあけてこの外側に作られている。後述する第３環壕とも平行距離約８mの間隔をあけている。環壕の断面形は緩やかなU字状を呈し、環壕底面はL＝32.5～33.8mを測るものである。環壕の下端（壕底）幅は2.6～３m、上端幅は約６mを測るもので、第２環壕内では最大の幅を測るところである。環壕の下端（壕底）から上端にあたる外側の環壕肩までの高さ（環壕の深さ）は、約1.5m以上を測るものと思われる。環壕の基盤は地山となっており、環壕内の埋土は自然堆積によるものである。なお、この第２環壕の壕底からは、浅いピットを10穴検出している。このピットが掘られた面については、明確にすることができていないが、それぞれのピットの深さが５～10cm程度と浅いものであることから、環壕がある程度埋まったところから掘られたものとも推測できる。その他、環壕底の中央に環壕に添う形の溝状の浅い窪みを検出しているがその性格は明らかではない。

遺物は、環壕底面でつぶて石を検出している。他の環壕の場所では大半が壕底より浮いた状態で出土しているが、この場所は壕底面からの出土が多いものである。その他、環壕内堆積土から弥生中期中葉～中期後葉の壺494・495・511・高坏526・底部535、サヌカイト製の石鏃551等が出土している。なお、これら出土遺物はみな破片である。

第３環壕（第40～42図）

第３環壕は、第２環壕から平行距離で８m程度の間隔をあけた斜面下方側に位置し、１－c環壕・第２環壕の形状に従う形で出頂部を一周するものである。東側においては30mに渡って環壕が途切れる場所が存在するが、前述の第２環壕と同様、この場所では地滑りの跡が確認されていることから、本来は環壕が続いていたものと思われる。なお、１－c環壕・第２環壕・第３環壕の埋土中の出土土器に時期差がみられないことから、これら環壕は同時期に機能し且つ、廃絶したものと考え



第77図　第２環壕　４区　平面図・断面図

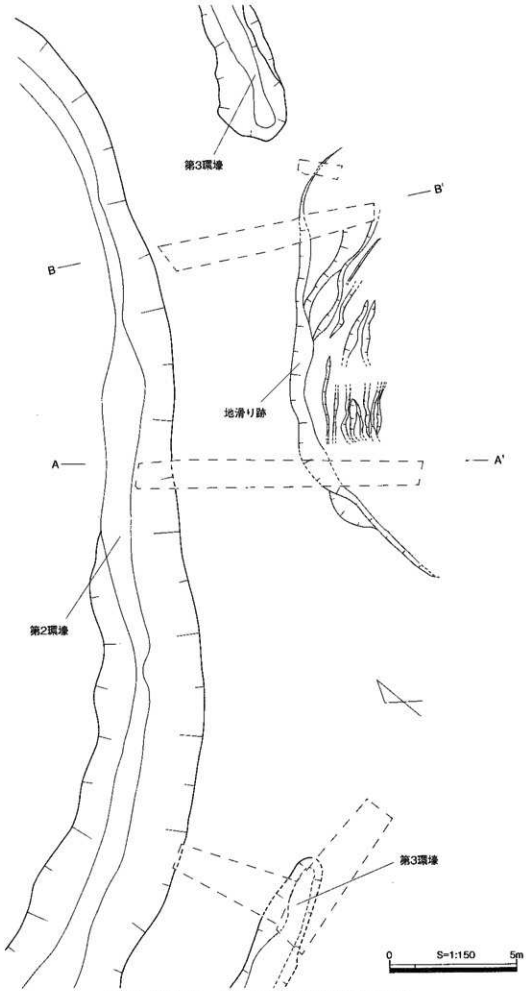
られる。検出した第３環壕の総延長は243m（地滑りで消滅した範囲は含まない）、環壕下端（壕底）幅は0.2～0.8m、上端（環壕肩）幅は1.6～4.3m、環壕の深さである下端（壕底）から上端（環壕肩）の最大高は、約２mを測る。環壕の断面形はU字状・V壕字状と場所によって形状を変えているようであるが、V字状を呈する場所が多い。環壕の基盤は、ほとんどの場所が地山となっているが、第２環壕と同様、１～３区の環壕の外側肩は土塁状に土が盛られている状況が窺える。これは前述の第２環壕と同様な理由に起因するものと考えられる。その他、第３環壕の南側については、山頂部丘陵と対向する南側丘陵に上がる形で検出している。これは１－c環壕・第２環壕が山頂部丘陵の斜面に従って作られている状況から様相を異にするものである。また、詳細は後述するが南東側において第３環壕が途切れている場所も確認されている。

遺物は、埋土層及び、環壕底面から弥生前期末～中期初頭の壺・甕、弥生中期中葉～中期末の壺・甕・鉢・高坏・底部、土玉617、黒曜石製の石鏃、石包丁、柱状片刃石斧、砥石、敲石、つぶて石等が出土している。つぶて石の出土数は第２環壕より減少し、100個以上が出土している。これら遺物は壕底からの出土が少なく、そのほとんどは埋土層からの出土である。その他、環壕内上層の埋土からは、須恵器片が少々出土している。なお、出土遺物は図化できなかったものも多数あり、出土遺物はコンテナ７箱に及んでいる。

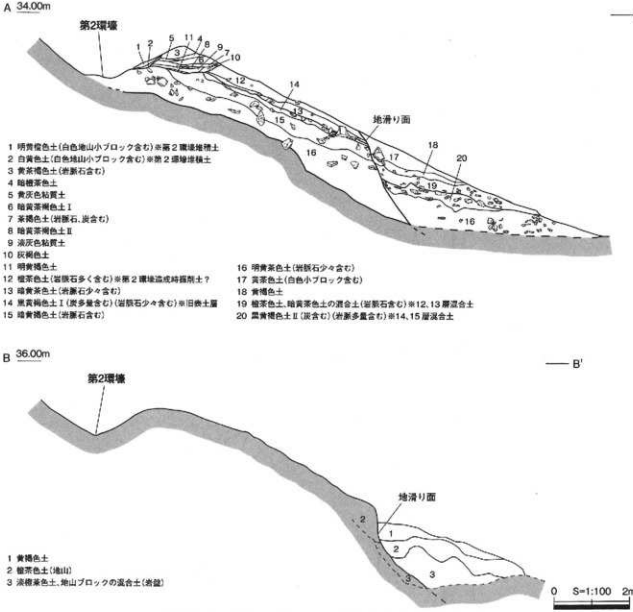
以下、南東側の第３環壕途切れ部について述べる。

第３環壕　４～５区（環壕途切れ部）（第40・78～81図）

第３環壕の南東側の環壕が途切れているところで、環壕が存在しない区間は約28mを測る。当初から環壕が作られていなかったとすれば、確認されていない山頂部への通路もしくは、これに付随する施設が存在する可能性が考えられるものとして調査をおこなった。調査の結果、期待された山頂部への通路等の痕跡は検出することはできなかったが、この北東側にて幅17mにおよぶ地滑りの跡を確認している。土層断面からは地滑り断層のラインが明瞭にみられ、このラインに沿って第２環壕が作られた時の旧表土が約50～60cm地中下方に落ち込んでいる状況を確認することができた。なお、この地滑りした旧表土の平面観察からは、滑落崖に堆行する小亀裂によって「洗濯板」のように波状の形状を成している状況が窺える。[35] 西側および北東側の第３環壕が止まる先端部分においては、両端とも環壕が存在しない方向の壕底が傾斜を変え、上がっていく状況が確認されている。これは環壕を意図的に掘り止めたことを示すもで、当初からこの区間は環壕が存在していなかったものと推測できるものである。環壕内堆積土もこの環壕を掘り止めた壕底形状に自然堆積した状況をみせており、地滑り等によって環壕が欠落したものではないことが分かっている。この区間に環壕が作られなかった要因については、前述のとおり、そこが地滑りを起こす軟弱地盤であったことから壕を作るのを止めた・諦めたとの解釈も出来得るが、３本の環壕を作るという大土木工事をしてきたことを考えると軟弱地盤であったにせよ、ここに壕を作ることは十分可能であったと思われる。この区間の環壕の掘り止め、いわば環壕の解放は概念的（宗教・祭祀等）な要素によるものであった可能性も推測できる。



第78図　第３環壕　４区～５区（環壕途切れ部）平面図



第79図　第３環壕　４区～５区（環壕途切れ部）土層断面図

第２環壕　出土遺物（第82～87図）

第２環壕から出土した遺物は、壕底・環壕内堆積土からのものである。このなかでもその多くは堆積土からのもので、弥生前期末～中期末の壺・甕、弥生中期中葉～中期末の把手・高坏・底部、土玉、環状石斧、黒曜石製の石鏃、サヌカイト製の石鏃、石包丁、蛤刃石斧、砥石、旧石器時代と思われる剥片、つぶて石等が出土している。なお、弥生土器片においては、図化できなかったものが多数あり、実際出土した土器はコンテナ12箱におよんでいる。

以下、簡単に出土遺物について記す。※出土地・寸法等、詳細は遺物観察表を参照。

弥生土器（第82～84図）

壺：487は口縁端部に羽状文、口縁内面に円形と山形の刺突文を施す壺の口縁部で、488は施文がみられない壺の口縁部～頸部である。以上、Ⅰ－４～Ⅱ－１様式のものと思われる。490は朝顔状に開く口縁内面に、渦巻状の突帯文・円形浮文・波状文を施す大型の壺の口縁部～頸部である。Ⅲ